# 研究 No. 12

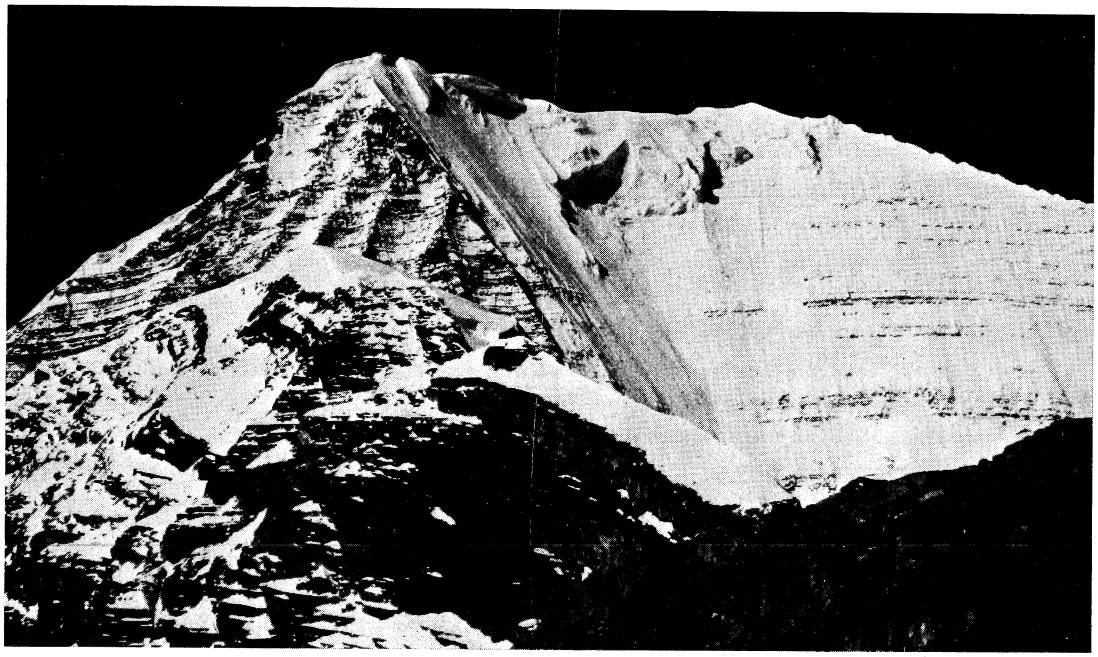
KONAN·ALPINE·CLUB

# 時報 第十二号

甲南大学山岳部
甲南高校山岳部

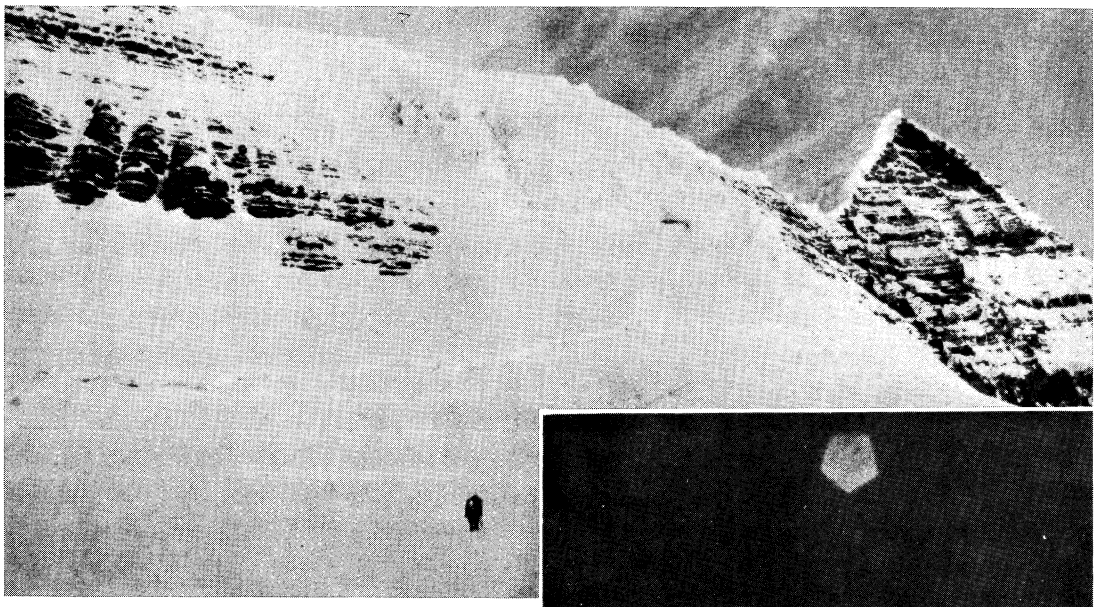
山は天と地のきずな
岳人は心

N

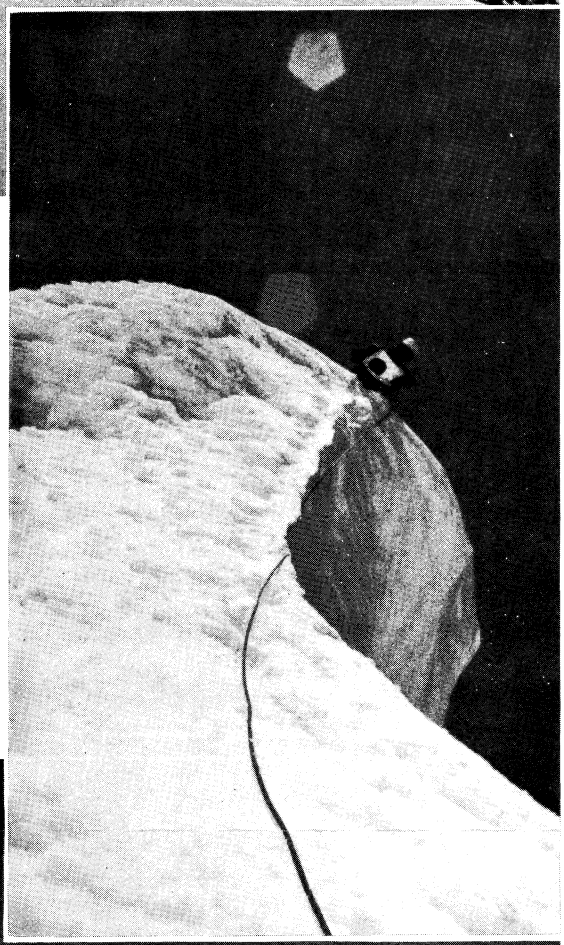


Robson 氷河より Mt. Robsonを望む（井上撮影）

They were there ……

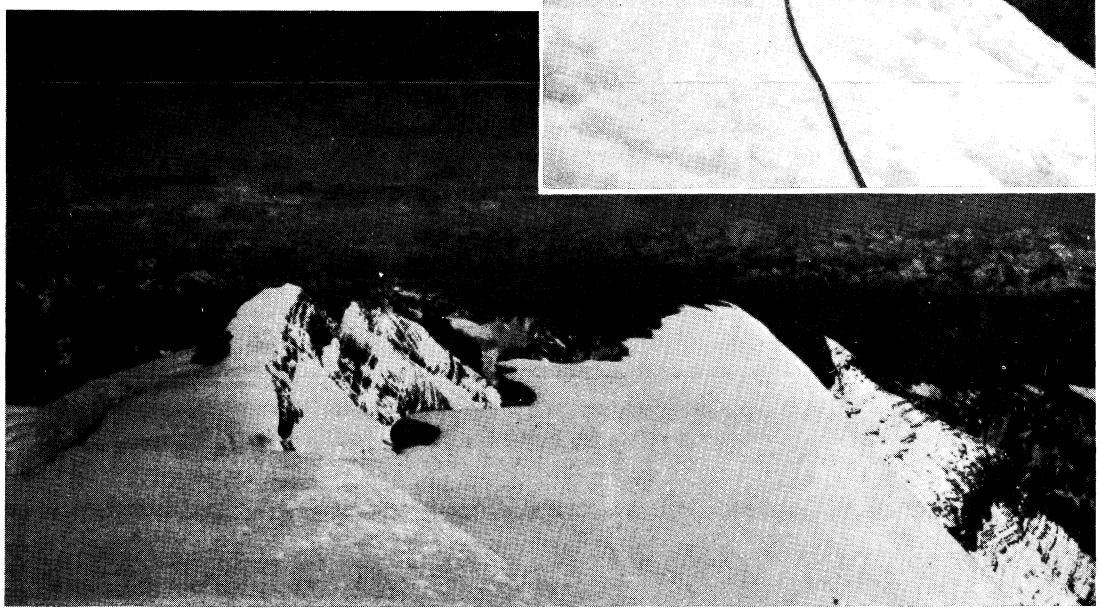


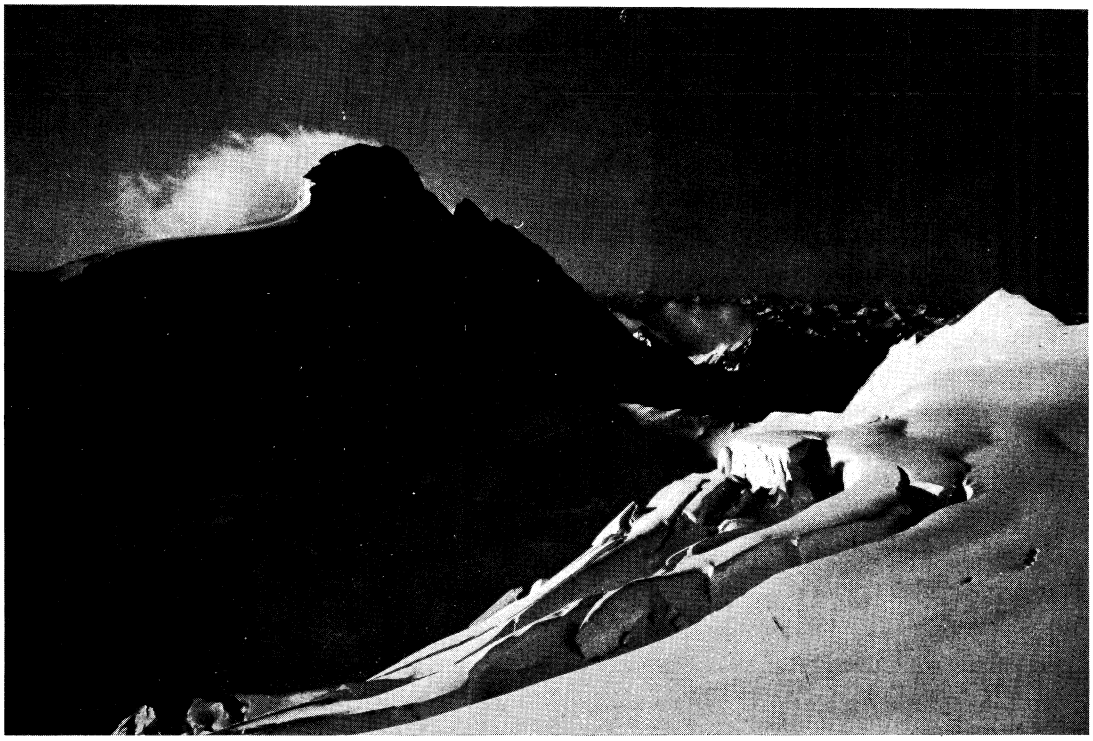
Mt. Robson東フェース及び南東稜



Mt. Robson頂上
7月28日

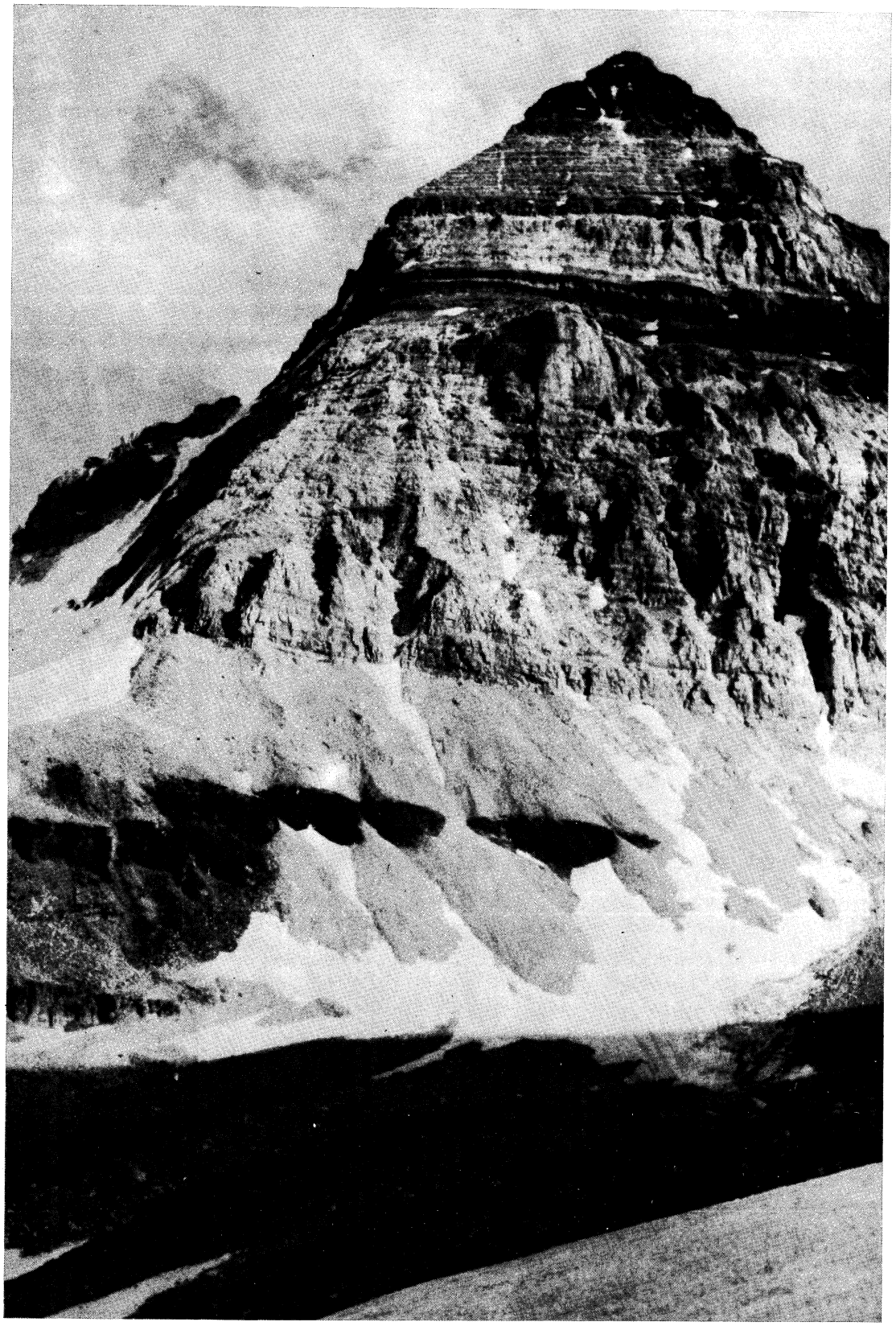
南東稜



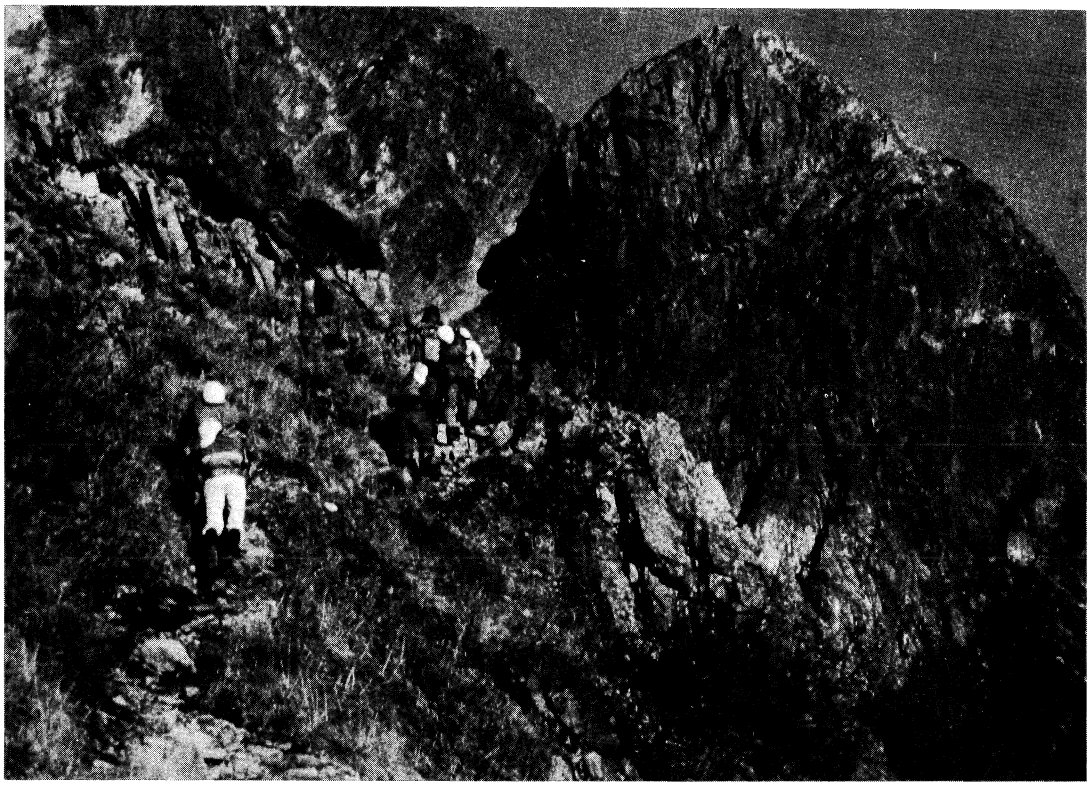


Mt. Resplendent (11240feet) 井上撮影

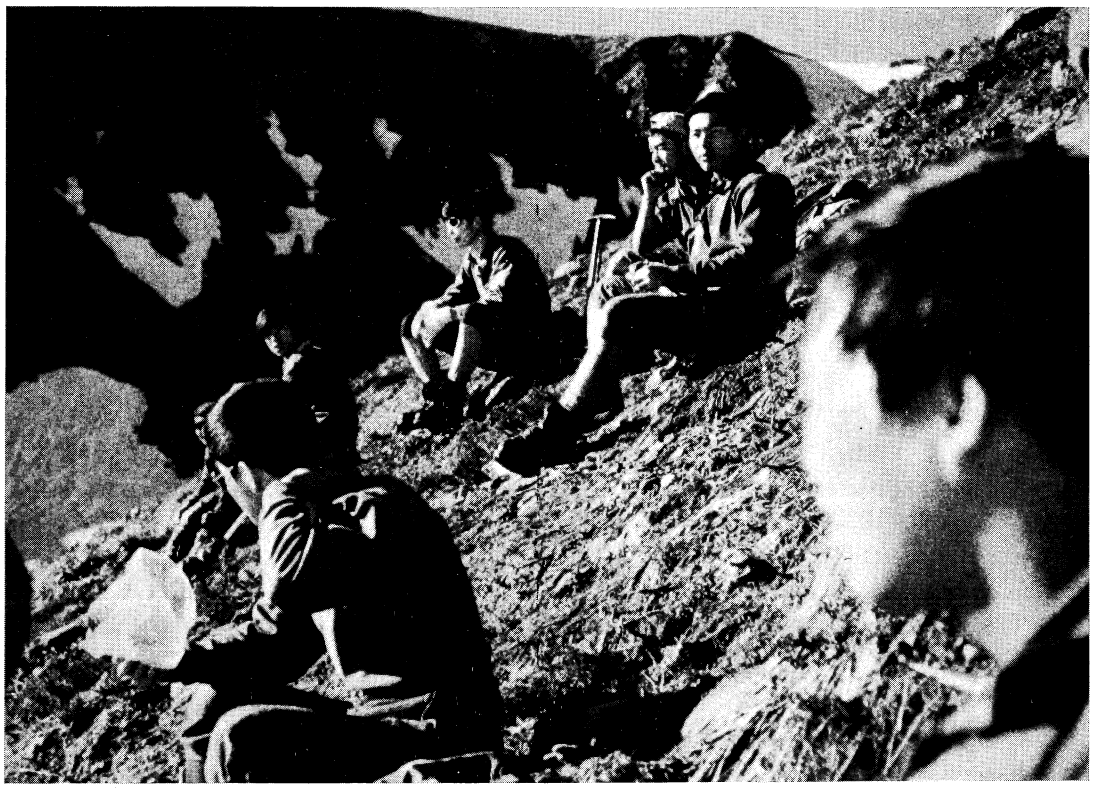
アタック・キャンプ撤収の朝。
後方はDome. 松本撮影



Mt. Assiniboine North Face及びNorth Ridge（村上撮影）

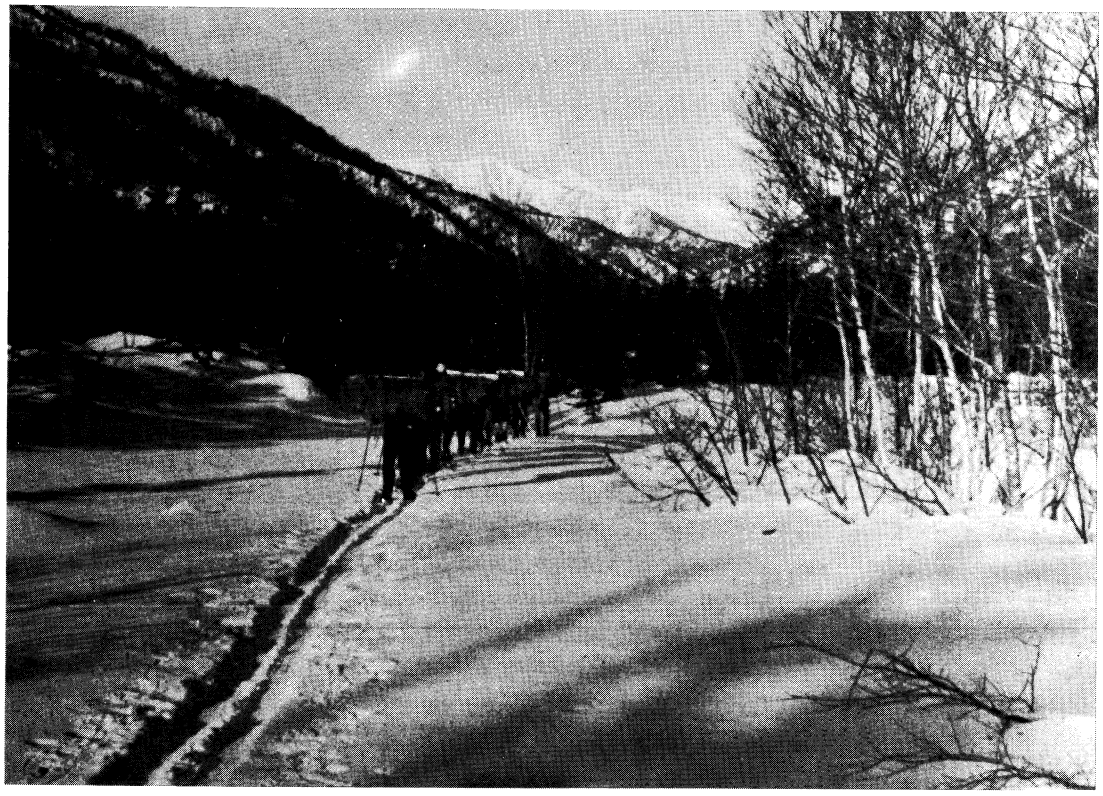


前穂高北尾根四峰正面壁（松本撮影）



雪上訓練、休息の一時。71年夏山・剣岳（井上撮影）

遠見尾根をゆく…。71年度春山合宿（井上撮影）



北海道日高山脈、トッタベッ沢。72年度春山合宿（松本撮影）

# 目　　次

二つのこと ---------- 山本三郎

山行報告

5月合宿 ---------- 1

不帰東面 ---------- 5

夏山報告 ---------- 11

冬山報告 ---------- 21

春山報告 ---------- 38

女子活動報告・中高合宿報告

女子活動報告 ---------- 63

中・高校合宿報告 ---------- 70

1973年甲南大学山岳部カナダ・ロッキー山脈登山報告 ---------- 73

山岳寮 ---------- 97

記録

その他の山行記録 ---------- 119

甲南山岳会名簿 ---------- 132

甲南大学山岳部員名簿 ---------- 133

山岳部部歌 ---------- 134

編集後期 ---------- 135

# 「二つのこと」

山岳部顧問　山本三郎

はじめに、香月会長、先輩各位のご尽力によって、甲南山岳部創立５０周年記念行事が、盛会裡に挙行されましたことを心からお礼申し上げます。特に大学部員の海外遠征につきまして多大の御支援と、中学山岳部員にまで温かい激励の言葉の数々、心から感謝しております。

山岳部は、しあわせなクラブだ、あのけわしい戦争の中で、山に行くことも困難な時代、剛健旅行班と改名しなければならない時勢があったにもかかわらず、今日まで歩みを続けたこと、また、戦後の交通難、食料不足、学制改革の嵐の中でも、山岳部の伝統が守られてきたことである。決して多勢の仲間を擁しているクラブではないが、限られた少い部員の自覚によって引継がれてきたこと、これが一つ。

それから深い友情がもう一つである。長い人生に日常の付き合いの中には友達は多い。仕事の上、遊びの上、同じ趣味、その他いろいろの場において友達はできる。しかし、何も語らずに話の通じ合えるような友達との出会いは数少い。山岳部にはそれがある。学生は、クラブ活動の意義の中に「友人がふえる」「多くの人と話ができる」「先輩と話ができる」……と述べてはいるが、最近の学生やサラリーマンの生活の中に、家族共々交際し、何事も相談し得る友達を得ることは困難である。甲南山岳部の集いの中にはそれが残っている。この、二つのことは、これからの山岳部の中に何時までも大切にしてほしいことです。

大学山岳部の顧問ということで、今年の７月、全国遭難対策協議会に出席し、各府県の遭難対策情況や、各大学の指導体制など、収獲の多い会合でしたが、私ほど、怠慢な顧問はいないと自責の念にかられながら帰ってきました。しかし、大学創立以来２２年間の甲南生活の中で、最も居心地のよいのは山岳部であることに捨てがたい魅力を覚えるこの頃です。

（昭・４８．１２．４）

# 山行報告

縦走最終日にふさわしく快晴である。西穂の頂上に立ち、全員で〝バンザイ〟握手。……実に定着合宿を入れると３５日目の事である。全員さすがに嬉しそうな顔をしている。そして私達は遙か朝日岳から自分達の足でやって来たんだという満足感を心に一路上高地へと下った。

「朝日～西穂縦走」より

# 目　次


## 5月合宿報告

穂高・岳沢 …… 1
鹿島槍ケ岳西俣 …… 2
笠ケ岳穴毛谷 …… 3
＜アタック記録＞
第四尾根 …… 山本真博 …… 4
第二岩稜 …… 森　和則 …… 5
不帰東面 …… 5
＜アタック記録＞
○ Ⅰ峰尾根主稜 …… 早川栄二 …… 7
○ Ⅱ峰甲南 …… 中沢章浩 …… 8
○ Ⅱ峰阪大 …… 村田信一 …… 8
○ Ⅲ峰A尾根 …… 松本好博 …… 9

## 夏山報告

大タテガビン第1尾根 …… 木村　正 …… 11
朝日・後立山・西穂縦走 …… 井上知三 …… 12
日高・エサオマントッタベツ沢 …… 朝倉　満 …… 16
大タテガビン・中のガビン沢 …… 松本好博 …… 17
剣・笠縦走 …… 松本好博 …… 18
三ノ窓・岩登り …… 早川栄二 …… 20

## 冬山報告

中崎尾根～槍ケ岳 …… 21
遠見尾根～五竜岳 …… 22
長塀尾根～蝶ケ岳 …… 23
前穂高岳北尾根 …… 24
朝日・白馬縦走 …… 28

## 春山報告

杓子、樺平定着 …… 38
赤岩尾根より鹿島槍ケ岳 …… 40
双子尾根より白馬岳 …… 41
71年度春山合宿 …… 42
北海道・日高山脈北部 …… 49
※ ポカラでのこと …… 平井幹男 …… 61

# 5　月　合　宿　報　告

◇◇◇◇◇◇◇◇◇

1968年度

## 穂　高　・　岳　沢

4月27日～5月4日

（L）　北川$_3$　石原$_4$　赤田$_4$　糸園$_3$　矢吹$_3$　南野$_1$

（OB）　田辺　鵜木　水渡　柏　塩崎　横山　浪川

〔行動記録〕

4月27日　現役5名と鵜木O．Bで出発。

4月28日　上高地（10：10）ーテント地着（15：20）

4月29日　雨

雪上訓練。上高地で合流の田辺、塩崎O．B下山。

4月30日　雨

昨日同様雪上訓練。

5月1日　晴

コブ尾根、鵜木、浪川、木村3名でアタック。石原、赤田、下山。

5月2日　晴

○タタミ岩：横山、北川。南稜：木村、糸園

天狗のコル往復：水渡、柏、矢吹、南野

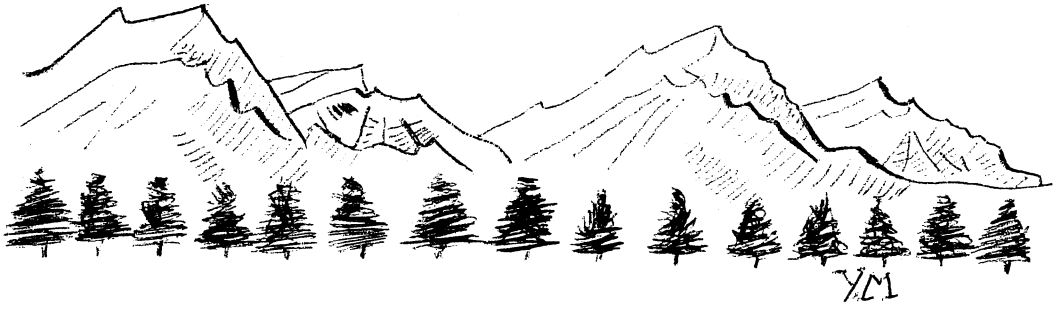
5月3日　晴後曇

○明神西壁A・B尾根：北川、糸園

5月4日　曇

撤　収。

テント地（9：00）―　上高地（11：00）



## ７０年新人歓迎合宿　　鹿島槍ケ岳西俣

４月２８日～５月５日

（Ｌ）大辻$_3$（Ｓ・Ｌ）南野$_3$、井上$_2$、森$_2$、山本$_2$、吉田$_2$、長谷川$_1$、平井$_1$、松田$_1$、松本$_1$

〔行動記録〕

４月２８日　曇後雨

西俣出合の雪の上にＢＣを設ける。この頃、より雨。

大谷原（８：２０）―― 西俣（９：４０）

４月２９日　晴時々曇

二の沢出合の対岸、赤岩尾根の下で、全員で雪上訓練。後、上級生は鎌尾根末端の台地迄行く。

４月３０日　晴

南野と２年４名鎌尾根より南峰へ。稜線へ出る所でザイルを出す。大辻と一年全員は、赤岩尾根より南峰へ。冷小屋で待合せ、全員で赤岩尾根を下る。稜線を下る時、フイックス。松田の調子悪く、夕食もとらずに寝る。

５月１日　快晴

大辻、吉田、森は東尾根の偵察。松田をテントキーパーに残し、残りは、鎌尾根末端の台地の北俣本谷側で雪上訓練。

５月２日　快晴後曇

南野、井上、山本一の沢より東尾根。雪がブロック状でハイ松の上に乗っている所もあり、余り気持はよくない。第１岩峯は何ということもないが、第２岩峯は、２ｍ位の凹角があり、高度感もあり結構面白い。下山は鎌尾根。残りは雪上訓練。

５月３日　晴後曇

停　滞。　雪の中に顔を見せた岩の上で終日ゴロゴロしている。

５月４日　晴後曇

大辻、森、吉田ダイレクト尾根アタック。雪の状態が思わしくないため、鎌尾根末端の台地で待ち合わせ、全員で雪上訓練。

５月５日　曇時々晴

全員で一の沢の頭迄行く予定だったが、天候がハッキリしないため、そのまま撤収、下山。

（山本）

## ７１年新人歓迎合宿　　笠ケ岳・穴毛谷

４月２７日～５月４日

（ＣＬ）山本$_3$、（ＳＬ）井上$_3$、（ＳＬ）森$_3$、南野$_4$、村上$_4$、下山$_3$、平田$_3$、平井$_2$、松本$_2$、籠谷$_1$、早川$_1$、中野$_1$、村田$_1$

（Ｏ.Ｂ）森本、伊丹（弟）、柏（弟）、竹中（統）、（学生部）加藤、確井、（体育会本部）伊藤。

〔行動記録〕

４月２７日　晴

先発隊の森、平井、松本入山。崩壊寸前の小屋の前にＢ．Ｃを設営する。他のパーティーは見あたらず、特等席を選ぶ。今日より、約１０日間にわたる。穴毛谷生活がはじまる。

４月２８日　晴

先発隊の３名は本谷をつめ、抜戸まで偵察に行く。。本隊：９：３０新穂高出発。１２：１０穴毛小屋着。偵察隊のテントあり。

４月２９日　曇後雨

全員で、三ノ沢出合の抜戸南尾根の斜面で雪上訓練。

４月３０日　曇後時々雨

森、平井第四尾根。井上、松本第三尾根アタック。第三尾根は、ツルムのあたりで、又、第四尾根は尾根に出る手前で、天候悪化のため、引き返す。残りは弓折大滝上部で雪上訓練。森本Ｏ．Ｂに大いにしごかれる。山本、本谷をつめ偵察にゆくが、昨夜の降雪のため、膝位迄ラッセル有り。

５月１日　雨後晴

朝、降雨あり、停滞とする。９時頃より晴れ出し、山本、井上、下山、平井、松本は、四ノ沢の偵察にゆく。四ノ沢はデブリだらけである。四尾より、常に石が落ちてくる所あり。森は一年を連れて、今日入山するパーティーをむかえに行く。Ｂ．Ｃへ帰ると新入部員が一名増えていた。°今日から、Ｂ．Ｃの人数は一気に１１名より２０名に増える。

５月２日　晴後曇時々雪

井上、森は第二岩稜。山本、平井、松本は第四尾根。（アタック記録は別記）

昨日入山したパーティーは、雪上訓練。残りはＯ．Ｂ４名に見てもらって抜戸岳アタック。Ｂ．Ｃへは、美田Ｏ．Ｂ、伊丹（兄）Ｏ．Ｂが陳中見舞に。高校山岳部の葉田を無理矢理Ｂ.Ｃに泊める。

５月３日　曇時々晴

Ｏ．Ｂ４名下山。本部の伊藤は、村上と下山。南野、平井、松本は、第三尾根アタック。稜線

へ出る所迄行ったが、2m位の雪庇が張り出していて、手のほどこしようなし。そのまま元来た道を引き返す。残りは雪上訓練。第三尾根パーティーもそのまま雪上訓練に参加。下山したO.B4名、天気がもちなおしたので、再入山。

5月4日　雨

また今日も天気が悪い。撤収と決める。再入山したO.B4名も、すごすごと我々より先に下山。下山路を沢通しにとり、雨の中で非常に苦労する。ピッケル1本左俱に落とす。

（山本）　×　×　×　×　×

## ＜アタック記録＞

### 第四尾根

5月2日

山本、平井、松本

天候　晴後曇

午前三時、真暗闇の中を、第二岩稜へ行く井上、森と一緒に、ヘッドランプをつけて出発。取付きは四ノ沢と五ノ沢の中間ルンゼをとる。一昨日取付いた森によると、中間ルンゼを登りつめてからのルートがはっきりしないらしい。上部は左側のルンゼをつめ、ブッシュが出てきてからは、左へ、左へと四ノ沢側へ巻く。と、四ノ沢へひっきりなしに落石　落している落口の上に出る。この上の雪を登ると、うまい具合に尾根上に出た。

尾根は別に難しい所もなく、ブッシュもなく雪の状態も丁度アイゼンにあい、楽々と進む。緑の笠のピークを右へ巻き、カールを登ると稜線だった。別に雪庇も出ていず、左へ行くと誰もいないピークだった。稜線は雪が膝位迄ありオーバーズボンのない足に風がこたえた。

冬期小屋へ入り、エッセンをほおばる。平井は今合宿中調子が悪く、今日もつらそうだった。合宿後わかった事だが、彼は肝臓を痛めていた。彼は今合宿よく頑張ってくれた。

稜線へ出た頃より雪がちらつきだし、稜線のラッセルも結好あるので、五ノ沢下降に決める。最初雪崩のみ気をつければよいと思っていたが、傾斜がきつい所があり、緊張する。ザイルを出し、5ピッチ。最後の1ピッチは、ゴルジュの中で、幅3m程。足元はラビネンツークになっており非常に厭な気分。ここをぬけると雪がやみ、五ノ沢出合迄見とおせ、傾斜もゆるくなっているのでホッとする。

尾根上からの雪崩に気をつけながら下る。五ノ沢出合で、抜戸岳より下山中の柏O.B、竹中O.Bに会い、そのままB.Cへ。

＜タイム＞　B.C（3：00）ルンゼ中間（4：00）ー笠ケ岳（8：20）ー小屋（9：00）ー五ノ沢出合（11：25）ーB.C（12：10）　（山本　記）

## 第二岩稜アタック　5月2日

井上、森

○B．C発3：00　取付5：00

B．C帰着：8：00

ヘッドライトの光で四ノ沢をつめる。取付いて空を見上げると満天の星空。

井上、アンザイレンしてトップで登り始める。大分取付が右の方であつたので、左寄りに登る。上部で井上が落す氷がよく体にあたる。雪と草付のため、以外と時間を食う。

登攀開始してから、2時間程でガスがかかり、風雪となる。なかなか正規のルートに出ない。ついにチョックストーンを見つけたが、上部はキノコ雪が集っており、通可するのは不可能と思われた。クライミング・ダウンして、井上の所まで戻り相談する。

天候悪化もあり、ビバークを覚悟し下降する。視界悪く、途中にあつた雪だまりの所まで行き、ビバークの予定であつた。

午後3時頃から、下部のガスが切れ、下降の見通したつ。取付まで下降してやつと互いの顔がほころぶ。エッセンを少し口に入れ、B．Cへと急ぐ。この日はあまりタバコも吸えない日であつた。

（記　森）

## 不　帰　岳　東　面

1972年4月26日～5月5日

（L）　松本$_3$、（S・L）平井$_3$、井上$_4$、下山$_4$、森$_4$、山本$_4$、朝倉$_2$、田口$_2$、中沢$_2$、中野$_2$、早川$_2$、村田$_2$、芦田$_1$、西村$_1$、福田$_1$、松下$_1$

（O・B）森本、伊丹、柏、水渡、浪川、国分

〔行動記録〕

4月26日　21時50分　大阪発。

4月27日　晴

ストの為、「くろよん」松本止まりとなり、予定狂う。乗継でやつと白馬駅に着く。トラックを

チャーターして、荷物だけ先に車の入る所まで運ぶ。人間様は歩いて細野まで行き、白樺荘で腹ごしらえをして、4年生の井上さん運転のトラックで荷物の後を追う。1ピッチ半でB・L予定地の南股取入口へ着く。

4月28日　晴

4時起床。6時より全員で南滝集越まで行く。途中1ケ所fix（20m）。井上、松本及び2年生6名でⅠ・Ⅱ峰間ルンゼ出合まで偵察に行く。新人は集越を越えた所の八方側の斜面で雪上訓練。

fixの補強、橋造り等を行ないながら帰る。森、下山の2名入山する。

4月29日　晴

甲南ルートに、井上、早川。Ⅰ峰上部に山本、朝倉・中沢。阪大ルートに松本、下山、村田の3パーティーを送る。朝倉、昨日造った橋の所から寒中水泳を試みる。この為、合宿中イビられる。カンさんにFO・B3名入山。缶ビールの差し入れを載く。さっそく、天然の冷蔵庫の中へ入れる。

4月30日　晴

Ⅰ峰上部3名。北峰ルンゼ2名。C尾根2名。甲南ルート2名の計4パーティーを送り出す。1年生は昨日に続いて雪上訓練を行なった後、Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ出合まで登る中のパーティー見物に行く。帰りは持参のスキーで、唐松沢にみごとなシュプール　後す。

連日の快晴の下での行動に全員鍋の底みたいな顔となる。　焚火を囲んで夜のEssen山のまた違ったよさを味わう。

6時頃より雨が降りだした。

5月1日　雨後曇

今日は水渡O・Bの満30才の誕生日。ついに30の大台に集る。我々はまだ10年程ある。胸中お察しします。

O・B4名、山本、下山の4年生2名下山。6名も減ると、ペースが急に淋しくなる。

8時頃より湯入沢で雪上訓練。

5月2日　雨

一晩中雨は降ったり止んだり。今日は沈澱とする。これまでのアタック記録の整理やら、春山合宿の思い出話しに花が咲く。

沈澱も楽しからずや。

5月3日　晴

甲南ルート、C尾根へ2パーティー。他はⅠ・Ⅱのルンゼより Ⅰ峰を越えて不帰沢を下る。唐松アタックの予定だったが、Ⅱ峰の登りは連休の真最中とあって超満員。順番待らず寒い思いをするのはたまらない。それに、一昨日からの雨は上部では雪であり状態悪い。1年生には我慢してもらって、不帰沢を奥の二股目がけて一直線にシリセードで飛ばす。快適ナリ。

5月4日　曇

天気図によると、5日から崩れる様子だ。上級生全員でⅠ峰断壁ルート、Ⅰ峰上部、甲南ルート、Ⅲ峰A尾根へと向う。案の定、4時頃より雨が降り出した。こりゃあ、明日は撤収だ。

5月5日　曇

激しい雨音に目を覚ます。いくら何でもこん

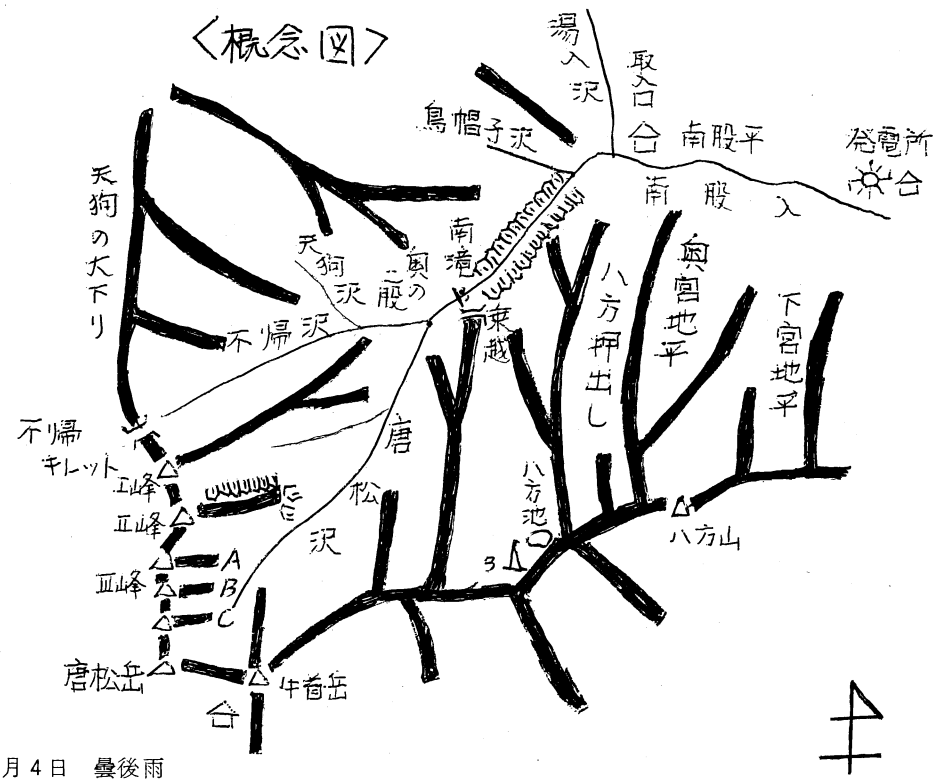
な雨の中では下れない。又眠る。

小降りになった頃撤収。二股発電所に挨拶を済せ細野白樺荘で成功を祝って乾杯する。

## アタック記録

## Ⅰ峰尾根主稜ルート

井上、早川




5月4日　曇後雨

不帰沢からⅠ峰尾根側にトラバースぎみに断壁下のルンゼをつめると、他パーティーのトレースがあり、それに沿って登って行くと断壁にぶつかる。左へトラバースして$P_3$からくる稜線に出たところが断壁左の取付である。断壁はⅠ峰尾根に対して垂直に面しているのではなく不帰沢側を向いている。そしてその右端はⅠ峰東北壁へと続いている。そこでアンザイレンして6m程のクラックを登りオーバーハングの出口を左へ巻いて簡単な

岩場を過ぎ、ハイマツの出た雪壁となる。それから10m程の鋭いナイフリッジを通り、又ハイマツまじりの雪壁となる。取付から5ピッチでⅠ峰尾根左稜との合点に出る。後は上部ルートと合流して最後はハイマツのウッドクライミングを行なつてⅠ峰ピークに立つ。

（早川　記）

B.C（2：50）－南滝乗越（2：40～3：45）－$P_3$ 断壁のコル取付（5：30）－Ⅰ峰尾根稜線（7：30）－最後の壁（8：00）－Ⅰ峰ピーク（8：30）－ⅠⅡ峰間コル（9：00）－B.C（10：30）

◇　◇　◇

## Ⅱ峰甲南ルート

森、朝倉、中沢

5月4日　曇

B.Cからかなりゆつくりしたペースで出発。途中アイゼンをつけ、南滝乗越て一息つく。この頃から空が白み出し、Ⅰ・Ⅱ峰間ルンゼ出合、さらに甲南ルンゼ取付点へと向かう。甲南ルンゼは取付点よりコルが見渡せ、門口約10mの幅でコルまで一直線に伸びているかなり明瞭なルンゼである。取付く前から小ブロックがひつきりなしに落ちてくる。やむなくルートをルンゼの左よりにとつたが、日陰のためクラストしており、かなりのアルバイトを強いられる。ようやくコルに着き、アタック食をとる。Ⅰ峰上部パーティー、A尾根パーティーとコールを交しながら、コンテで雪稜を1ピッチ。その後、朝倉・中沢が交代で確保し、40m一杯使つて2ピッチ。小休の後コンテで雪面をたどると岩が現われ、金梯子を渡つてⅡ峰ピークに出る。

（中沢　記）

B.C（3：00）－南滝乗越（4：10）－Ⅰ・Ⅱルンゼ出合（5：25）－甲南ルンゼ取付（6：30）－甲南コル（8：00～8：25）－Ⅱ峰NP（10：00～11：00）－B・C（13：15）

◇　◇　◇

## Ⅱ峰阪大ルート

松本、下山、村田

4月29日　快晴

南股のベースから奥の広場まで3ピッチ。アプローチの長さに閉口する。Aルンゼを少し登り、右から2番目のルンゼをアイゼンをつけ登る。適当に硬くなつた湿雪でアイゼンはよくきき、間もなくリッジに出る。あまりの空腹にここでアタック食をとる。実にうまい。リッジ左へまわつて、氷のべつたりとついた小さな滝のような所を避けて左のブリッジをやみくもに登る。その上で確保していると日照によつてゆるんできた雪が時々流れてくる。そこから水に濡れた緩い傾斜のスラブを登ると最後の雪壁の下に出る50度程の少し急な雪壁だ。この頃にはもうすでに腐つてしまつている雪を時々踏

み抜きながらも、根気よく登ると3ピッチで稜線に出た。落石もなく軽快な登攀であつた。下降にはDルンゼを利用し、我々3人意気揚々としてベースキャンプにもどる。楽しい一日であつた。

（村田　記）

B・C（3：00）ー南滝乗越（3：50）ーI・IIルンゼ出合（4：40）ー奥広場（5：40）ー登攀開始（6：15）ー登攀終了（9：45）ーDルンゼのコル（10：45）ー南滝乗越（11：55）ーB．C（12：35）

◇　◇　◇　◇　◇

## III峰A尾根

松本、田口

5月4日　曇後雨

今合宿最後のアタックチャンスであろう4日目標の1つとしていた、III峰A尾根に出かけた。天気図からは、今日中は何とかもつだろうとの事であつたが、その事を裏付けるが如く天候は思しくなく。絶えず空模様を気にしながら取付へと向つた。

A尾根は、大まかに言つて3つのピークを持ち、それらの各ピーク間は、50m程度のスノーリッジ、若しくは雪壁で結ばれている。

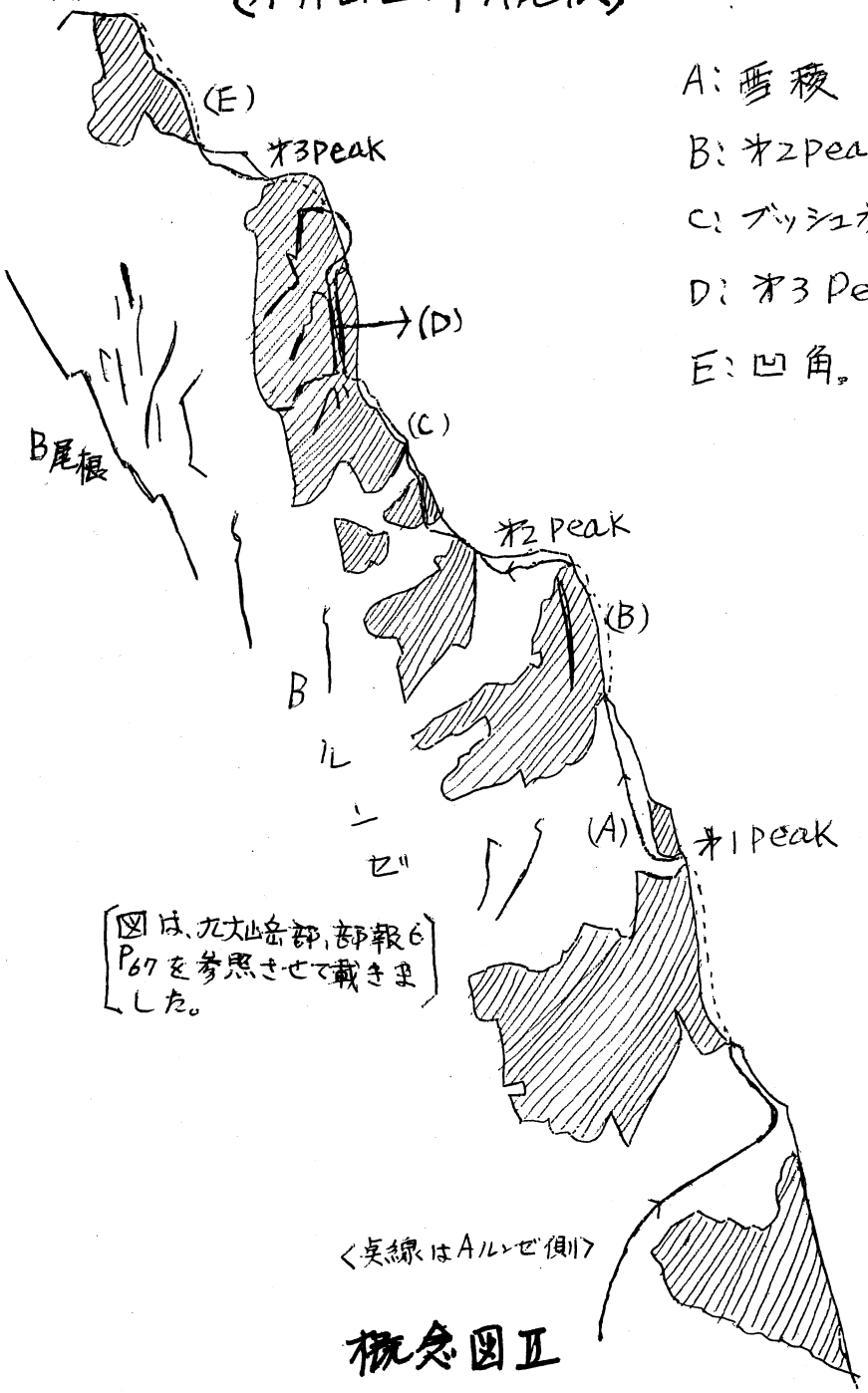
各ピークを過ぎるごとに適当な休息所が得られ、そこから次のピーク迄のルートをじつくり偵察でき、余裕を持つてルートファインディングが出来た。

問題の第3ピークのチムニーは、凹角からチムニーに入る所が悪いとのことであつたが、ハーケン、ボルトが連打されており不安はなかつた。頂上直下の壁も、色々ルートがとれるようだが、我々はAルンゼ側にかなり回り込んだ。ハング気味の凹角にルートを取つた。以上の2箇所が核心部とされている。両方共上に出てから、適当なビレーピンが得られなかつた。

登攀時間、取付より6時間、実動12時間を費してのアタックだつたが、岩と雪のミックスされた快適な登攀を楽しめた。

パートナー、田口の頑張りで登り得たものと改めて感謝する。　（松本）

A尾根の頭〔不帰岳Ⅲ峰A尾根〕




A：雪稜

B：#2peak 4ムニー

C：ブッシュ交りの雪壁

D：#3 Peak 4ムニー

E：凹角。アブミ使用

〔図は、九大山岳部、部報6 P67を参照させて載きました。〕

概念図Ⅱ

# 夏　山　報　告

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

1968年7月19日～20日

## 大タテガビン第1尾根

木村　正　．　北川　研

7月19日：末端ルンゼに取付く。ルンゼは硬くすばらしいクライミングを行なう。第1、第2チムニーを何なく越す。沢をコンテで行き、いやらしい草付をぬける。稜線直下は笹と、小さな木で乗り越す。$P_4$ までは、ブッシュこぎである。そこで昼メシにする。

アップザイレンでコルに下る。またブッシュこき、前面岩峰直下に出る。アンザイレンして取付く。まずはリッヂ通し40m登る。ちょうどハングの下がテラスになっているので、ビレーをする残置ハーケンあり。2ピッチ目は、ハングを右手に巻き乗っ越し、25m直上する。その先一歩も出ない。

ここは高度感バツグンである。左手はガビン沢まで約500m位切れ落ちている。ソウメンの様に水が流れているのが見える。

2m右へトラバースし、ハーケンを打ち一安心する。なおも10mトラバースし、松の木にてビレーラストを上げ、そのままトップでリッジ通しに進みピークへ着く。$P_3$ が見えて来た。そこまではまたブッシュこきである。そこより4つのピークをブッシュこき、ピークへ、アップザイレン、コルへと繰り返してやつと別山南尾根の直下へ来る。そこに残雪があり、水が流れていたのでビバークと決める。寝るのに下が凸凹で、しかも少し坂になっているので苦労する。すでに6時30分になつていた。多くの星と、すばらしい月と、黒々と横たわる後立山連峰を眺めながら、いつしか2人とも寝ていた。

B・C発（5：00）－取付（5：45）－4・5のコル（7：50）－$P_4$（8：45～9：20）－$P_3$（11：30）－$P_2$（3：00～3：30）－$P_1$（6：00）－ビバーク点（6：30）

20日朝、モルゲンロートに輝く後立　背に出発、一路B．Cへと進む。ハシゴ段乗越への降り口までブッシュこきをし、やつとの事で乗越まで行きのんびりする。

内蔵の助平を経てB・Cへ帰る。

ビバーク点（5：45）－南峰（6：35）－南峰・北峰間コル（8：30）－ハシゴ段乗越（9：45）－B・C（11：40）

（木村）

# 朝日～後立山～槍穂高縦走

１９７１年８月１日～１５日

井　上　知　三

ＣＬ　井上$_3$、　ＳＬ　松本$_2$、下山$_3$、朝倉$_1$、村田$_1$、中野$_1$

◇今回の夏山縦走の計画には、３つの計画があり、北アルプス、剣岳～燕岳。後立山～槍穂高。そして、南アルプス全山でありました。我々リーダー会３名は、計画段階において、各パーティーの力関係　平等にし、全て３つの計画を成功させる様に立案しましたが、定着中の事故により、南アルプスの計画を中止し、北アルプスの２パーティに絞りました。

以下、朝日～後立山～槍穂高パーティーの記録であります。

〔行動記録〕

８月１日　晴

剣岳Ｂ・Ｃ５：０５発－別山乗越６：００－室堂７：３５　富山－泊－小川温泉１８：５０－テント地１９：１０

２０日間の定着合宿を終了し、今日から西穂までの北アルプス全山縦走の幕開きである。一年生は、なんとなくさえない顔をして富山から列車に乗り込む。これはきっと荷物のせいである。

夜、小川温泉元湯近くの川原で、縦走の無事成功を祈って西瓜を腹一杯食う。そしてファイヤーを囲み、長かつた定着合宿、これからの縦走について語り合い、歌など歌ってくつろぐ。

８月２日　晴

Ｔ・Ｓ　６：００－越道峠８：２０～９：３０－北又小屋１０：００～１０：３０－恵振山１６：５５～１７：１５夕日ケ原２０：３０

小川温泉より北又小屋へは、トラックがあると聞いていたが、旅館に聞いた所不定期であるというので、私達５名は天気も良かつたので北又小屋迄のほこりつぽい道を重い荷を背に歩く。峠に着いた時、皮肉にもトラックが来たので、小屋までトラックの厄介になる。北又小屋付近のすばらしい景色を眺めながら昼食とする。

北又で泊るには早いし、それに朝日迄行けなくても、せめて恵振山まで行けばなんとかなると、行動を起こす。しかし、予想に反し、恵振山の登りは急な上に、日射も強く、３０分ペースという乱れ様になつた。それに、一年生の一人が休憩の際に、ザックと共に１０ｍ程転げ落ちるし、恵振山を越え、朝日の手前の夕日ケ原の付近ではもう一人の一年生が軽い打撲傷をとこの日は散々な目に会い、日も暮れ、視界も悪くなつたので、テント指定地外の、お花畑の片

隅に幕営する。

8月3日　晴敢曇

T・S9：30ー朝日小屋10：30

昨夜遅く寝たので、太陽が出て天幕の中の温度の上昇で起される。そして、現在の位置を確認したところ、小屋の手前わずか20分程の位置と知る。それで本日は休養日とする。

小屋の付近（朝日平）はお花畑、雪渓、湿地と素晴しく美しい景色に、全員満足しつつ、最高の沈澱日を過す。本当に明日からの英気を蓄えたという感じである。

8月4日　晴

T・S4：30ー朝日岳5：25～5：50ー雪倉岳9：40～10：20ー三国境12：25ー白馬岳13：15ーT・S13：55

心機一転。昨日の休養により、全員の体力も回復。午前2時に起床し、本日の目的地白馬岳へと向う。縦走最初のピーク、朝日岳へは、その名の通り朝日を体一杯に浴びながら頂上に着く。

小桜ケ原のすずしい小道を快調に飛ばし、お花畑の中を通り、まさにこれが縦走という感じである。雪倉、鉢岳と稜線　白馬岳へと足を運ぶ。全員快調なペースで白馬岳のテント地に着く。

8月5日　曇後雨

T・S5：00ー杓子岳5：45ー　ケ岳6：45ー不帰ノ険10：00ー唐松岳12：05ー唐松小屋12：30

今日まで毎日天候は安定していたが、今日は起きると風が強く、今にも雨が降りそうな天気。しかし、途中から縦走に参加する下山と、5日に唐松小屋で会う約束をしていたので出発する。案の定、杓子岳より雨となり、不帰あたりでは稜線へ吹きあげる風と雨で、一年生にとつては辛い縦走の様であつた。しかし、唐松小屋では高校時代の先輩に会い、熱いお茶を御馳走になる。又台風の接近ということで、小屋の片隅で寝る事になり、本当に助かる。夜、台風の影響が出はじめ風が強くなり、明日が心配されたが皆なは、下山の差入れの野菜、おやつで、山と食い物の話に花が咲く。

8月6日　雨後曇

唐松小屋11：00ー五竜T・S12：50

台風の為本日は行動出来ないと思つて、7時30分起床。しばらくすると、天候回復の兆が見えはじめ、剣が曇の中より見えはじめた。昼頃より、少しでも距離を伸ばそうと五竜小屋を目指す。雨のあがつた稜線を、下山の参加で荷物も軽く、足どりも軽く進む。

8月7日　曇後晴

T・S　4：30ー五竜岳5：15～5：55ーキレット小屋8：55～9：30鹿島槍ケ岳11：00～11：30ー冷池小屋12：30ー種池T・S15：00

台風も去り、一応安心して行動できる様になり、又距離を伸ばそうと張り切る。全員体調も良く、食欲旺盛、小屋へ着くたびにゴミ箱の残飯をあさる次第である。足並みも全員よくそろい、時間を食う様に思つていたキレットもスム

ースに通過する。

今迄のテント地は、後立山でも比較的水に恵まれていたが、今日のテント地は最悪で、水は雪渓のとけた水溜まりより、ゴミをよけながら取る。冷小屋で営林所の方からもらったビールで今日の疲れをいやす。その後が大変で、ビール半分程で全員ダウンした。

8月8日　晴

T・S4：30ー岩小屋沢岳5：40ー新越乗越6：10～6：55ー鳴沢岳7：00ー赤沢岳7：40～8：20ースバリ岳10：00ー針ノ木岳10：45～12：00ー針ノ木峠12：30

赤沢柏付近では剣が近く、雄大な姿を見せてくれる。それに計画も半分以上消化したという実感。これは上級生だけで、一年生は早く帰りたい一心で歩いているのではないだろうか。針ノ木付近では峠へ登って来る人も多く、我パーティーの食糧事情を良くした。

8月9日　晴

T・S4：30ー北葛岳8：05～8：45七倉岳10：00～10：30ー船窪小屋10：45

今日は嬉しい事が二つあった。その一つは蓮華岳付近より始めて三角形をした槍ケ岳が小さく見えた。二つめは、一年生の村田が、テント場付近の土を堀り返すと、埋めて間もない食糧がざっく、ざっく出て来た。全員満足行くまでたらふく食べる。

8月10日　晴

T・S4：30ー船窪岳6：30ー不動岳8：45ー南沢岳10：45ー鳥帽子小屋12：15

今日も天気は良く。順調に一歩一歩前進。縦走路も、船窪～南沢あたりは崩壊していたりしたが他は問題なし。

鳥帽子岳のあたりは、朝日平以来のお花畑で稜線とは違った美しさを我々に与えてくれた。

8月11日　晴

T・S4：15ー野口五郎岳5：20ー水晶小屋8：30ー鷲羽岳10：15ー三俣山荘11：10ー双六池13：00

後立山と別れ、今日から裏銀座コース。起伏もなく、足並軽やかに飛ばす。距離も五百分の一の地図を一枚歩く事になる。しかし、食糧事情が悪くなると、荷も軽くなり飛ばせるが、テント地に着くとなんとなく食事が淋しい物となる。でもここ迄来ると残すところ槍・穂高の稜線だけだ。残りの縦走を充分楽しもう。ここ双六小屋で、私の友人がアルバイトをしており、

彼と、小屋のオヤジが私達のパーティーにボッカのアルバイトを依頼して来た。我パーティーの連中は、飯を思う存分食べさせてやるとのオヤジの言葉に固い決心も揺らぎ、引き受ける。

8月12日　雨

ワサビ平～奴六小屋へのボッカ。連日の好天も昨日まで、今日は雨。半日のボッカであったが、全身ずぶ濡れ。午後からは休養日にあてる。一年生諸君、本当に後苦労様！。明日からの、残された縦走の無事を祈って消燈。

8月13日　曇後晴

双六小屋7：10－千丈乗越9：25－槍ケ岳10：10～10：30－中岳テント地11：35

いよいよ縦走も終りに近ずく。天候も良く、何の心配もなく、快調。このあたりまで来ると余裕を持って行動しているという感じである。気になる事は人がだんだん多くなる事である。

8月14日　晴

T・S4：30－南岳5：15－北穂高岳7：55－白出のコル10：40－奥穂高岳11：15～11：35－天狗コル14：05

穂高の稜線　人々の尻を見、なんとなくうんざりしながら、他の人々をうらめしそうに見つつ歩く。奥穂の頂上へ立った時は、西穂も見えああよくここ迄来たなあーと、歩いて来た稜線をふり返る。明一日で縦走も終り、最後が何でも肝心であると心にたたき込む。夜は皆、町の事や、食べ物の話に花が咲く。

8月15日　晴

T・S4：30－間の岳5：40－西穂高岳6：30～6：50　－上高地10：45

縦走最終日にふさわしく快晴である。西穂の頂上に立ち全員で"バンザイ"握手。この合宿の成功と先輩の御命福を祈り黙禱。

実に定着合宿を入れると35日目の事である。全員さすがに嬉しそうな顔をしている。そして私達は遥か朝日岳から自分達の足でやって来たんだという満足感を心に、一路上高地へと下った。

◇この全山縦走が成功したのは、全員の一致協力と、天候に恵まれた事であり、二年ぶりに縦走をやり、終えた事に対し、一・二年生諸君に本当に感謝している次第です。

# 日高山脈・エサオマントッタベツ沢遡行

## １９７２年７月１３日～１９日

（Ｌ）　平井$_3$、　朝倉$_2$、　村田$_2$

７月１３日　晴　１０時５０分野幌発

秀岳荘で装備、野幌でＥｓｓｅｌを買い出す。

７月１４日　快晴　帯広発（８：００）－（バス）－八千代小学校発（９：１０）－（トラックチャーター）－戸蔦別ヒユッテ（１０：３０）

八千代行バスは日に一本のみ。戸蔦別ヒユッテは石炭ストーブが完備しており、快適なＢａｃｅ－Ｈｏｕｓｅになるだろう。八千代にて入山届。

７月１５日　快晴　ヒユッテ発（６：１５）－エサオマン沢出合（９：０５）－二股（１１：１０）－奥ノ二股（１４：３０）

戸蔦別川は川幅の広いかなりの水量を持つ沢である。ワラジの感触を楽しみ、川幅の狭いエサオマントッタベツ沢に入る。道標や踏跡の全くない谷は不気味だ。

７月１６日　曇後雨・ガス　Ｔ・Ｓ発（６：３０）－東北カール着（８：３５）

かなりの残雪があり、スノーブリッジは危険な状態だ。カールの底より稜線に出るルートがガスと雨で判明せず、沈。

７月１７日　曇後雨　Ｔ・Ｓ発（６：３０）－エサオマントッタベツ岳ピーク。（８：２５）－新冠支流、中ノ二股９００ｍ地点（１１：３０）－エサオマン東北カール（１５：３０）

雪渓をたどり、ブッシュをかきわけて稜線上へ。ここからやつと道らしいものがあつた。ピークより視界が悪くなり、ルートを誤り、新冠支流へ下つてしまう。ハイ松、ブッシュ、滑滝下るが、天候の悪化、気温の低下、沢筋の不良に加え、ルートの間違いに気付き、前進を断念する。ザイル３ピッチ程使用して昨日の東北カールへ戻る。この日、熊の糞と堀り返した跡を見る。

７月１８日　曇後晴　Ｔ・Ｓ発（６：３０）－エサヤマン沢出合（１２：３０）－戸蔦別ヒユッテ（１５：００）

食糧が初期の予定行動分に足りず、新冠の状態も未定で、天候も快方へ向わないと思われたので下山。ワラジにも慣れ、快適に飛ばす。水量もさほどなく、ハイピッチでヒユッテへ。

７月１９日　ヒユッテ発（７：３０）－八千代小学校（１０：３０）－帯広着（１５：００）

全くイヤになる程、長い長い直線の道。日高平原のダダッ広さを痛感させられた一日だつた。下山届を提出後、農家の車をチャーターして帯広へ。

途中、遙か後方に、北日高の山々がかすんでいた。　　（朝倉）

# 大タテガビン・中のガビン沢

## １９７２年７月２７～２８日

（Ｌ）松本$_3$，田口$_2$

ハシゴ段乗越よりの内蔵之助平も今日は雲りのため、あまりパットしない。内蔵之助沢出合より目標の北尾根が見える。

テク、テク、左に東北壁を見ながら進む。時間の割にはあまり進まない。

１０時３０分。コンクリートで固めた橋を目印に、中のガビン沢に取付く。

はじめは狭い沢だつたが、登るにつれ川幅は広がり、噂に聞いていたタテガビンの岩登りの醍醐味を味わいつつ、自由にルートを選びながら登る。実に気持ちがよい。

やがて、沢筋は狭くなり源流の様相を呈する。我々は、右手に赤茶けた美しい、第２尾根フランケを眺めつつさらに登り続けた ―― 少しの水溜りを見つけては、２人共顔を水につけ、まるで動物のように水を飲んだ。考える事といえば、なんとかして南尾根上に出て、うまくB・Cに帰る事と、水の事。田口も同じ事を考えていると思う。２人は同じ目的の為、互いを信じ登る。パーティーを組んで山登りをする良さだと思う。 ――

ついに、ドン詰まりになる。ここは、約１５ｍ、２段位の壁となつている。色々ルートを捜すが、どこも少々ハング気味で行けそうもない。

もう１本別のルンゼを詰めようと、引き返す気になつた。引き返す気になつてから、もう一度じつくりルートファインディングをして見る。どうしても登らねば―― という気持がなくなり、気楽になつたのか、どうやら登れそうなバンドが目についた。

「よし、登つて見よう」安外とうまく乗越す。田口も続いて登つて来る。やつとの事で第二尾根上に這い上がつたという感がある。南尾根までもう一頑張りという所まで来た。

何度もの登り、下りを繰り返し、南尾根、大切戸の下りにさしかかる２尾根のコルに達する。喉が乾いて、２人共ヘバル。

アップザイレン、４回で（２０ｍ）大切戸の底に着く。暗く、陰惨な感じのする狭いコルである。昼弁当を食べ、少し元気を取り戻す。今

日中に行ける所まで行こうと、２人ただひたすらハイ松をこき続ける。

$P_2$ の頭と思われる所でビヴァークする。ゴウ、ゴウと放水を続ける恐竜の如き黒部ダムを夕日が染める。立山、後立山を一望にする豪快なビヴァークサイトだ。

明日も晴れるだろう。

＜タイム＞

ＢＣ出発（５：０５）－中のガビン沢出合（１０：２０）－第2尾根（１２：５０）－第２尾根コル（１：３０～２：００）－大切戸下降開始（２：３０）－大切戸（３：４０～４：０５）－$P_2$ の頭（５：５０）

ぐっすり眠って４時５０分に起床する。本日も快晴である。簡単な朝食を済ませ、５時３０分ビヴァークサイトを出発する。

猛烈なハイ松こきの連続にニッカは破れ、服はボロ、ボロになってしまった。こうなれば根比べである。

別山南峰を過ぎ、８時５０分、主峰値下に雪渓を見つける。ここにて充分に喉の乾きをいやす。ハシゴ段乗越でもゆっくり休み、１１時３５分、森さん、中野の待つ、真砂沢ＢＣへ帰る。（松本）

＜タイム＞

起床４：５０　ビヴァークサイト発（５：３０）── 南峰（７：２０）── 黒部別山本峰（８：５０～９：３５）── ハシゴ段乗越（１０：１０～１０：４５）－ BC(11：35).

## 剣　～　笠　縦　走

１９７２年７月３０日～８月５日

森$_4$．（Ｌ）松本$_3$．中野$_2$．中沢$_2$．西村$_1$．松下$_1$

７月３０日　曇後雨　雷鳥出発（６：３０）－一ノ越（８：００）－獅子岳（１０：４０）－ザラ峠（１１：４５）－五色Ｔ・Ｓ（１３：００）

雄山から降りてくる登山者に、あまりの汚なさの為、まるで〝みせもの〟の様な目で見つめられる。マイッタ、マイッタ。

同じく今日雷鳥を出発した我女子パーティーに

追い抜かれまいと、死闘を演じる。鬼岳を過ぎた頃からボツリとやつてきた。ずぶぬれになりながらザラ峠へと下る。峠でエッセンの後、どうにか女子には抜かれず五色に着く。ここのテント・サイトは気分がいい。ブレハブ造りのキジ場があつた。

7月31日　晴　五色発（5：45）ー鳶岳（6：40）ー越中沢岳（8：20）ースゴの頭（9：50）ースゴ乗越（10：40）ースゴ小屋（11：50）ー間山T・S（12：40）

女子パーティーは針ノ木へ、森、中野、中沢は東沢へ、松本、西村、松下は薬師より雲の平へ向う。

上の廊下で事故があつたらしく、スゴの小屋より盛んにトランシーバーの交信を行なつていた。1年生2名、バテる寸前でテント場にたどり着いた。T・Sからは、立山、剣がよく見える。森さん達3人がツエルトを持つて東沢へ行つた為、6人用テントはガラガラとなり、ゆつたり寝れる。少し寒いくらいだ。

8月1日　快晴　T・S発（4：35）ー北薬師岳（6：30）ー薬師岳（7：45）ー愛知大ケルン（8：50）ー太郎小屋（10：00）ーカベッケ原（12：40）

今日も晴天。テント・サイトより間山までは寝気のさめぬ内に着いていた。太郎小屋の前で休んでいると、ヘリが飛んで来て、野口五郎とか言う歌手が降り立つた。俺達が汗水たらして歩く所をアッと言うまに一飛びとは・・・・・。野口五郎クンに地図の裏とヘルメットにサインしてもらつて、ふてくされながらカベッケへ下つた。

8月2日　晴後雨　T・S発（5：10）ー薬師沢出合吊橋（5：20）ー奥日本庭園（7：10）ー雲ノ平山荘（8：40）ー祖父岳T・S（9：10）

本日の行動は雲の平までで打切り、昼寝を楽しむ事にする。トランシーバーで東沢を経て一足先に三俣蓮華にいる中野・中沢を呼ぶ。しばらく後彼等シユラフだけ持つて、雲の平までやつて来たゴミ捨て場から実に多くの食糧を発見する。ごつつあん。

8月3日　雨強し　T・S発（10：10）ー三俣蓮華T・S（11：50）

昨日、夕立かと思つていた雨が一晩中雷を伴て断続的に降り続いた。立山・槍は暴風雨だそうだ。小降りになるのを待つて、三俣まで進んでおく。

8月4日　曇後雨　T・S発（6：10）ー双六小屋（8：00）ー鏡平分岐（9：05）ー大ノマ乗越（9：35）ー秩父平（11：15）ー抜戸岳（12：30）ー笠ケ岳T・S（13：45）

双六まではアッという間に着く。縦走ペースをつかみ快調である。ガスの切れ間から一瞬、槍の穂先が姿を現す。大ノマ乗越あたりより又もや雨となる。縦走最終目的地、笠ケ岳頂上のすぐ下のテント場にて、今合宿最後の夜を迎える。残りの食糧を片付けるべく、徹収エッセン

大会が華々しく行なわれた。明日は風呂に入れる。

8月5日　曇後晴　T・S（6：00）ー笠ケ岳頂上（6：20）ークリヤ谷水場（9：20）ー錫杖谷出合（11：10）ー滄見温泉（12：20）

長〜い、長〜いクリヤ谷を黙々と下る。下山する時のピッチの何と早いことよ。

滄見温泉で、キスリングを蹴飛ばして、温泉に飛込む。夏山合宿縦走も無事終了となる。

（記：松本）

72'夏山合宿後半
7／20〜8／6

## 三ノ窓岩登り

早川栄二

（L）山本$_4$．井上$_4$．早川$_2$．

7月29日　曇　デポ回収

定着は終り、皆は縦走に出て行つた。井上さん入山。新メンバーが加わつたが、3名という少人数は非常に淋しい。

7月30日　曇後雨　真砂ーー三ノ窓

雨であつたが、一気に三ノ窓まで移っておけば明日からの行動が楽になる。雨中、長次郎雪渓をボッカする。浪川、国分両O・B入山。

真砂発（6：15）ー長次郎出合（6：45）ー池ノ谷乗越（10：50）ー三ノ窓コル（12：00）

7月31日　晴

○左稜線：井上、山本、早川

○日嶺〜ab：井上、早川

まずは左稜線から取付こう。B・Cからあまりにも近いのでもう一本という事になる。

8月1日　晴

○剣尾根アタック、B・C発（5：50）ーR10取付（6：40）ーコルC（8：50）ードームの頭（12：00）ー長次郎頭（13：50）ー三ノ窓B・C（15：15）

O・Bの下山と一緒にR$_{10}$まで下る。20分程で稜線へ。順番待ちにはまいつた。

今日は大変暑かつた。

8月2日　晴

○日嶺〜左方カンテ：井上、山本

早川、またもや腹具合が悪くなり、老パーティーがチンネへ。奴の腹はどうも弱いようだ。

8月3日　沈澱　明日こそは池ノ谷へと期待）しながら、3人は今日も又寝た。

4日

8月5日　曇後雨淡晴

○左下カンテ〜左方カンテ：井上、早川

○左下カンテ～gcd：井上、山本、早川、

中央壁へ向うため$R_2$へ。小雨が降り出しコルBで天気待ち。結局B・Cへ帰る。帰ると晴れ出した。くそ――。

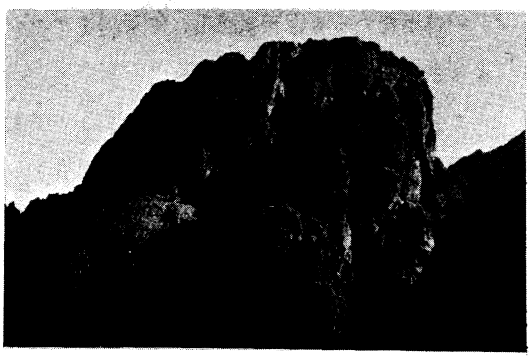
チンネへ向う。

8月6日　曇

三ノ窓発（6：50）―池ノ谷二俣（8：10）―富高岩屋（8：55）―小窓乗越（10：00）―雷岩（11：30）―取入口（12：50）―馬場島（13：30）

三ノ窓からの下りは非常にまいった。

これにて夏山後半終了す。



# 冬　山　報　告

◇◇◇◇◇◇◇

冬山合宿　1968年12月19日～12月31日

中崎尾根～　ケ岳

（L）北川$_3$．木村$_3$．石原$_4$．赤田$_4$．高橋$_2$．南野$_1$

〔行動記録〕

12月19日　新潟行（22：17）にて大阪発。全員6名

20日　晴

新穂高にテントを張り、デポに行く。

21日　雨後雪

新穂高――中崎山

22日　雪
23日　雪
24日　雪
25日　曇

尺取虫の様にして前進。天候とラッセルに悩まされながら。

やっと奥丸山へ着く。穂高連峰、笠ケ岳、穴毛谷etc．見晴らしはバツグンである。

26日　曇

デポ回収する。

27日　雪後晴　テント出発（10：00）―千丈沢乗越（14：30）

これから肩の小屋へ行くのは無理と見て、本日はここまでとする。

28日　曇後雪　テント出発（5：00）―

千丈乗越（７：００）ー幕営（１０：００）

一度出発するも、天気悪化して乗越までで引き返す。

２９日　快晴　テント発（５：００）ー千丈乗越（７：００）ー肩の小屋（１４：２０）

槍の頂上へ出発するも先行パーティーと、強風の為やむなく引き帰す。悪天候とラッセルで日数を費したので、北穂アタックを中止して、全員で槍沢を下る事と決定する。

３０日　曇後晴　小屋出発（５：３０）ー横尾（１４：００）ー上高地（１８：００）

木村小屋でメシを食い、フロに入り寝る。

３１日　雪

沢渡まで歩き、バスに乗り松本へ。

正月元旦、家に着く。

◎この冬は、天候が悪く、３１日より１０日間あまり、雪が降り続き多くの遭難者を出した。我々のパーティーは、３１日夜には松本に下山していたので難を逃れた。

とにかく全員無事に下山した事を喜びたい。

（北川）

## １９６９年１２月１８日～２６日

冬山合宿

# 遠見尾根～五龍岳

（Ｌ）木村$_4$．（ＳＬ）北川$_4$．伊藤$_4$．矢吹$_4$．杉原$_3$．大辻$_2$．南野$_2$．井上$_1$．森$_1$．山本$_1$．吉田$_1$

〔行動記録〕

１２月１８日　雪

神城スキー場にテントを張り、直ちにデポに行く。視界が悪く、はっきりしないが、ほぼ小屋の直下にデポ。

１２月１９日　雪強し

全員遠見小屋へ入る。一年バテ気味。すぐデポ回収。

１２月２０日　快晴

北川、杉原、大辻、南野の五竜アタックのサポートに全員大遠見迄入り、幕営。

１２月２１日　快晴

アタック隊の４名を見送った後、テントを一張残し、残りは遠見小屋へ。午後サポートパーティーは小屋でスキー。

１２月２２日　晴後雪　（小屋）

アタック隊、悪天候の為動けず。白岳冬期小屋にて停滞。サポート隊は遠見小屋にて雪洞作りと後スキー。

12月23日　雪強し（小屋）

アタック隊停滞。サポート隊は伊藤、矢吹が下山、有志が少しスキー。

12月24日　雪強し（小屋）

遠見小屋では、終日風雪強し、全く外へ出ず、両隊とも停滞。

12月25日　快晴（小屋）

アタック隊のサポート。西遠見付近で会う。アタックは失敗。大遠見のテントを徹収して遠見小屋へ。

12月26日　雪

小雪の中を下山。シリコで飛ばす。

（山本　記）

## 70年冬山合宿

## 長塀尾根より蝶ケ岳

12月23日～28日

（L）大辻$_3$．（SL）南野$_3$．井上$_2$．下山$_2$．平田$_2$．森$_2$．山本$_2$．平井$_1$．松本$_1$．（OB）伊藤

◇長塀尾根より、常念岳迄アタックする予定であったが、故障者続出したため、蝶ケ岳迄とする。

〔行動記録〕

12月23日　晴後曇

一気に徳沢迄入るが暗闇の中でテントを張る。

12月24日　曇

昨夜遅かったので出発を遅らし、2000m付近迄デポに行く。

12月25日　曇時々雪

南野の調子悪く、伊藤OB、山本がついて、木村小屋迄下る。残りはテントを2300m付近迄上げる。後、大辻、井上偵察。

12月26日　雪

デポを回収し、そのまま稜線へデポする。夜伊藤OB悪寒がし動かれず。

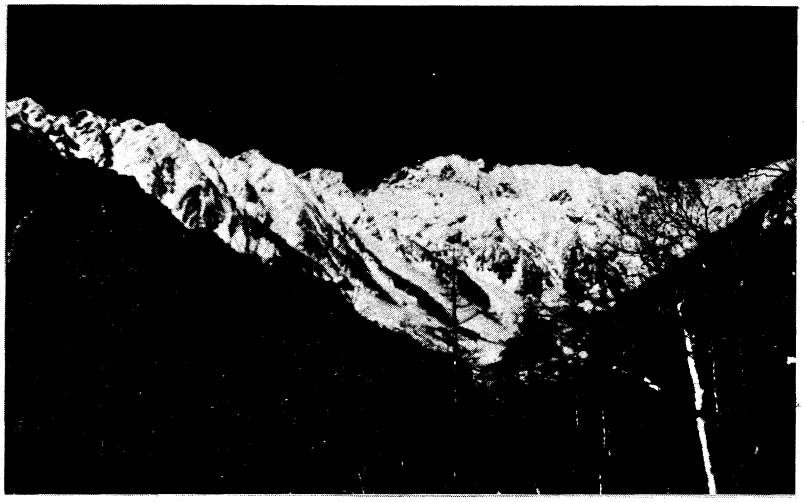
12月27日　快晴

伊藤OB、森、下山残し、全員蝶ケ岳アタックする。

12月28日　快晴

徹収、下山。一気に松本まで下る。

（山本　記）



# 前穂高岳北尾根

山本真博

1971年12月18日～27日

（L） 山本$_3$ （SL） 森$_3$ （SL） 井上$_3$ 大辻$_4$ ．南野$_4$ ．平井$_2$ ．松本$_2$
朝倉$_1$ ．中沢$_1$ ．早川$_1$ ．村田$_1$

一年間の成果を試す為にも、Ｐｏｉｎｔを春山合宿に置くべきであったが、雪の状態及び、我々の力量を考え、冬山をＡｔｔａｃｋ中心、春山は、積雪期合宿中心にした。そこで今年度の冬山合宿は、我々リーダー会の夢であった、雪の北尾根に上級生中心の合宿を組んだ。異常天候のおかげで（連日晴天）、北尾根より雪の前穂高岳を我々の掌中におさめる事が出来た。

〔行動記録〕

12月18日 晴

沢渡ー上高地間、工事中の為坂巻温泉より30分手前迄しか車が入らなかった。荷上げしておいたにもかかわらず、非常な重荷となったが、予定通り、明神養魚場冬期小屋に入る。さすがに夜行疲れと、重荷の為、木村小屋から明神迄の間は、全員こてばてだった。

小梨平で、大阪より一緒だった関学Ｐａｒｔｙに紅茶を御馳走になる。

ＳＴ（8：10）ー木村小屋（13：15～14：25）ー明神（17：15）

19日 曇

明神Ｂ・Ｈに荷を半分Ｄｅｐｏｌ、奥又白遭難碑のある大岩の南側の樹林帯にＢ・Ｃ設営。早川、団荘をＢ・Ｈに置き忘れ、井上と一緒に取りに戻る。

明神Ｂ・Ｈ（7：40）ーＢ・Ｃ（10：35）

20日 快晴

大辻、南野、井上、松本の4名は、北尾根

Ｐ８$C_1$ 予定地迄、偵察、Ｄｅｐｏ及びラッセル。残り全員は明神Ｂ・ＨへＤｅｐｏ回収。

２１日　晴後雪

全員で$C_1$ を設営する。慶応尾根へはパノラマコースを取る。雪は非常に少なく、ザラメ化し非常に歩き易い。$C_1$ は、北尾根Ｐ８に設ける。$C_1$ へは井上、大辻、平井、松本が入り、残りはＢ・Ｃへ下山。

Ｂ・Ｃ発（６：４０）－２４７０ｍＰｅａｋ（９：３０）－Ｐ８（１０：１０～１３：００）－Ｂ・Ｃ着（１４：５０）

２２日朝　晴

$C_1$ 全員で、Ｐ６までルート工作に出るが、先行Ｐａｒｔｙの時間待ちの為、Ｐ６の最後の登りだけ残して帰幕。ｆｉｘはＰ７迄６０ｍ、Ｐ７とＰ６の間の２つの岩峰のＰ７よりには１０ｍ、Ｐ６よりには１５ｍ。

Ｂ・Ｃ全員は$C_1$ へ入り、$C_1$ へ全員結集する。

Ｂ・Ｃ（７：００）－２４７０Ｐｅａｋ（１１：２５）－$C_1$（１２：３０）

２３日　晴後曇時々雪

井上、松本はＰ６の最後のｆｉｘ工作をするために先発。大辻、南野、山本、森は荷上げに回る。Ｐ６、Ｐ７間の第二岩峰は少しいやらしいが、Ｐ６の下迄ｆｉｘがある為なんなく行ける。Ｐ６の登りは、雪が足元より崩れる為、余り気持ちよくなかった。

５・６のｃｏｌへ$C_2$ を設営し、山本、井上、平井、松本が入る。一年全員休養。

$C_1$（８：１０）－Ｐ７（８：４０）－５・６ｃｏｌ$C_2$（１０：０５）

行 動 表 Ⅰ

| | 木村小屋 | B.H | B.C | $C_1$(P.8) | $C_2$(5.6) | 前穂頂上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 18日 | 入山 | 全員 | | | | |
| 19日 | | | 全員<br>B.C設営 | | | |
| 20日 | | デポ回収 | 7 | 4 | Dep | |
| 21日 | | | | 4<br>7 | $C_1$設営 | |
| 22日 | | | | 7 | 4<br>結集 ルート工作 | |
| 23日 | | | | 4名<br>停帯 | 4<br>3 | $C_2$設営 |
| 24日 | | | | | 7 | 4<br>Attack |
| 25日 | | | | 5名<br>停帯 | 2<br>4 | $C_2$撤収 |
| 26日 | | | | 全員<br>B.C撤収 | $C_1$撤収 | |
| 27日 | 下山・全員 | | | | | |

24日　快晴

関学パーティーは昨日Attackしており関学パーティーのトレースを辿る。天気もよく雪はザラメ化し、五月の様なAttackである。P4の奥又白側のトラバースもなんなく行く。P3のチムニーは雪が全くなく、アイゼンをはいての登攀には非常に気を使う。P1・P2の間も岩に雪が少し附着しているだけであつた。

前穂のピークにて、雲一つない快晴のもとに360度のパノラマを楽しむ。登りきた雪の北尾根、又、P8のテントを見て、感激がしみじみ湧き上つてきた。

P3の凹角で20mアップザイレン。チムニ

ーは４０ｍのアップザイレンをする。５・６のコルで関学パーティーに甘酒を御馳走になる。夜、関学に招待され、ささやかなコンパをする。

$C_2$（７：００）ー前穂高岳（１０：１５～１０：４０）ー３・４のコル（１２：２０）ー$C_2$（１３：３５）

２５日　雪

朝寝坊してしまった。大辻、南野が徹収のサポートに入ってくる。井上、平井はｆｉｘ回収に回る。さすがに停滞なしの連日行動で、疲れが一気に出た感じだった。森、松本が井上、平井のサポートに行く。

$C_2$（９：００）ー$C_1$（１０：００）

２６日　雪後雨

朝から雪であったが徹収する。凝応尾根の状態はおもわしくなかった。トレースが消えている為、大辻、井上に先導してもらう。

凝応尾根のコルより雪から雨に変わる。Ｂ・Ｃも徹収し、明神小屋へＤｅＰｏする。

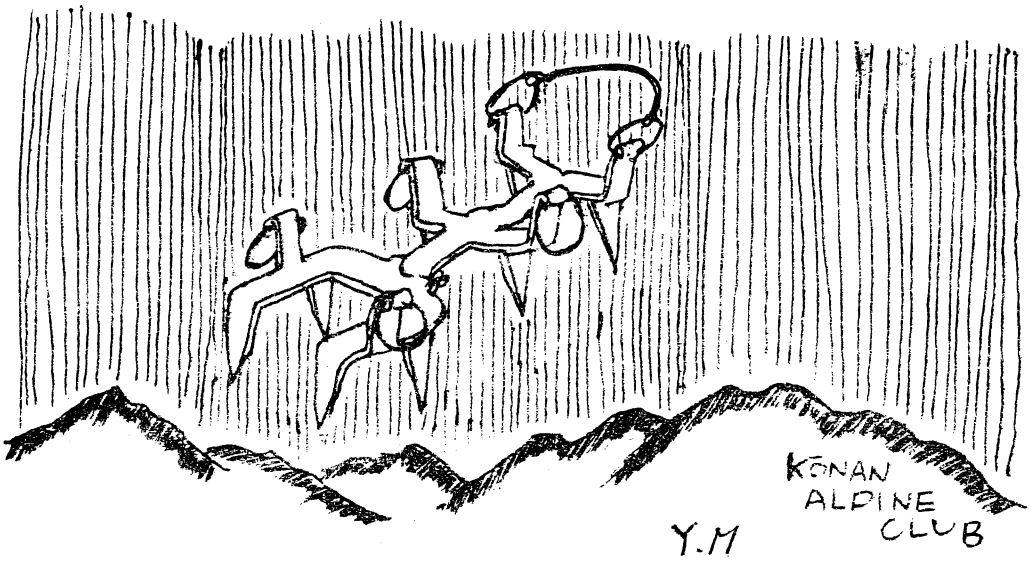
明神の手前頃から雪がやむ。木村小屋へ入り一晩御世話になる。

$C_1$（７：３０）ー２４７０Ｐｅａｋ（８：３０）ーＢ・Ｃ徹収（１１¥２０～１２：００）ー明神Ｂ・Ｈ（１４：３５～１５：０５）ー木村小屋（１７：００）

２７日　雨

雨の上高地を出発する。釜トンネルには入山者が雨宿りのため、ごった返していた。山吹トンネルと、発電所の中間あたりにマイクロバスが待っていてくれた。合宿無事完了。

木村小屋（７：５５）ー釜トンネル（９：４０）ー坂巻温泉（１０：４０）ーマイクロバス乗車（１２：１０）



# 朝日～白馬縦走

1972年度冬山合宿
12月15日～28日

◇縦走隊　（CL）　松本$_3$．井上$_4$．朝倉$_2$．早川$_2$．村田$_2$
◇新人隊　（L）　平井$_3$．西村$_1$．渋谷$_1$．
◇親ノ沢隊　（L）　田口$_2$．西川$_2$．松下$_1$．吉松$_1$・山本$_4$

（はじめに）

ここ数年、積雪期の縦走を行なっていなかったので、本年度の冬山は縦走形式をとる事にした。過去の我部に於ける積雪期縦走の記録を見ると、北アルプスのほとんどに足跡を残している。南アルプスでは積雪量の点で問題が有るし、せっかくの冬山だから、よく雪の降る所へ行く事にした。

そこで、昨年の夏山後半の縦走の際、入山路として持い強烈な印象のある、小川温泉元湯 ― 北又 ― イブリ尾根 ― 朝日岳のルートが選ばれ、越中側から白馬へ登ろうと言う事になった。

夏山縦走の時は、西穂までの15日分の装備食糧を担いでの登りで、折からの猛暑の中、全員完全にバテて、イブリ坂の急登を這い上った。

一体全体、こんなすごい坂を、積雪期に、それも比較的天候の安定する春ならともかく、まともに日本海に面する事も考えあわせて、厳冬期に登るパーティーがいるのだろうかと考えた。

それでは、厳冬期にやってみようという事になり、部会で発表したら、2年の連中はそろって渋い顔をした。夏山での悪い印象大であったし、又、朝日、雪倉のような丸っこい山でなくて、もっととがった山へ行きたいと考えていた者もいたようだ。今年の夏山終了後の前半期反省として出たように我々には、「山」を知る必要があったし、丸っこい山も「山」には何ら変りないし、たまには丸っこい山もいいだろうと考え、計画通り行なう事にした。

最初、1年部員をも含めて、全員で縦走する予定であったが、数度にわたる検討とOB諸氏からの助言の結果、数少ない好天をのがさず、一気にトレース出来るように、上級生による機動性を持つパーティーを組む事にした。

又、春山合宿にスキーを使用する事になっていたが、部員の中には、田舎で竹を切ってスキーがわりにして、少々滑った事はあるが、本物のスキーはやった事がないという者や、真っすぐに滑る事は滑れるが、曲がる事と、停止する事には全く自信がないという者も居り、頼りなかったので、スキーをつけて、歩けるように全員のレベルをあげようと、縦走終了後スキー訓

練を組み入れた。

天狗原から親ノ沢ＷＶ小屋間の尾根は、あまり人は入っておらず、地元のスキーヤーがツアーする程度であり、基礎的な冬山技術修得にはもってこいの尾根であった。そこで、１年生は雪上生活訓練、ラッセルワーク習得、及び天狗原～ＷＶ小屋間の縦走隊のサポートも兼ね、大池まで入る事とした。

１０月下旬、全コースの偵察。１１月上旬、２パーティーに分れエスケープルートの偵察及び、ＷＶ小屋へスキー、シールの荷上げを行なった。連日のトレーニングと平行して、テントの設営、徹収を迅速に行なう為、各パーティーに分れ、暗くなったグランドで練習を重ねた。

各係とも順調に準備が進められ、最終的に総重量、縦走隊：９４kg、新人隊：６４，５mgとなった。

大学紛争の為、ロックアウトされては合宿中止せざるを得なくなるので、その兆があれば、冬山装備を部員の下宿と、芦屋の事務所へ運び込む段取りをしたが、事無きを得た。

準備も全て整い、セーフティー・ファーストの大原則を頭にたたき込んで元気に出発した。

（記　松本）

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

〔行動記録〕

○縦走隊

１２月１６日　快晴　　元湯（９：１５）－尾安谷出合（１０：１５）－越道峠（１３：４０～１４：１０）－北又小屋（１６：１０）

タッチの差で小川温泉行きの始発に乗り遅れる。バス待合室で持参の弁当をパクつく。元湯からは、ラッセル膝ぐらいまでで、４ピッチで峠へ着く。小さなデブリが所々あったが、恐らく昨日のものであろう。

真青な空と接する峠より、曲がりくねった林道をシリセードを交えながら下る。いいかげんバテだした頃、サカサマ谷入口の道標を見つけ急な樹林帯を駈けおりる。小屋に入り休憩の後吊り橋を偵察に行く。踏み板が外されてあり、非常に恐ろしい。まるでサーカスだ。

夜、囲炉裏を囲んで入山を赤飯で祝う。厳冬の北又小屋、我々だけの銀世界である。

１２月１７日　曇　　北又小屋（６：１０）－全員渡渉終了（７：２０）－１１００ｍ付近（１０：３０～１１：００）－ブナ平（１３：１０）－１６００ｍ（１４：２０）

幕営終了１４：５０

北又谷がうつすらと白みだす。川の流れが僕達の耳にいかにも寒そうに入ってくる。静かな夜明けだ。

皆、思い思いの格好で渡渉を行なう。水深は膝上２０cm位で、完全装備も功を奏さず、中ま

でぐしょ濡れとなる。不思議な事に、早川だけが靴の中は濡れていないという。チクショー。他の者は、すぐ新しい靴下と履きかえる。

いよいよ問題のイブリ坂だ。７００ｍあたりまで直登し、右に巻いて尾根上に出る。全装備を抱いでのラッセルは、さすがにまいる。　、毛勝がよく見えるあたりで昼のエッセンを取る。西の空が妙な色に輝く。

ブナ平を通過し、１６００ｍあたりで幕営する。今日はよくかせいだ。

１２月１８日　曇後雪　　４時起床

ＴＳ発（６：３０）ーイブリ岳（９：３０）夕日ガ原（１２：００）ー朝日小屋（１６：１０）

小雪がチラつく中、縦走最初のピークイブリを目指して、相変らずの急登が続く。２ピッチ登ったあたりより尾根はだだっ広くなり、急登は終る。少し北によりすぎたようだ。井上さんモーレッにハッスルしてグングン飛ばす。２年生、少々バテ気味ながら必死で頑張る。知らぬ間にイブリのピークを通過。縦走最初のピークも形無しである。

ピークより、やや狭い尾根を一旦下り、イヤな雪のつき方をしている急斜面を登った所で、昼のエッセンとする。

間もなく、夕日が原に入る。こんな所を、ワッパでラッセルとは気違い沙汰だ。視界悪く、ルートファインディングに苦しむ。前朝日は巻き、次のピークに出たが、下が確認出来ず、偵察時に使用した巻き道に出るべく下降する。視界増々悪化する。

トラバースを終えると、ガスの中より小屋の影がぼんやり浮かびあがった。朝日平である。朝日小屋は、かなり埋っていたが、堀り返してもぐり込んだ。

風雪強まる。小屋に入れて本当によかった。薪で濡れた物を乾かす。黄金の御殿だ。皆、ぐっすり眠る。

１２月１９日　雪・ガス濃し。

沈殿。視界５ｍ。大変暖かい。小屋に入っての沈殿、体制を整えなおす事が出来、縦走成功に大きく近づいた気がする。

夜、月が輝き、朝日岳がそのどっしりした山容を現わした。休養、エッセン、十分にとる。

１２月２０日　曇後雪　　起床５時

小屋発（６：５０）ー朝日岳（８：３０）ー朝日、赤男コル（１１：５５～１２：２０）ー小桜原（１２：５０）ーツバクロ岩（１３：４５）ー２０７５ｍピーク（１４：２０）幕営終了１４：５０

視界は相変らず悪いが、昨日よりは大分ましである。雪の状態も悪くない。出発しよう。

ラッセル膝位まで。朝日の肩あたりより、適度にクラストしており、快調に朝日ピークに立つ。昨年の夏の縦走が思い出される。殆んど同メンバーで、早川と中野が入れ替わっただけだ。

小桜ガ原の下りで、ルートを左に取りすぎてしまい。２時間もロスする。慎重、慎重。ツバクロ岩目指し、赤男をトラバース。風雪強まる中、赤男・雪倉コル上、２０７５ｍピークの樹

林帯の陰に幕営する。

第5日目にして朝日を越えた事になる。午後6時の交信で、新人隊の声をかすかに受信する。

12月21日　雪

沈殿。降雪厳しく、ラッセルに急がしい。大変な冷え込み様だ。6日目になるが、白馬はいつもガスの中で、一度も姿を現わさない。

全く天気が悪い。

冬型気圧配置もゆるみだして来た。早く雪倉を越えたい。

12月22日　雪後晴・風強し

起床4：30　TS発（8：50）ー雪倉岳頂上（12：25）ー避難小屋（12：55～13：25）ー鉢岳コル（14：25）ー三国境（15：50）幕営終了16：40

相変らずの天気。とりあえず、朝のエッセンを食べ、様子を見る。ウト、ウトしかけた頃、テントが急に明るくなつた様な気がする。テントから顔を出すと、その名の如く、べったりと雪を付けた雪倉が、ガスの切れ間より姿を現わしつつある。しめた！。

急いでテントをたたみ、赤男・雪倉のコルまで下る。猛烈なラッセルだ。左にトラバースし雪倉の支稜に出る事にする。井上、松本空身でトレースをつけた後、全員で一気に通過する。

雪倉ピークはすごい風だ。こんな所で休んでいては、凍り付いてしまう。このあたりより、ワッパをはずし、アイゼンをつける。雪倉と鉢のコルにある避難小屋は、中に3分の2位雪がつまっていた。小屋の中に入り、昼食をほおばる。風は強いが快晴となる。

三国境まで頑張り、強風の中幕営し、ブロックを積む。夜、台湾坊主発生のニュースを聞く。明日はいよいよ白馬アタックだ。

12月23日　曇後風雪　　起床4：30

TS発（7：20）ー白馬頂上（7：40）ーTS（8：05～8：35）ー小蓮華（9：20）ー大池小屋（10：25）

幕営終了11：00

無風。この時とばかり全員久し振りにキジを打つ。テントをたたみ、キスリングと共にツエルトを被せて、アタックに出る。

主稜の最後の壁はやはりスゴイ。一度登つて見たい。

ピーク着7時35分。全員握手。剣岳に向い黙禱する。こんな風のない、白馬ピークは始めてだ。記念写真もそこそこに、三国境のデポ地まで下る。一路、サポート隊の待つ大池へと向う。小蓮華を越え、船坂の頭を下るあたりで、今合宿始めて人と会う。

雷鳥坂も快ピッチ。小屋前２００ｍあたりから又もや腰ぐらいのラッセルとなる。なつかしい３人の顔、ホットする。我々も彼等の２ｍ位横に幕営。

１６時頃より風雪強まる。除雪するより、積もる方がはるかに多い。夕食も交替で、あわただしく食べ、必死にラッセルを続けたが、ついに、グラスファイバーのフレームが反対側に曲がり、接続部の金属部分が無気味な音を立て出した。

フレームでテントを破る恐れが出て来たのでフレームを外し、張り網を切りテントを倒す。全員でサポート隊のテントに移る。テント間、わずか２ｍ程の距離であるが、風の通りがよく雪がうまく飛ばされる。

４人用テントで８人折り重なって寝る。

１２月２４日　風雪

沈殿。風雪全く衰えず、非常に狭い所でエッセンを作り食べる。強風の中、わずかに屋根の見える小屋を堀り返し、やっとの事で全員入り込む。

夜、井上さん持参のシャンペンを抜き、クリスマス・イブを祝う俄かクリスチャンとなる。手足を延ばして、ゆっくり眠る。

１２月２５日　曇後晴

ブロックを切り、小屋の入口を補強する。早くＷＶ小屋へ下りたい。

底冷えのする小屋の中、凍える手でトランプに興じる。低気圧本州東方へ去り、弱い冬型となる。明日は下れそうだ。

１２月２６日　曇　　起床４：３０

小屋発（６：４０）ー天狗原（７：４５）ー山ノ神（９：００）ー親沢ＷＶ小屋（１１：４０）

サア出発だ。曇り空の中、大池小屋を後にする。乘越のケルン目がけてトラバースぎみに進む。３張テントあり。

強風の為、吹き飛ばされたのであろう、雪は膝位であまり潜らない。この調子だと軽く１日でＷＶ小屋迄下れそうだ。

雲が切れ出し、明星山が黒々とした山容を左手に現した。天狗原より山ノ神へ、スキーのトレースがある。実に、憎い。

２４日よりＷＶ小屋に入り雪上訓練中の女子隊とトランシーバー交信し、全員下山中の旨知らせた。

ポカポカ、暖かくなってきたのでヤッケを脱ぎ、赤いジャージになる。途中で女子達と会い全員で小屋へ向う。

装備、食糧の軽量化に工夫してくれた、朝倉、早川。ラッセルによく頑張った１・２年生、ドウモゴクロウサン。

計画完遂も間近だ。ＷＶ小屋が、もうそこに見える・・・・・　バンザイ！　（松本　記）

× × × × × × × × ×

○新人隊行動記録

１２月１６日　快晴　立屋（９：１５）→ＷＶ小屋（１１：３０～１３：００）⇄デポ地点（１４：３０）

朝早く、南小谷の駅に着く。車をチャーターし朝食後立屋へと向かう。立屋では現地連絡所である太田氏の御宅へ伺い、その後WV小屋へ向かつて歩き出す。雪は思つていたより少なく、スキー場はまだリフトも動いていない。つぼ足で靴位である。本日は無風で一点の雲もなく後立山連峰が美しい。小屋に着くとすぐ昼食を済ませ荷分けをしてデポに向かう。台地状の大きな木の下にデポ(食糧10日分、ガソリン3ℓ)する。

12月17日　晴　　WV小屋(8:45)－$C_1$ <1593mピークより山ノ神方向へ少し下つた地点>(12:30～13:40)－デポ地(14:00)－$C_1$ (14:45)

小屋を出て、すぐに尾根に取り付きぐんぐん高度をかせぐ。雪は少なくワカンをつけると、ほとんどもぐる事なく歩くことが出来る。途中デポ地点をすぎて1593mのピークを越え少し下つた地点にテントを張る。3名なので時間がかかる。設営後、デポを回収し、再びテントを整えてブロックを積み、今日の一日の行動を終える。

12月18日　雪

4時に起床する。小雪がちらつきガスも濃いようなのでとにかく陽が明けるのを待つ。6時30分、陽は昇つたがガスと小雪のため視界がきかない。新人パーティーなので無理せず沈澱とする。

12月19日　雪　$C_1$ (10:00)→デポ地(11:15)－$C_1$ (12:15)

昨日同様雪とガスのため20～30mの視界であるが、10時頃視界が少し良くなつてきたので、10日分の食糧と3ℓのガソリンを持つてデポに向かう。山ノ神の方向に向かうが視界が悪く、明日にこのデポが発見出来るかどうか心配である。しかし11時頃より視界が開け山ノ神のピークが見えやつと安心して大きな木の下にデポする。

12月20日　晴　$C_1$ (9:00)－デポ地(10:45)－山ノ神(13:30)－$C_2$ <2050m>(14:45)

待望の好天である。途中でデポを回収し山ノ神へ向かう。ラッセルはワカンをつけて膝位であり、新人2名は元気でよく頑張る。思つたより早く山ノ神に着いたので少し足を延して、2050m地点付近にテントを張る。
この付近までは問題になる場所も無くただ忠実に尾根をつめて行くだけでよい。山ノ神の手前の主稜線に出るまでは尾根の傾斜が弱まつて下りには自分の位置に迷うかもしれないので、竹ザオ・赤旗が必要である。又雪の状態によつては山ノ神付近は雪庇が心配となろう。

12月21日　雪　$C_2$ (8:00)－$C_3$ <天狗原下方> (13:30)

$C_2$ を出発して天狗原に続く尾根を行く。雪の積もり具合によつて木の間は非常に歩き辛い。朝から降つていた雪は風も増して少し強くなつて来た。新人は重荷の為か、ペースがおちて来るがよく頑張る。ラッセルは所によつては腰位まである。忠実に尾根をつめて行くとやが

て天狗原の大斜面であるが、ラッセルが深く胸までもぐる。雪と風のため明日の乗鞍の登りがわからないので、時間は早いがテントを張る。

１２月２２日　快晴　　$C_3$（８：４０）

ー乗鞍左の尾根取付き（１０：００）ー肩（１３：００）ー大池（１５：３０）

乗鞍の取付きは左の尾根状の所を選ぶ、がずっと左よりは雪崩れている。雪の状態を判断した上で左の尾根状と肩を結ぶ線を一気に登ることにして、荷の重さを考えた末、から荷でまずトレースをつけることにしたが、肩まで出て荷物を取りに帰つた時は、風の為トレースが消えかかる程であつた。乗鞍頂上付近は風によつて雪が飛ばされており、又大池は完全に埋まつていて付近は雪が吹きだまりのせいか、胸から首近くまで所によつてはあり意外と時間を食う。大池の冬期小屋は完全に雪の下に埋まつていて、仕方無く小屋の横にテントを張る。

１２月２３日　晴後雪

縦走隊と合流（１１：００）

アタックの装備をつけて外に出るが、雲の動きから天気は崩れる様であつたので、まずは今まで通じていなかつたトランシーバーが今日こそは縦走隊に通じるであろうと期待しつつ、新人のアイゼンワークを兼ねて白馬へと続く尾根を登ることにした。しかし２回の交信とも通じる事無く仕方無しにテントへ帰る。昼食を食べていると突然井上氏のコールが耳に入り、一同あわてて外に出ると縦走隊が全員元気に現われる。１４時頃より、台湾坊主の接近で風が急に強くなり雪も降り出す。その為、テントの位置の問題もあつて、夜食事頃にテントをつぶされそうになり、サポート隊のテントへ全員脱出しその夜は苦しい一夜となつた。（平井記）

２４日以後は縦走隊と同じなので省略。

× × × × × × ×

## 各係反省

◇食糧係　（早川）

冬合宿も無事終わりました。今回の食糧係の反省と今後と致しましては、計画そのものがどうであつたかを考えるのであります。今回の基本方針でありました軽量化という問題につきまして、冬山の食糧計画における各ｆａｃｔｏｒが計画そのものに付け加えられる為、軽量化の基本方針が徹底できなかつた。ということです。もちろんこれは骨組みであつて、全てでないのですから良いのですが、今回の重量を考えてみますと、縦走パーティーは５人で食糧の総重量は５３.０kgで予備日を入れて、総日数が１８日であるから、１日１人当り約５９０gになる計算であります。（これは結果的には軽量化が基本方針になつていないと思うのであります。）計画の進め方として軽量化を最初から考えて進めるよりは、１人当りのザックの重量をどれ位にするかを考え、（それはもちろん登山形式によつて変わると思うのですが、）そこから食糧の総重量を割り出し、そして軽量化しなければならないものは軽量化し、主食はなるべく減らさないように、考えていく方が良いと思うので

あります。登山形式にもよりますが、持つ能力があるのに持つて行かないのは、訓練かがまん大会のようで食糧計画としては、これも又まずいことだと思うのです。

◇装備係　（朝倉）

今回は縦走形式で装備においても軽量化が最大の問題点となったが山行中はトランシーバーの件を除き特別に支障を来たすことなく終了出来た。

◦トランシーバー：小型2台と中型2台の計4台を3パーティーで持参したが、小型中型共に性能が劣り、山行中縦走隊と新入隊間において赤男コルと山ノ神間で一方だけがかすかに声を判別出来得ただけという全くの無用の長物と化し、パンフレットのみにとらわれず、法規の範囲内で他のパーティーの実例を調べて最良のトランシーバーを将来購入したく思っている。

◦女子隊の団装に関して：縦走隊の軽量化等にとらわれ過ぎ、WV小屋生活だから・・・・という安意な考えも手伝い、真剣に掛り切ることなく同行の部員に多大に依存してしまい、無責任であり迷惑を掛けてしまったことをお詫びしておきます。

◦ガソリン容器について：今迄の4ℓカンとポリ容器の併用から2ℓポリ（新品）だけにも、ガソリン洩れ、移し変えの手間を省く等をはかったが、カラ容器をほかせない点を考慮しても4ℓカンよりポリタンの方が総てに良かったと思う。尚これ迄ガソリン消費量を積雪期1人1日0．12ℓと伝えられていたが、今回の計画ではほぼ1人1日0．10ℓ消費した。食糧はベミカン食・米で水筒（各自2ℓ）テルモス満タン、沈澱等に際して特にきりつめるようなことはしなかった。よって食糧により多少変化するだろうが、0．1～0．12ℓ内を用意すべきだと思う。

◇気象係　（村田）

近年、気象状況の変化により毎年のように暖冬が続くが、この冬も例外ではない。昨年は12月上旬、冬型気圧配置が大きくくずれ、10月並の暖かさとなった日もあった。その後中旬から入山中の天気図を見ても顕著な西高東低を示すものは少なく、又はっきりとした周期も見られない。入山約2週間にわたる中で富士山の気温－20°C以下を記録した日は21日、22日のわずか2日間のみであった。しかし今合宿寒波の勢力は弱かったものの台湾低気圧、いわゆる台湾坊主の発生があって、気象条件は決して良くなかった。12月22日に発生した台湾坊主はその速度、実に30Km／hという例のない緩慢なもので、日本本土を東に通過する迄4日間もかかるという有様だった。この台湾坊主我々にとって忘れ難いものとなったことは行動記録を是非お読み頂きたい。

## ＜合宿後期にかえて＞

今、部室の片隅にテントが置かれている。雪の重みでポールが曲がったテントである。今回

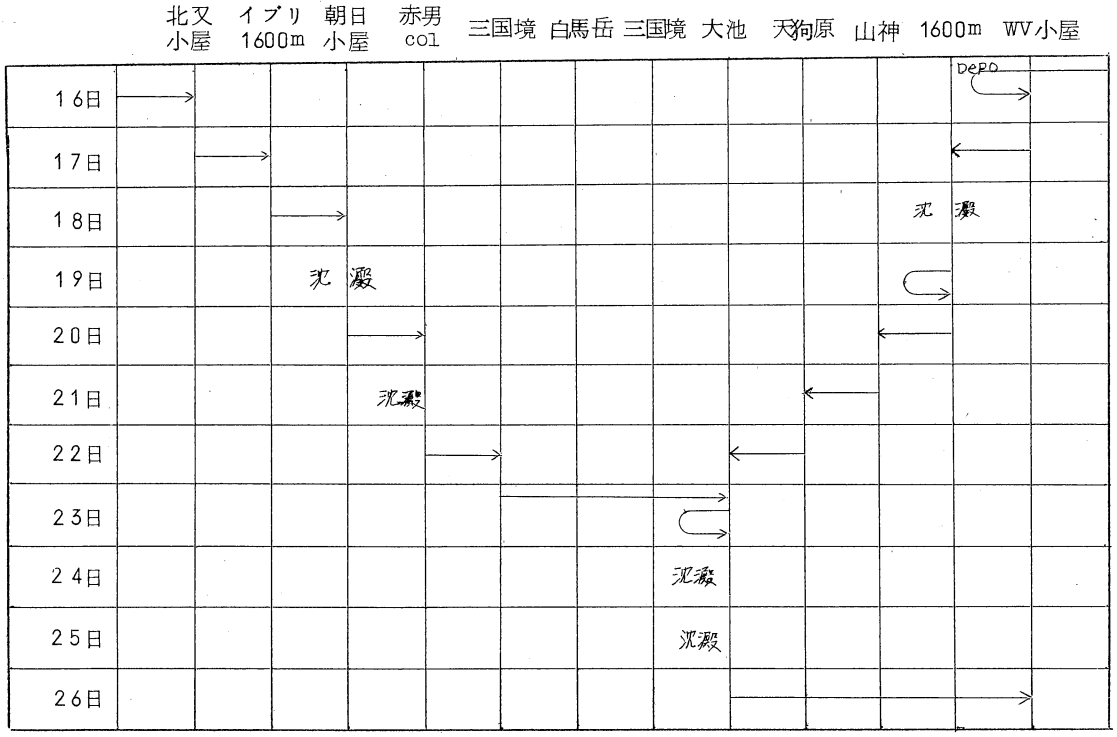
我々リーダー会の一番の反省点である、テントの位置決定の問題をこのテントが物語っている。台湾坊主の為の風と雪で、テントのポールはひん曲ってしまった。少しの気の緩みであった。朝日から来た縦走隊と、親沢から山ノ神を経て来た新人隊が、白馬大池で無事合流した。そんな気の緩みで少し慎重さが欠けていたのではなかったか？

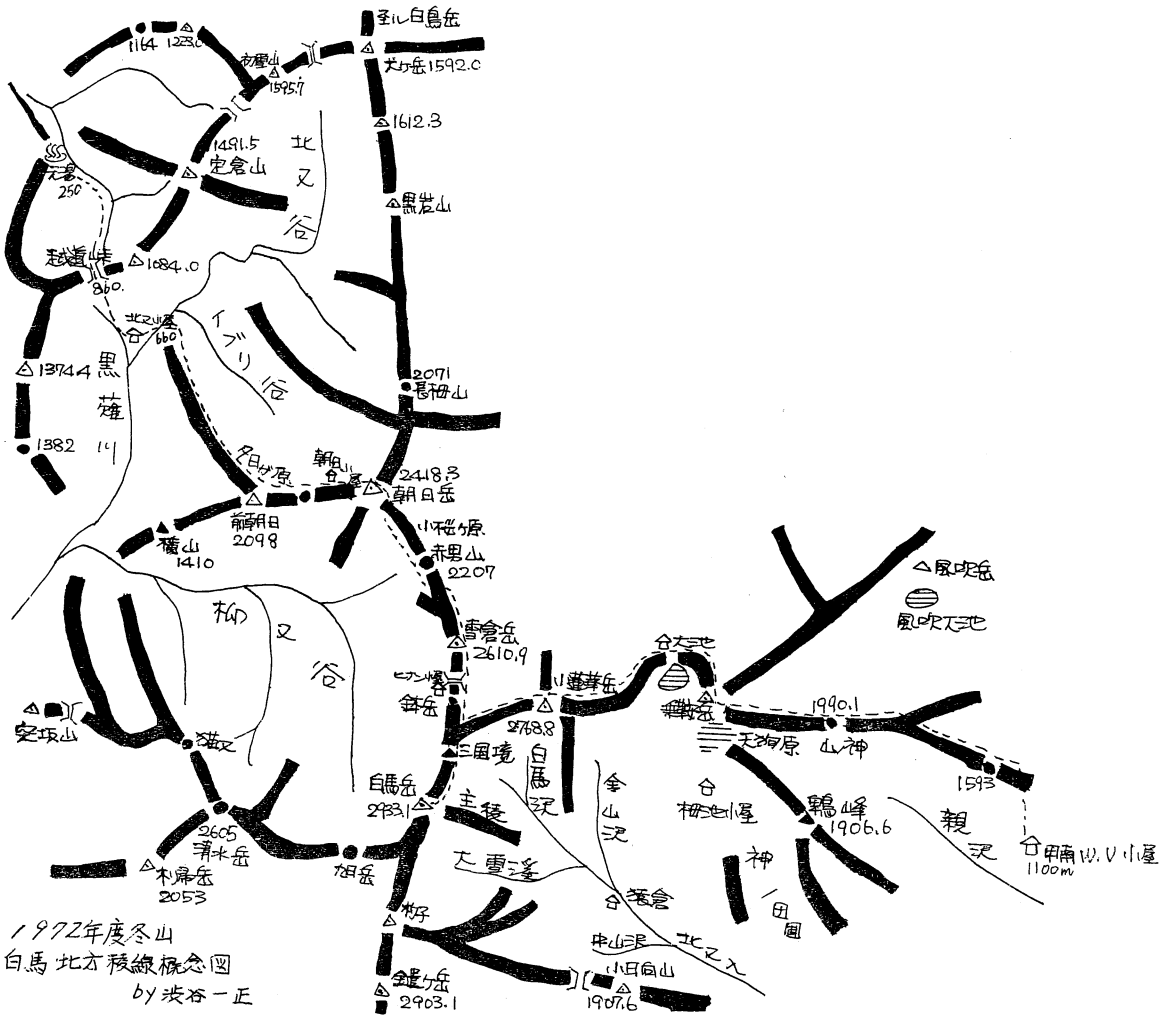
今合宿は、上級部員の縦走、新人のラッセルワーク、女子部員の雪上生活、の3点を目標に計画した。ほぼ計画は満足のできる結果で終了した。そして来たるべき春山合宿の日高の為、親沢WV小屋でスキー練習を行なった。「山は終った」との気の緩みか、スキー練習で1名肩を脱臼した。

冬山合宿は終了した。今テントを眺めて僕は思った。山では少しの気の緩みが致命症であると。そして、いよいよ我々リーダー会の最後の合宿である春山合宿はもうすぐそこに来ている。とにかく気を緩めてはいられない。
俺達リーダー会がしっかりしなくては。

（平井　記）

行動表 Ⅱ






1972年度冬山
白馬北方稜線概念図
by 渋谷一正

# ◇◇◇　春　山　報　告　◇◇◇

1968年度

## 春山・樺平定着

3月4日～25日

～（L）　北川$_3$．木村$_3$．伊藤$_3$．矢吹$_3$．石原$_4$．南野$_1$．大辻$_1$

◇杓子岳双子尾根樺平BCより、白馬岳、白馬鑓．杓子岳東壁をアタック予定

〔行動記録〕

3月4日　大阪発

3月5日　風雪後曇

白樺荘（10：45）ー二股（12：00）ーDep（発電所）（15：50）ー白樺荘（17：45）

白馬駅に着くと吹雪であつたので、白樺荘どまりとする。

3月6日　晴後曇

白樺荘（6：55）ー猿倉（12：40）昨日のDep回収に全員で行く。

3月7日　曇

猿倉（6：50）ー小日向コル（12：00）ー猿倉（13：45）

伊藤、木村、矢吹、北川、4名でDepに行く、Depは双子岩の間とする。伊藤、木村にて双子尾根を少し偵察する。

3月8日　快晴

猿倉（6：20）ー小日向コル（9：45）ー樺平（13：15）

テントをDepしたので、雪洞を掘つて2名そこで寝る。

3月9日　晴

Dep回収、と双子尾根偵察に行く。fix 40m1本使用。

3月10日　雪

沈　澱。

3月11日　晴

双子尾根、fix を稜線直下にして来る。（北川、木村）他はDep回収

3月12日　雪

沈　澱。　3：30に起きて見るも雪であつたのであきらめる。

3月13日　雪

沈　澱。

3月14日　曇後吹雪

A尾根：石原、矢吹、北川

奥双子岩のコルより沢へ入ると膝までラッセルあり、A尾根取付では、胸までラッセルあり、また天気もおかしくなつて来たので引き返す。

双子尾根隊も、第1fixより引き返す。10：00より猛吹雪になる。

3月15日　雪後晴

沈　澱　伊藤、矢吹、雪の中を下山。昼

より晴れて石原下山、我々４名となる。

３月１６日　曇後雪

朝鮮半島に低気圧あり、天気が悪化すると思われるので白馬岳アタックを中止。沈澱とする。

３月１７日　雪

沈　澱。

３月１８日　吹雪後晴

久々に晴れたので、３名にて白馬アタックする為出発。第１ｆｉｘまで５時間費す。

１時５分、雪崩を誘発、それは杓子沢、長走沢全体におよぶ大きなものでした。時間待ち３時間位する。テントに着いてホッとする。Ｂ・Ｃ発（８：００）－Ｂ・Ｃ着（５：３０）Ｏ・Ｂ雨宮氏と石原、南里入山。南里のみ残り、２名下山。

３月１９日　曇後雪

沈　澱

３月２０日　晴後雨

Ｂ．Ｃ（６：４５）－Ｊ．ｐ（８：４５）－杓子岳頂上（１０：００）－白馬岳頂上（１１：３０）－杓子岳（１３：００）ここで時間待ちする。出発（１５：００）－Ｂ・Ｃ（１５：４０）

全員白馬岳頂上に立つ。

３月２１日　雨後雪

春山のやつかい者、雨に会い何もかも、水浸しとなる。

３月２２日　雪

沈　澱。

３月２３日　雪後吹雪

沈　澱。　南里、雪の中下山。

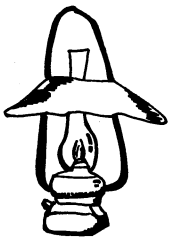
３月２４日　快晴

ｆｉｘ回収して、猿倉まで下山する。

３月２５日　快晴

猿倉（８：０５）－白樺荘（１０：５０）

全員無事下山する。



◇アタックは、白馬岳だけだったけれども、大変おもしろい合宿であったと、自分一人で満足している。また、全員無事に下山した事を計画時点で御助力のＯ・Ｂの方々と、現役にあらためて感謝いたします。　（北川）

1969年度春山

# 赤岩尾根より鹿島槍ケ岳

70年3月20～25日

◦東尾根隊：CL木村4．杉原3．南野2．OB石原

◦赤岩尾根隊：L大辻2．南里4．村上2．井上1．森1．山本1．吉田1．OB国分．赤田。

◇鹿島槍ケ岳東尾根より上級生が、赤岩尾根よりサポートが入る予定であつたが、東尾根の状態が思わしくなかつた為、全員赤岩尾根より入山し、爺岳東尾根より下山。

〔行動記録〕

3月20日　曇

鹿島部落、狩野さん宅で石原OBに会い、狩野さんのおばあさんに見送られ出発。雪は深い所でヒザ位迄。西俣出合に幕営。

3月21日　雪

東尾根隊は一ノ沢の頭迄行くが、状態悪いため西俣出合迄戻り幕営。国分、赤田両OB、西俣へ入山。赤岩尾根隊は、途中迄デポに行き、すぐテントを徹収し、高千穂平へ設営。すぐデポを回収しに行く。ラッセルは大体ひざ位。

3月22日　雪

余り天候もよくなく、予定変更した。東尾根隊を待つため、偵察に行く。大辻、井上、森、山本を残し、停滞。十一曲りの稜線への最後の登りの所迄偵察。10時頃帰幕。11時30分頃、東尾根隊も高千穂へ入り全員集合。

3月23日　風強し、後晴。

国分、赤田OBと南里は風の中を下山。昼前より晴れてきたので、石原OB、大辻はルート工作に出、残りは13時、高千穂平出発。稜線への最後の登りは直登。16時30分冷小屋横へ幕営。

3月24日　曇時々雪

毎夜晴れているのに、朝天気が悪い。全員、風の中を鹿島槍ケ岳へ向け出発。顔左半分、感覚なし。増々風が強くなり、南峰直下の所で引き返す。布引岳で黒部側へふみこむ所だつた。

3月25日　雪

7時45分　徹収、出発、爺岳東尾根へ下る所は、胸位のラッセル。14時30分鹿島部落着。狩野さん宅で、熱いお茶を御馳走になる。

—○— 1970年度春山合宿 —○— ○— ○— ○—

# 双子尾根より白馬岳

—○— —○— —○— —○— ○— 71年3月8日～16日 —○—

（L） 南野$_3$ ．（SL） 大辻$_3$ ．村上$_3$ ．井上$_2$ ．下山$_2$ ．平田$_2$ ．山本$_2$ ．松本$_1$

（OB） 雨宮． 横山． 浪川．

〔行動記録〕

3月8日 雪

細野から、二股迄雪上車で荷物を運んでもらう。OBの面目躍如。猿倉荘迄行く。

細野（10：00）ー猿倉（14：45）

3月9日 曇後雪

全員で小日向のコル迄行き、テント設営。横山OB、南野、山本は樺平手前迄ラッセル。下つたパーティーは、小屋で仮眠した後、19時頃、小日向のコルへ入つてくる。

猿倉（4：50）ー小日向（8：00～9：10）ー樺平（11：20）ー小日向（12：30）

3月10日 曇後雪

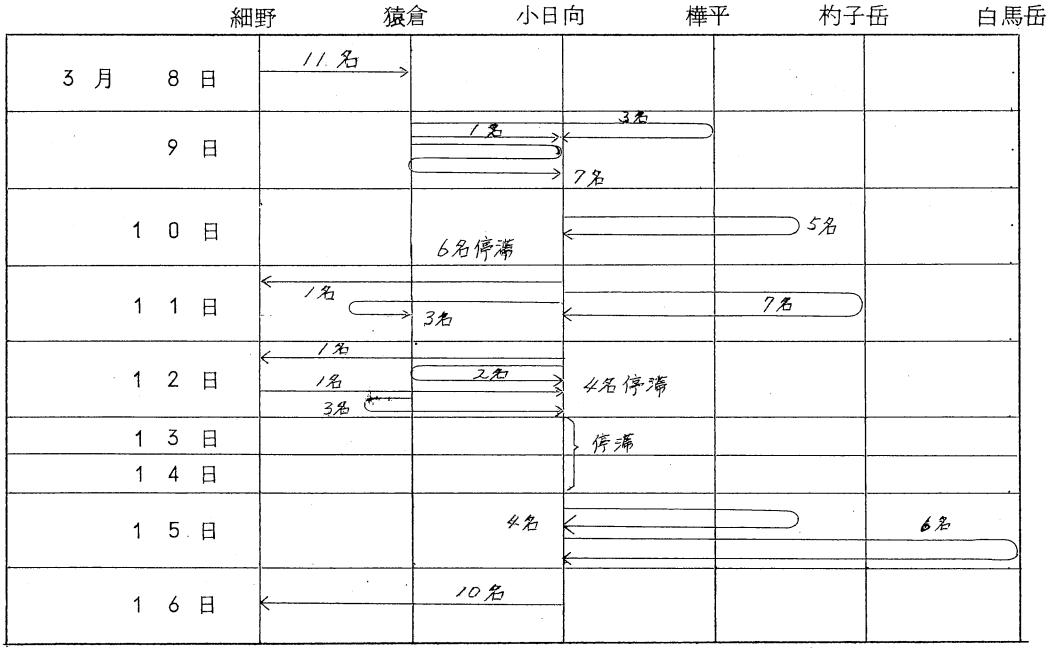
南野、大辻、村上、井上、森はアタック。残りは停滞。後雪洞掘り。

3月11日 晴

雨宮OB下山。大辻、下山、平田はサポート及び、浪川OBの出向えの為、猿倉泊。

残りは杓子岳アタック。樺平より、ラッセル深くなる。稜線へ出る所で、5ピッチ、フィッ

行動表 Ⅲ



クス。頂上は風強く、視界なし。

3月12日　晴後雪

横山OB下山。井上、山本、猿倉までサポートし、デポの食缶を上げる。残りは停滞。14時頃、浪川入山。大辻ら3名も帰幕。

小日向(8：40)ー猿倉(9：40)ー小日向(11：40)

3月13日　雪

天候悪く、全員で、コルの杓子沢側で雪上訓練。

3月14日　雪・風強し

停滞。8時頃よりイグルー作りをする。

3月15日　快晴

全員で、白馬岳目指し出発。南野、村上、下山、平田はJ・P迄で帰幕。J・P迄の登りは、胸位迄のラッセルが有り遅々として進まず。その時、トレースの左半分が、約15mにわたって、杓子沢側に崩れる。全員顔色なし。稜線は風が強いだけで快調。

BC(6：20)ー杓子岳(12：30)ー白馬岳(14：00)ー杓子岳(15：00)ーBC(16：45)

3月16日　晴

目標すべて達成し、全員快調。浪川OBの××なスキーを見ながら下る。

BC(6：30)ー猿倉(7：45〜8：30)ー細野(10：00)

(山本)

///1971年度///////////////////////////////

## 春　山　合　宿

3月6日〜3月22日

///////////////////////////////////////////

(L)山本$_3$．(SL)井上$_3$．(SL)森$_3$．平井$_2$．松本$_2$．朝倉$_1$．中沢$_1$．中野$_1$
早川$_1$．村田$_1$．田口$_1$　(OB)横山

＜はじめに＞

合宿を行なうにあたり、我々は常に下級生の練成と、上級生の登攀という二つの目的を満たす事に頭を悩す。冬山合宿に於て、我々は一年生を冬山へ連れて行くのみという考え方で、上級生のアタックを中心に行なったわけであるが今春山合宿には一年生を中心に考え、上級生には少し我慢してもらい、合宿を行なう事に決定した。

現在、登山の流れとしては、組織より個人中心に動いてきている。実動全メンバー10人程の大学山岳部の組織合宿において、一年生を充分練成し、個人を組み込む事は非常に難しい。

現在では、組織合宿で総ての欲求を充分満されなくなっている。その欲求を満たす為に個人山行形式のウエイトが増大しているが、合宿のウエイトは決して下がるわけではあるまい。

又、現在の様に先鋭化してきた登山に於て、大学山岳部として固定化された考え方を捨て、もっと柔軟に〝山〟を考える必要が出て来ている。さらに、オールマイティーな登山家を育成するのが大学山岳部の使命であるが、先鋭化された現在に於て、大学四年間一つの山を求める事に依り、一つの山の〝権威〟になる事に依りオールマイティーな登山家を育成すべきであろう。この考えも思慮足らずで充分に計画に反映されていない。

この様な考えを抱き、今合宿を行なうが、この計画では、全員が不満を抱くかも知れないがリーダー会としては、〝合宿〟という事にPoiuntを置いて、今合宿を行なうわけである。少なくとも一年生は充分喜んでもらう事を期待し、思う存分、春山を満喫してもらいたい。

（CL　山本）

〔目　的〕

1. 杓子岳より五竜岳迄の縦走（双子尾根）
2. 白馬鑓ケ岳北山稜Attack。
3. 1年生の白馬岳Attack。
4. 縦走サポート、1年生の白岳Attack（遠見尾根）

〔行動記録〕

3月6日　晴

細野、白樺荘にて朝食をとり、二股迄車をチャーターして入る。村上、浪川の両O・Bが白樺荘に居たのにはびっくり。二股からは、去年とくらべて雪が少く、ツボ足で行く。全員快調。

二股（11：00）ー猿倉（14：30）

3月7日　晴

四日程、晴れが続いているという話であるし又、荷も軽いので一気に樺平迄行くことにする。双子尾根上でのラッセルは深い所でも膝以下である。一年の疲労が激しいので、樺平の手前でDep、をする。設営中に井上以下3名でDeーp、回収する。

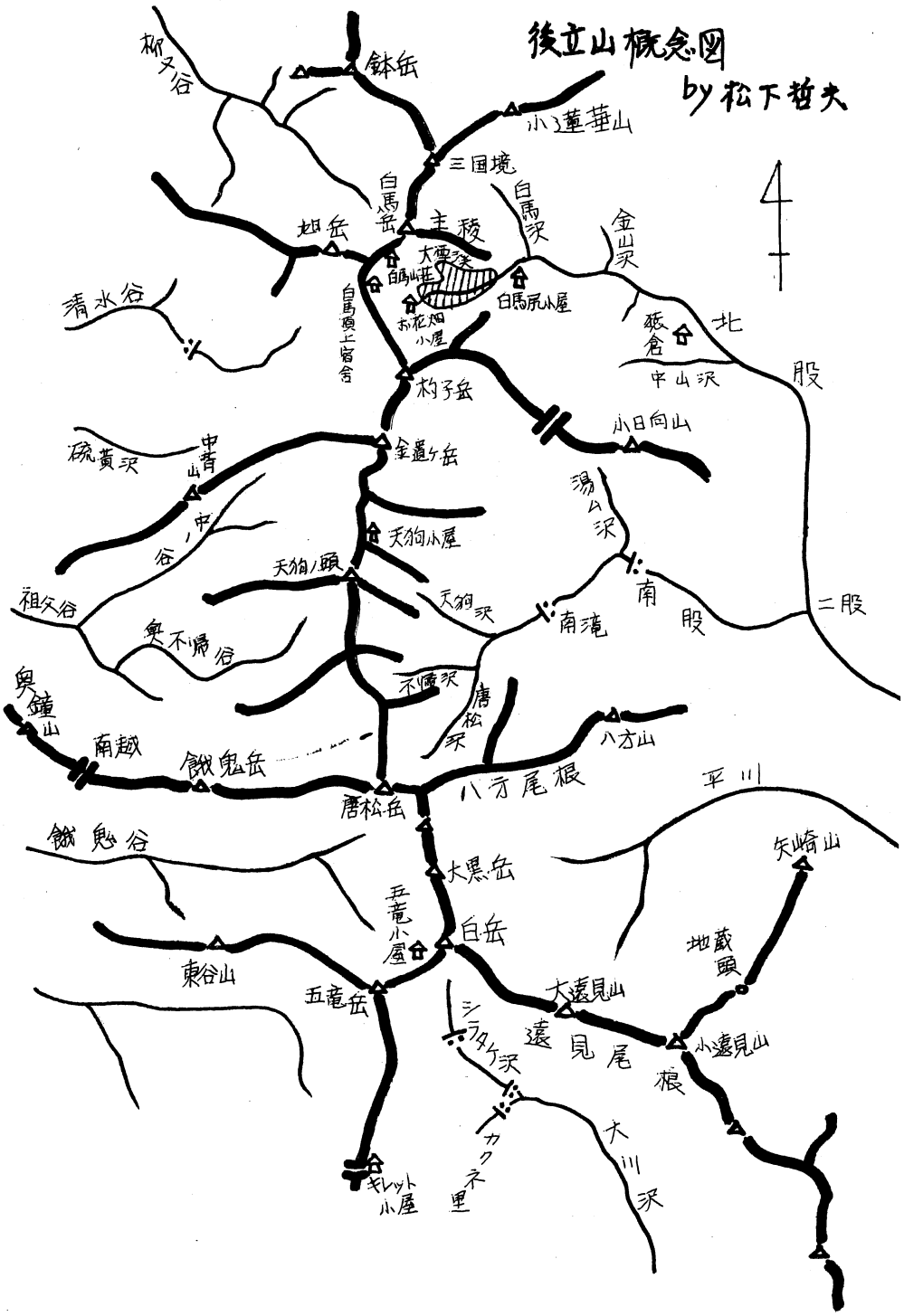
猿倉（4：00）ー小日向co1（7：00～7：40）ーデポ（10：30）ー樺平（11：00）

3月8日　雪

時々、青空がほんの少し見えたりしたが、一年の疲労と、一年に初めての合宿参加者が居る事を考え、雪上訓練と、雪洞堀りに過ごす。

3月9日　雪

起きた時、星が見えていたので、山本、平井は北稜Attack。残りはサポート方々、杓子迄とする。一昨日迄晴れが続いていたので杓子沢の状態はよく、アイゼンをつけて、深い所で膝迄のラッセルしかなかった。時間をかせぐ為、ノーザイルで取付く。2名共、出歯のアイゼンをはいているので、ピッケルとのコンビネーションで快調に登る。風もなく、降雪がほと


後立山概念図
by松下哲夫
柳又谷
鉢岳
小蓮華山
三国境
白馬岳
主稜
白馬沢
金山沢
畑岳
大雪渓
白馬山荘
白馬尻小屋
お花畑小屋
白馬頂上宿舎
清水谷
張倉
北股
中山沢
杓子岳
小日向山
硫黄沢
中青山
金遍ヶ岳
湯ムシ沢
中ノ谷
天狗小屋
天狗ノ頭
天狗沢
南股
二股
祖父谷
奥不帰谷
南滝
不帰沢
唐松沢
奥鐘山
南越
餓鬼岳
八方山
唐松岳
八方尾根
平川
餓鬼谷
大黒岳
矢崎山
五竜小屋
白岳
地蔵頭
東谷山
五竜岳
大遠見山
シラタケ沢
遠見尾根
小遠見山
カクネ里
大川沢
キレット小屋

んど感じられなかつた。夜が明けた時には降雪の為、夜明けを感じられなくなつていたのに、降りるのが困難な地点迄登つていたのは失敗だつた。双子屋根Ｐａｒｔｙをほとんど確認することができなかつた。雪庇がでてきて、４０ｍ程非常に状態が悪い所をトラバースする。ザイルを出すべきであつたが、アンザイレン出来る様な場所もないのでそのまま行く。と、凸型の岩が現われ、軍艦ピーク上にいる事を知る。ここに先輩の記録通り、杓子沢をトラバースする。ここで二人が坐れる場所があつたのでアンザイレンし、昼食をとる。

この頃より風を強く感じる。視界は１００ｍ程であつた。

北稜ルンゼがかすかに確認出来る。ここで稜線まで出ることをほぼあきらめ、トランシーバーの交信をし、サポート隊がＪ・Ｐ迄しか行けない事を知り、北稜ルンゼより逃げる事に決定する。

ここより１ピッチ目、山本トップで７ｍ程行き杓子沢側の木でビレー。２ピッチ目、平井トップで４０ｍ一杯のばす。３ピッチ目、山本トップで１５ｍ。４ピッチ目、平井トップで１０ｍ。ハイ松上に、雪がのっているリッヂを行く。５ピッチ目、山本。同じ様にして軍艦ピークのピークより少し下つた所で、ビレー。６ピッチ目、平井。ギャップの方へ下りて行き、懸垂ピン発見。１０ｍ程懸垂でテラスに着く。そこより２０ｍいっぱいで、二人乗るのが精一杯のレッヂ上に立つ。

そこより１５ｍ程のアップザイレンで、北稜ルンゼに降り立つ。

雪が深く、いやな感じが頭をかすめる。登攀具をしまい、紅茶を飲む。交信の時間ではなかつたが、トランシーバーのスイッチを入れると横山Ｏ・Ｂの声が入り、トラバース・ルートの指示が入り一安心する。

北稜ルンゼを降りはじめると、足元より雪が崩れていく。

山本が、無造作に尻制動で下りはじめたと同時に平井の足元より表層発生。山本はそれに気付かず、止りかけた頃、顔より血を出して、顔を下にして滑落していく平井が目に入り、一瞬血の気が消える思いがする。左側を平井のテルモモスが滑っていくのが目に入つた。

山本が完全に制止した時、雪がかぶさつてきて「雪崩だ!!」と絶叫したが、腰迄埋るだけですんだ。平井の方に目をやると、５０～６０ｍ程下で顔をこちら側に向けていた。必死になつてそこまで行き、水を飲ましを調べる。顔に４ケ所かすり傷と、前歯を二本折つており、左上口びるがはれ上がつていた。

雪崩の危険があつたが、平井が落ちつくまで、しばらく呼吸を整えた後、いやな感じの杓子沢を下りはじめる。杓子岳Ｄ尾根の黒い岩が、頭の上へかぶさつてきそうで、威圧的だ。

樺平の下に人影が現われたので、必死に“コール”をかけ、薬品箱を持つて来てもらう。

横山、井上、森のサポートを得、Ｂ・Ｃへたどり着く。

Ｂ・Ｃ発（４：１０）ー取付き（４：４５）ー第一岩峯下（６：１５）ー第二岩峯下（７：４０）ー凸型の岩（８：３０）ー北稜ルンゼ上（１０：４５～１１：００）ーＢ・Ｃ（１２：０５）

井上以下９名は、杓子岳まで行く予定で出発したがラッセル深く、Ｊ・Ｐまでしか行く事が出来ず、北稜隊とトランシーバー交信後、縦走用１斗缶２缶をＪ・ＰにデポしてＢ・Ｃに帰る。帰幕後、井上、森、松本、横山Ｏ・Ｂの４名で北稜パーティーのサポートに向う。

３月１０日　雪・風強シ

横山Ｏ・Ｂ下山。負傷の平井も一緒に下ることになり、傷次第で、白樺荘で待つことにする。井上・森・松本・朝倉・早川・中沢、小日向のコル迄、ラッセル・サポート。残りは停滞とする。深雪の為、尾根の状態が悪く苦労する。気圧配置西高東低になる。

３月１１日　晴後曇

全員白馬迄Ａｔｔａｃｋの予定で出発するが腰迄のラッモルで非常な時間をくう。

一年に悪いが、杓子岳で辛棒してもらう。

Ｂ・Ｃ発（６：４５）ーＪ・Ｐ（９：５５）ー杓子岳（１１：２０～１１：４０）ーＪ・Ｐ（１２：３５～１３：０５）ーＢ・Ｃ（１３：４５）

３月１２日　雪

停　滞

３月１３日　曇後雪

山本、早川、中沢、下へラッセル。残りは上へラッセル。下へのラッセルは雪が深く、ほとんどはかどらず。

Ｂ・Ｃ（１０：３０）ーＢ・Ｃ（１１：４５）

３月１４日　雪

停　滞。ｅｓｓｅｎ切れ。あすは全員下山せねばなるまい。昼、非常パックをあけ、１０名で、ラーメン２袋。

３月１５日　雪・風強シ

風強く、視界もきかないが、明るい感じがする。吹雪いているだけかも知れない。

小日向のコル迄３ピッチ程ザイルを出す。ラッセル非常に深い。小日向のコルに着くと、風は強いが空は晴れている感じがする。

小日向のコルより猿倉の小屋迄は、快調に行く。顔面に凍傷３名程受ける。

樺平（７：３０）ー小目向（１０：５０～１１：３０）ー猿倉（１３：０５）

３月１６日　快晴

皮肉な事に快晴。快調に細野迄飛ばし、白樺荘へ入る。平井の元気な顔があった。久方振りに白米をたらふく食べ、ｅｓｓｅｎの補充をし、神城スキー場へ向う。下川さんに遠見小屋の管理をまかされる。昨日徹収の時、テントのポールを一つおっているので、喜んでひきうける。神城スキー場にテント設営。

猿倉（６：３０）ー二股（８：３０）ー細野（９：１５～１２：００）ー列車で神城スキー場へ（１４：３０）

３月１７日　雪後晴

二日前が嘘みたいに雪が少ない。完全に雪溶

け頃の雪だ。快調に飛ばし、遠見小屋へ入る。

休息の後、小屋の雪おろしとか、まき割りをし、松本が持ってきたスキーで遊ぶ。

神城スキー場（６：００）ー遠見小屋（９：３０）

３月１８日　快晴

使用出来るテントが、１つになったのでＰａｒｔｙを２つにわけ、１つは大遠見、もう１つは小屋とする。全員で大遠見迄行くが、ここも雪が少なく快調。予定より早く着いたので井上、松本はそのまま五竜迄Ａｔｔａｃｋをかける。残りでテントを張り最初のパーティーの森早川、中沢、村田を残して小屋迄下山。東洋大がＤｅｐｏｔに来る。

遠見小屋（６：１５）ー中・大遠見のコル（８：１０）ー大遠見（８：５０〜９：５５）ー小・中遠見コル（１０：５０）ー遠見小屋（１１：３５）

３月１９日　快晴

残りの山本、平井、朝倉、田口、中野、大遠見へ入る為に出発。大遠見のパーティーは状態がよかったので五竜岳迄全員アタック。中遠見で出合う。状態がよいので時間が予想より、大幅に短縮できる。

遠見小屋（９：００）ー中遠見（１０：40）ー大遠見（１１：２０）

３月２０日　雨・風強シ

停　滞　　〃富士山大量遭難〃　の悲報入る。雨で痛烈。

３月２１日　雪

停　滞　　午後、井上、松本陳中見舞に来る。

３月２２日　快晴

Ａｔｔａｃｋ。快調に進む。白岳より見ると唐松岳は手のとどきそうな所に見えるし、縦走隊を出せなかった事がくやしくて仕方がない。

さすが稜線上は風が強い。雪が丁度いい具合にしまっていて、アイゼンがよくきき、快調。大遠見へ戻ると、松本、早川、村田がサポートに入っており、そのまま下山。予定では遠見小屋迄だったが、ペースが進むので、一気に下山する。細野の白樺荘迄戻り、ささやかな合宿打あげコンパと一年間の労をねぎらう。

大遠見（５：５５）ー白岳冬期小屋（７：００）ー五　岳（８：１０）ー大遠見（９：３５〜１０：２５）〜遠見小屋（１１：３０〜１２：２０）ー神城スキー場（１３：１０）

（記：山本）

行動表 Ⅳ

| | 細野 | 猿倉 | 小日向 | 樺平 | J・P | 杓子 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3月 6日 | 12名 → | | | | | |
| 7日 | | → | 12名 → | | | |
| 8日 | | | | | | |
| 9日 | | | | ← | 10名 | |
| | | | | ← | 2名 北稜アタック | |
| 10日 | ← 横山、 | 平井 下山 | | | | |
| 11日 | | | | ← | 10名 | |
| 12日 | | | | 停滞 | | |
| 13日 | | | | | | |
| 14日 | | | | | | |
| 15日 | | ← | 10名 | | | |
| 16日 | ← | 10名 | | | | |

| | 神城 | 遠見小屋 | 大遠見 | 白岳 | 五龍岳 |
|---|---|---|---|---|---|
| 17日 | 11名 → | | | | |
| 18日 | | 4名 → | 2名 ← | | |
| | 5名 サポート ← | | | | |
| 19日 | | ← | 6名 | | |
| | | → | 5名 | | |
| 20日 | | | 停滞 | | |
| 21日 | 3名 停滞 | ← | 2名 | 6名 停滞 | |
| 22日 | ← | 3名 サポート | | 6名 | |
| | ← | | | | |
| | 2名 | | | | |

====１９７２年度・春山合宿==========

# 北海道・日高山脈北部

３月４日～２２日

（Ｌ）平井$_3$．（ＳＬ）松本$_3$．井上$_4$．朝倉$_2$．田口$_2$．村田$_2$．早川$_2$．渋谷$_1$．西村$_1$
松下$_1$

## ＜はじめに＞

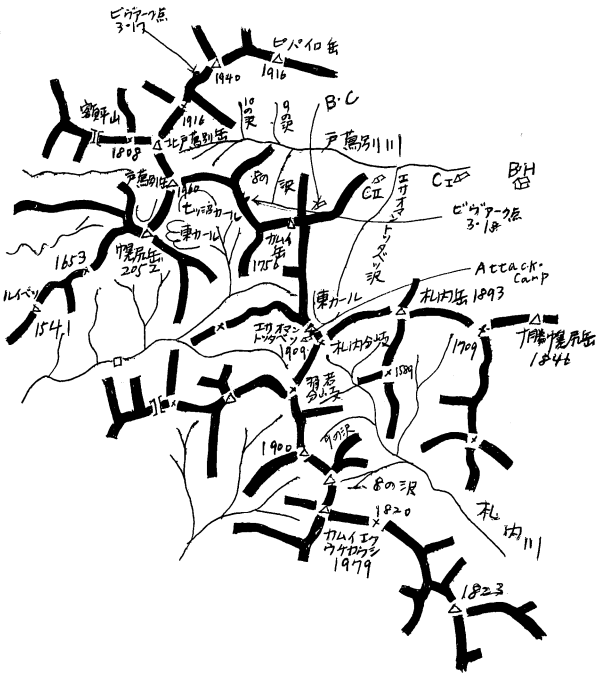
日高山脈は、北海道のいわば背骨にあたる、褶曲山脈である。

リーダー権を受継いで、年間計画を立てるにあたり、一年間の繰めくくりとも言える、春山合宿に僕達は〝憧れの山脈・日高〟を選んだ。

合宿を通じてのポイントとして、①甲南山岳部として初めての山域である事。②部員全体の山スキー技術の向上の為のワンステップとしてアプローチにスキーを使用する。（部員のスキー技術は、巷で豪悟するのとは裏腹に、御粗末極りないものであった。）③タクティックスに工夫をこらし、カムイ北東尾根１８００ｍ付近のＢＣまでは縦走形式。ＢＣより、第１計画として、前進キャンプを出し、十勝幌尻、カムイエクウチカウシをアタック。第２計画として、ＢＣより、日高幌尻及び、ピパイロへロングアタックを行ない、1年生には、行動のスピードアップ、２・３年は、観天望気雪質の変化の観察、温度・風向変化の測定。ピバーク食の研究、ピバークを交えたアタックの際の装備研究等を通じて、広い目で山の知識を得る事を心掛けた。

後期試験も、どうにか終了した、３月４日、多くの御見送りを受け、１０時１０分発の特急「白鳥」へ全員元気に乗込んだ。

―日高山脈・北部 概念図―



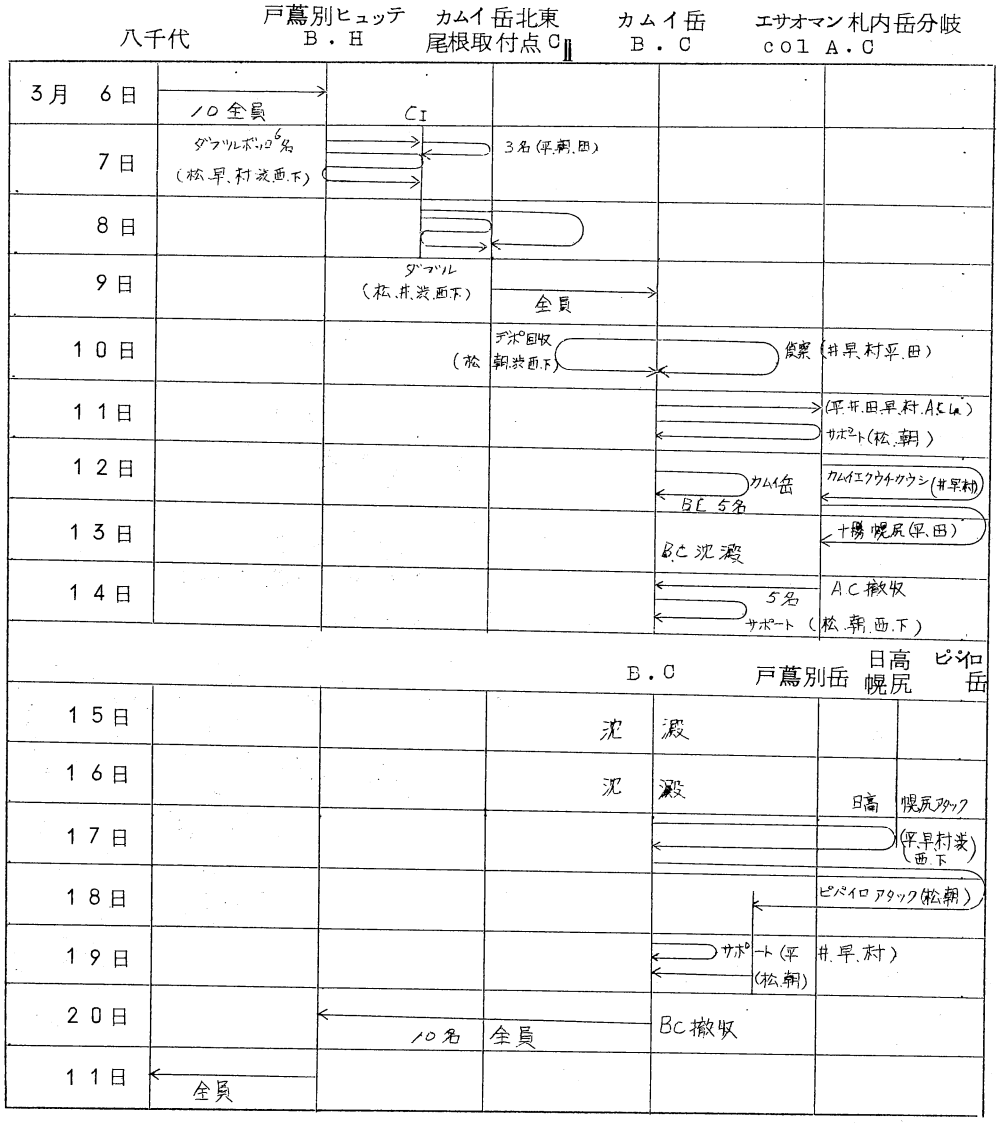
〔行動記録〕

3月4日　大阪発。

3月5日　札幌着。

「白鳥」大幅に遅れ、特急料金払い戻しとなる。急ぐ旅でもない我々には、大儲けだ。粉雪舞う札幌に降り立った時の気温は－4℃。手配してあったガソリン18ℓ缶を受け取った後、大関

行動表Ⅴ




〔平→平井(3)、松→松本(3)、井→井上(4)、朝→朝倉(2)、田→田中(2)
村→村田(2)、早→早川(2)、渋→渋谷(1)、西→西村(1)、下→松下(1)〕

ＯＢ宅へ挨拶に行き、御馳走になる。大関ＯＢの御見送りを受け、２２：２５発の鈍行で帯広へ向う。

３月６日　快晴

八千代小学校前（１０：０５）＝最終人家（１０：２５）ートッタベツヒユッテ（１４：４５）

やっと帯広に着く。（５：４０）さすがに寒い。バスで八千代まで行く。平井、早川は途中下車し、八千代営林所へ入山届けに向う。他の者は、八千代小学校まで一足先に行く。道は最終人家まで除雪されており、そこまで八千代でチャーターしたトラックで入る。

いよいよ入山だ。スキーをつけ勇んで出発する。ボッカの途中、妙に鼻をつくいい臭いがすると思って歩いていたら、早川のキスリングの中で〝レッドのダブル〟が割れていた。アーもったいない。

各自のスキー技術により、マイペースでＢＨに入る。到着後、先行した井上、村田、トッタベツ川の偵察に行く。ヒユッテの宿泊者名簿によると、昨日まで早稲田が入山しており、悪天候の為、かなり苦労したと記してあった。

石炭ストーブをどんどん焚く。今夜で畳ともしばらくお別れである。

３月７日　晴後曇

４時３０分起床　ＢＨ発（６：２０）ー林道終点（８：３０）ー$C_1$（１０：１５〜１１：３０）ーＢＨ（１２：４５〜１３：３０）ー$C_1$（１７：２０）

本日よりＢＣ建設を目指し荷上げを行なう。シールボッカ、ワイヤーを切る者続出する。ビンディングは構造の複雑なものより、簡単で頑丈なカンダハーが一番良い。

タンネの間より、真白に雪をまとった。トッタベツ岳が真正面に聳える。我々は列を組み、慣れぬスキーをあやつりながら、一直線にトッタベツ岳を目指して進む。日高の山懐に一歩、一歩近づく喜び、胸高鳴る。

北東尾根取付点にあと２ピッチ位と思われる。右岸の樹林帯の中の台地で幕営する。

（Ｂ・Ｃよりエサオマントッタベツ岳を観る）

松本、早川、村田、渋谷、松下、西村でＢＨへ戻り、ダブルボッカ。平井、朝倉、田口は取付までのスノーブリッジ偵察。井上沈。

３月８日　晴

４時起床　ＴＳ発（６：３０）ーエサオマントッタベツ沢出合$C_2$（８：１５）

ッデポ回収　$C_2$発（９：５０）ー$C_1$（１０：４０〜１１：３０）ー$C_2$発（９：４５）ーデポ地（１４００ｍ）（１３：５５〜１４：２０）ー$C_2$（１４：５５）

内張なしで寝たため、非常に冷え込んで、全員「寒い、寒い」で目を覚す。シールボッカも大分慣れてきた。天気も申し分なく、こんな荷上げは多いに愉快だ。平井と2年生4名で、北東尾根1400m付近にデポを行なう。他の者は$C_1$より残りの荷物をあげる。

3月9日　曇後雪

4時起床　TS発(6:10)ー1400mピーク(10:30〜11:55)ーBC<北東尾根1600m>(12:30)

北東尾根下部は、急傾斜で時々木登りもある。早稲田パーティーのものらしいトレースがあった。上部はなるとエサオマントッタベツ沢側に雪庇が張り出している。まだ樹林帯中の尾根だというのに、風の強さ故だろう。カムイ岳ジャンクションピーク下1600m付近にBCを建設する。冬合宿の苦い経験を生かし慎重にテント地を決める。

北には、1940m峰ピパイロが、南にはエサオマントッタベツ、札内岳、そして十勝幌尻岳が遙か彼方にかすむ、恐しいはずの雪庇も、見とれてしまうほど美しい。

エサオマントッタベツ、北東カールがシルエットを描く、日高の夕暮れ、明日からあの稜線を辿る。

3月10日　曇後雪

5時起床　Depo回収　BC発(7:25)ーデポ地(1400m付近)(8:20 / 8:50)ーBC(10:50)全物資BCに集結。天候は思わしくない。午前中で行動を終え、午後からは休養をとる。

夜空に、帯広の灯が浮かぶ。期待と不安。明日より第一次計画に入る。

3月11日　晴後風雪

3時30分起床　BC発(6:35)ーエサオマントッタベツ岳(11:40)ーエサオマン札内分岐コル(11:50)幕営完了(12:20)

BCよりジャンクションピークまでは、昨日のトレースも消え、ラッセル深い。雪庇を越えて稜線上に顔を出すと、新冠から猛烈な風のお出向えを受ける。エサオマントッタベツまでの稜線は雪庇に絶えず気を配りながら一旦最低コルまで下り、そして小さなコブを2・3度登りエサオマン最後の登りに掛かる。

ピッチを切り、BCと交信する。今回のトランシーバー感度抜群である。日高幌尻の上にみごとなレンズ雲が現れた。先を急ごう。

それまでの好天ももののの30分も立たないうちに、ビュンビュン吹雪はじめた。顔右半分凍りつくように痛い。北峰までの登りは、かなりクラストしており、ガスの中、北カールへ吹込まれそうだ。白い嵐ときしむアイゼン。エサオマントッタベツからのカムイエクウチカウシの雄姿を楽しみにしていたが、これじゃあ無理だ。

札内分岐とのコルに急いで幕営する。平井、井上、田口、早川、村田、AC入り。サポートの松本、朝倉は昼エッセンもそこそこに、アタック成功を約し、BCへ帰る。夕刻より風雪やみ星空となる。

3月12日　晴

A・Cよりカムイエクチカウシ及び十勝ポロシリアタック。B・Cよりカムイ岳アタック。

○BC日記：5時に起床し、テントから顔を出す。快々晴だ。BCに残つている5名は、ゆっくりと朝食をとり、カムイ岳まで出発する。こちらの稜線は、トッタベツ沢側に巨大な雪庇が張り出している。少々歩き辛いが、ハイ松の根っ子の上を歩いていれば、間違いない。

1時間程、カムイ岳頂上で過し、BCへ帰る。BCで十勝幌尻を眺めながら、トランシーバー連絡を待つ。

絶好のアタック日和だ。彼等、さぞかし楽しんでいる事だろう。BCの5名はトカゲを決めこむ。

＜十勝幌尻岳アタック記録＞

○メンバー（L）平井$_3$ ．田口$_2$

少し遅いが、Attack・Campを6：00にカムエクパーティーと共に出発する。天候は良く、朝日に映る壮大な北海道の山々を楽しみつつ目的の山へと2人頑張る。

雪は、本州のものとは違い、非常に軽い。膝位までのラッセルならワカンを用いずとも、アイゼンだけで十分であつた。日高山岳の山々は高度こて低いけれども、温度等、全ての面に於てアルプスなみである。そして、今回の様にロングランといつた形になる。

私のパーティーは2人で、ラッセルの疲労が多く、時間が速く流れる思いだつた。喉が乾くので、ビニール袋に雪を入れ、帽子の下に入れて溶かす事を考えついた。

午後2時32分、幌尻Attackに成功。

日高の山は午後より天候が崩れるらしい。この日も例に外れず崩れ始める。思わぬ程ピッチはかどらず、札内岳の手前でビヴァーク。

−16℃〜−18℃位と思うが、案外に快適なビヴァークであつた。

翌日、少しでもACに近ずく為に行動する。そして、やつとガスの中にACを見つける。

（記　田口）

＜時間記録＞

12日：AC発（6：00）−札内岳頂上（8：30）−1709m峰（11：30）−十勝幌尻岳頂上（14：32）−ビヴァーク・サイト（17：30）

○13日：ビヴァークサイト発（6：00）−札内岳頂上（9：00）−AC（13：30）

＜カムイエクウチカウシ・アタック記録＞

○メンバー（L）井上$_4$ ．早川$_2$ ．村田$_2$

少し寝過したので、急いで準備してテントを出た。風はあまりないが寒い。

札内分岐をトラバースぎみに過ぎて、滑若分岐へ向う。雪庇は5〜7m、十勝側に出ている。アイゼンはよく効き、ラッセルの箇所も少ない。

滑若分岐を過ぎたあたりから稜線は痩せてくる。トラバースしたり、ハイ松の上を歩きながら、1852mの次のピーク迄来ると、急な下りにさしかかつた。ザイルを出して進む。80mのザイルで4ピッチ。80mのザイルでは大声を出しても、聞こえない場合があるのが少し

不便だ。これで少し時間がかかった。

カムエクの手前のピーク付近で昼食。どこに入ったのか全くわからない。十勝幌尻のパーティーと交信。どうやらビヴァークするらしい。

カムエクの登りは意外に長く、空腹も手伝ってフラフラになった。

やっと登頂。天候はいぜん快晴、黙禱した後そそくさと帰路につく。往路のザイル使用箇所は登りとなるので、ザイル使用せず。

１８５２ｍ付近で少しガスがかかったが、札内分岐の手前あたりからまた晴れる。テントに着いた時には、もう月が輝き始めていた。

（記　村田）

＜時間記録＞

ＡＣ発（６：００）ーカムイエクウチカウシ頂上（１２：５０～１３：１５）ーＡＣ帰着（１８：１５）

３月１３日　雪

◦ＡＣのカムエク隊３名と、ＢＣの５名は沈澱（前頁アタック記録参照）

◦ＢＣ日記：５時より十勝幌尻パーティーと交信を始める。視界が極めて悪いらしい、その事を交信の度に伝えてくる。くれぐれも、慎重に行動してくれるよう伝え、激励する。

１３時３０分、苦労しながらＡＣへ帰る。

渋谷、歯の痛みに絶えかねている様子。にもかかわらず、甘い物は人一倍食う。

３月１４日　曇後雪。

◦ＡＣ：ＡＣ発（８：００）ーエサオマントッタベツ北峰（９：３０）ーサポート隊と合流（１１：３０）

◦ＢＣ：起床４時３０分　ＢＣ発（７：１５）ー最低コルよりエサオマン側よりのコブ上（１１：００～１２：００）：ＡＣの５名と合流：ーＢＣ（１５：１５）

テントキーパーに歯痛の渋谷を残して、４名でサポートに向う。稜線上は、予想以上の積雪量で、所によっては胸までである。雪質は北アルプスに比して、フワフワで軽く、ラッセルもまだ救いがある。

アタック隊と、最低コルよりエサオマン側の１６００ｍのコブ上で合流する。５人共かなりのロングアタックであったため疲れているようだ。「オッス！　ゴクロウサン」何も言葉はいらない。これだけで十分だ。後はバカ話に笑いが絶えない。

昼エッセンの後、サポート隊、団装を受け取ってＢＣへＵターン。あとは我々にまかせろ。

３月１５日　晴

沈　澱。　第１次計画、予定通り終了したので本日は休養日とする。エッセン久しぶりにたらふく食べる。

非常に冷え込み、６時の測定の際－２０°までしか測れない我部の温度計では測定不能となった。ラジオでは、夕張で－２９°（３時）を記録したと報じる。今年の天候は、３月に入ってから予想通り大荒れ、冬に逆もどりの感がある。

３月１６日　曇後快晴

沈　澱。　3：30に飛び起きたが、ガスで視界全く悪いので、4時30分まで寝る。4時30分、依然視界悪く、今日のアタックは断念する。

7時頃よりガス晴れ出し快晴となる。天気判断は、どうもうまくいかない。

10時頃より、雪洞とイグルー作りにかかる。日数に余裕があったため、落着きすぎていたようだと反省する。マ、じっくり登ろうや。

3月17日　晴後曇・ガス濃し

3時30分起床。5時30分、テントキーパーの井上、田口を残し、日高幌尻パーティー6名、ピパイロパーティ2名の計8名出発する。

日高幌尻パーティーは、アタック成功後、19時15分BCに帰る。ピパイロパーティーは視界悪化のため、本日ピパイロまで行くのを断念し、BCとのトランシーバー交信により、明日は隠やかな天気になるとの天気予報を聞き、明日にそなえ、早目にビヴァーク体勢に入る。

＜BCよりピパイロ岳アタック＞

3/17 ～ 3/19　朝倉　満

Baсэ－Cамp出発時、東の空は真赤な朝焼けに輝き本日の後半の晴天は望めそうもないと思われたが、天気図より、そうひどく崩れないと考え、日高幌尻岳アタック・パーティー6名と共に出発。

稜線上は昨日通った酪農大Partyのトレースがあり、4ピッチでピラミダルな戸蔦別岳Pэakに達する。戸蔦別岳の登りだけは多少急だったが、ここ迄快調に飛ばす。

天候も登り頃よりガスが出始め、Pэakに達した頃は行動限界程度の視界となってしまった。

Peak上で幌尻隊6名と、互いの健闘を誓い別れる。昼エッセンをとった後、ガスの合間をすかしてルートを選定しながら進む。

1916m峰を下った岩の露出している地点より稜線が全く判別出来ず。1940m峰の登りに掛る前迄行って行動を断念し、先の岩の露出している地点まで戻ってビヴァークサイトを作る。

＜時間記録＞

BC発（5：30）－戸蔦別岳Pэak（10：40～11：10）－1916m峰（13：45）－1940m峰下¥最終到達点：（14：40）－ビヴァークサイト（14：40）

3月18日　晴後曇・ガス濃し。

長い一夜を明かし、空を見ると昨日と同じく神々しいまでに美しいモルゲンロートだ。トランシーバーでBCと交信し、予定通りピパイロ岳atackに向う。

1940m峰の手前の岩稜帯の登りは、雪を被り、戸蔦別川側は切れ落ちている。何度もゆるい登り下りを繰返して、やっとピパイロ岳Pэakに達する。

帰り、1940m峰以後ガスが発生しはじめる。朝は元気だったが、ビヴァークの為か2人共バテ始める。ビヴァークサイトで昼食をとる。

昨日の我々のトレースは、昨夜の降雪と風で

消し去られ、視界も１９１６ｍ峰より悪化し、額平側よりの風も激しくなる。

北戸蔦別岳周辺は股ぐらいのラッセルで、雪庇も一概にトッタベツ川方向に限らず、両方に張り出している。戸蔦別岳下の岩稜帯は雪が嫌なつき方をしており、昨日と同じルートを忠実に辿る。時折のガスの晴間をすかして標旗を見つけてやっと戸蔦別岳Ｐｅａｋに達する。

アンザイレンし、深雪のラッセルにバテながら、１７９１ｍ峰下のＣｏｌまで一ピッチの所迄達し、本日の行動これ迄とし、第2回目のビヴァークサイトを、新冠側の樹林帯の中にもうける。

尚、ＢＣより井上、田口がサポートとして、１７９１ｍ峰下のコルに食糧、テルモスをデポする。他の者は沈澱。

＜時間記録＞

ビヴァークサイト発（５：４５）－1940ｍ峰（６：３５）－ピパイロ岳Ｐｅａｋ（７：５７～８：２０）－１９４０ｍ峰（９：３５）－ビヴァークサイト（１０：０５～11：00）－北戸蔦別岳（１２：３５）－戸蔦別岳Ｐｅａｋ（１４：４０）－ビヴァークサイトⅡ（１７：４５）

３月１９日　曇

曇っているが視界はきく。２晩のビヴァークで相当疲労しているが、サポート隊が１ピッチ程の所迄来てくれるので大助かりだ。雪は全然しまっておらず、昨日同様、股迄のラッセルが大部分だ。１７９１ｍ峰下のコルでサポート隊と合流し、朝食、ココア、水をタップリ補給し、サポート隊のトレースを辿って、快調に２ピッチで懐しいＢａｃｅ－ＣａｍＰに戻る。

＜時間記録＞

ビヴァークサイト発（７：００）－１７９１ｍ峰下のコル：サポート隊４名と合流（８：00～８：３０）－ＢＣ（１０：２０）

これで、アタック目標すべて成功した。夕食後、アタック成功を祝い、残り少ないウイスキーで「乾杯！」

（カムイ岳Ｊ．Ｐへの登り）

３月２０日　晴

いよいよＢＣ徹収の日がやって来た。日高の主稜線とも、もうお別れだ。

気温、マイナスの世界から、プラスの世界へ向け下山にかかる。１４９０ｍ峰より、支尾恨を一本間違えて下る。

トッタベツ川まで下ると、バカみたいに暑い。えらい違いだ。

シーデポ地より、雪はベタベタに腐っておりスキー全然滑らず苦労する。もっとも、下り斜

面の場合はあまり滑らない方が我々には安心できる。

夜、トツタベツヒユッテで、同じく下山してきた酪農大学の人達と合同コンパを催す。

ＢＣ発（６：５０）ー北東尾根取付シーデポ地（１０：１０〜１１：００）ーヒユッテ（１６：００）

３月２１日　晴

ヒユッテの前で、日高幌尻岳に向い黙禱し、部歌を歌う。

「サア、行こか！」リーダー平井の掛声で、２・３人づつパーティーを組み、抜きつ抜かれつ。スキーさばきも大分板についてきた。オー、シーハイル！

最終人家で昼のエッセンを取り、そこからは三三五五スキーを引っぱって、文明の利器の待つ発電所バス停へと向う。

振り返る、日高の山々はまだ厳しい冬の姿だが、このあたりまで来ると、雪解けも急ピッチで、長居を決めこんでいた冬も、旅立つ準備でさぞ忙がしい事だろう。

雪解けの泥水を跳ね飛ばしながら帯広へ向うバスに乗り込んだのは、５時２０分。めっきり日も長くなった。「大阪へ帰ったら、暑くてたまらんぞ」などと心はすでに大阪へ帰っている奴もいる。

今頃は、大学キャンパスの桜の花も見頃だろう。

２２日朝、酪農大学山岳部、中田君宅にて、合宿解散する。翌２３日夜、大関先輩宅に伺い、先輩の現役時代の思い出話しや、アルバム等を見せていただき、楽しい一時を過した。

（松　本）

〔春山合宿反省〕

春山合宿を終えてみて、特に反省すべき点を上げてみると、まずそのアプローチのスキー使用という点であるが、北海道の日高では、どうしても、スキーに勝るアプローチはないと思われるが、参加者全員、スキーのアプローチ使用は初めてだったので、度々ワイヤーなどが切れる故障があいつぎ、時間をくう事になった。初めてのスキー使用である点を考慮すれば、今一つの備えが必要と思われた。

次に、ロングアタックに関してであるが、これは、そのビバークを前提とするアタックであるにもかかわらず、ビバークに関して、今一つ工夫がなかった事と、北海道の、特に日高における天候判断が、勉強不足のせいか、甘かった点である。

その他、雪庇、低温、積雪等、未知の山域での勉強不足が挙げられてくるが、当然、セーフティー・ファーストを原則とする以上、山の勉強は「し過ぎる」という事はあり得ないのであるから、今後の山行、合宿においても、今以上の山に対する勉強は必要である。

とにかく、最初の目標である、４つのピークにも登頂でき、事故も無く合宿を終了した事は、我々リーダー会にとって、満足な結果であった。

最後に、この一年間、我々リーダー会を支えてくれた部員各位に感謝すると共に、又、一年

間が始まろうとしている今、楽しい山行ができる様なクラブにしてほしいと思う。

（平井　記）

× × × × × × ×

## ◇ 各係反省

### ＜食糧係反省－早川栄二＞

春山合宿の方針であった、「ようけ持って行って、ようけ食おう！」というのが、全くなされなかったようである。というのは、あまりにも食糧計画そのものが定式化しすぎて試立し、バリエーションに欠けてしまった。又、アルファー米の個数を増したのは、増したが、初日から最後まで同量の計画であったので、入山1週間～10日たつと、量が不足してきた。沈澱食にも不満が出た。もう少し何かあれば良かったと思う。

ビバーク食については色々異論も出た。というのは、主に、ビバーク食が少なく、もっと、もっと研究する余地があったという事である。しかし、これだけは忘れてはならないと思う、それは、ビバークの事自体である。ビバークをする位の山行を行う以上、食糧の軽量化と、行動におけるエネルギー補給、という意味の食糧がビバーク食であると思うし、量が少なくて動けないのは、僕達自身の体力の不足と、トレーニングの不十分にかかっているとも思う。あれだけのビバーク食があれば、2～3日は大丈夫という精神的な力もつけていかねばならないのではなかろうか。

もちろん、山の楽しみの1つである食事ではあるが、ビバーク食もその範囲内で色々とおもしろい事が出来ると思う。

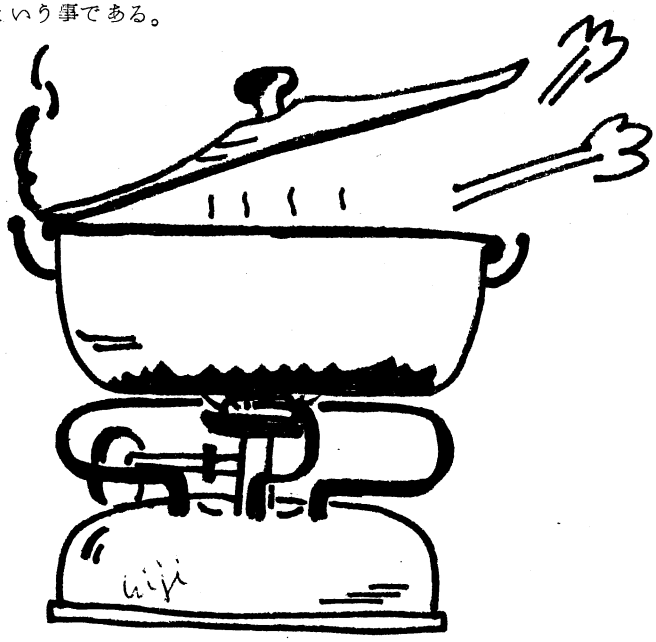
春山合宿で使ったビバーク食の内容は、次の通りである。

◇2人パーティー（1ビバーク用、2食分）

- ▫バランドケーキ1本　約1500カロリー
- ▫板チョコ　2枚　約　500カロリー
- ▫オボスボーツ　1箱　約1500カロリー

※行動食レーションは2日分持参。インスタントみそ汁を入れたパックもあったが好評。

× × × × × × ×



＜気象係報告－村田信一＞

| 時　日 | 3月7日 | 8日 | 9日 | 10日 | 11日 | 12日 | 13日 | 14日 | 15日 | 16日 | 17日 | 18日 | 19日 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6:00 | −8° | −12° ($C_1$) | −8.5° ($C_1$) | −16° | −16.5° | −14.5° | −15.5° | | −20°C以下測定不能 | −18° | | −15° | −14° |
| 12:00 | 8° | −45° (B・H) | −2° | −25° (1500m付近) | −13° | −11.5° | −13.5° | 不 | −8° | −10° | 不 | −7° | −9° |
| 18:00 | −4° | | −11° | −14° | −14.5° | −13.5° | −14° | 明 | −14.5° | −14.5° | 明 | −12.5° | −13° |
| (測定地点) | B・H | | $C_2$ | B・C | B・C | B・C | B・C | | B・C | B・C | | B・C | B・C |

＜備考＞
B・H＝トッタベツ・ヒユッテ（ピリカベタヌ沢出合標高４４０ｍ）
$C_1$　＝トッタベツ沢中流　標高６２０ｍ
$C_2$　＝エサオマントッタベツ沢出合　標高６８０ｍ
B・C＝カムイ岳北東尾根１６００ｍ地点
○尚気温はすべて摂氏

以上、入山中に測定できた気温である。観測の地点がまちまちであるので、風向、天候については割愛する。日高の天候は、複雑で、天気図による天候判断が難しく、また、天気図にたよった為、一日を棒に振った日もあった。しかし、今合宿中特に勢力の強い低気圧や、前線の通過がなかった為に、天気図があてにならないという事が言えるのであって、今後入山中に天気図を書かない。或いは、天気図を無視する等があってはならないのはいうまでもない。来年度の気象　にも大いに天気図を利用することを望み、気温の測定なども、今回は不十分な点があったが、今後も続けていただく事を期待する。

× × × × × × × × × × × × ×

＜装備係報告－朝倉　満＞

春山においてビバークを含むロングランが計画されていたのに、事前に燃料（メタ・ローソク）等の必要値や品質に対し研究を怠り、別の条件下で、実際の場合を推量してしまった。春山でのビバークが未経験なら、それなりに経験者に聞くなり、資料を調べるなりすることを徹底せず、当事者に負担を掛け申し訳ない。〃ケガの功名〃的だが、今回実地に各条件下に明細な必要値を得る事ができた。

又、今回の山行よりスキーを積極的に使用し、又今後共に使用する方針でいるが最初の事も手伝い、ビンディング等の細かい点に関する事柄に対し不備を生じ、行動に相当ブレーキを掛けた。これらの体験を段々に重ねて技術を会得しスキーの山行時の利点を伸ばしてスピード化を計りたい。新制品や既成品の改良について、一つでもレポートを作制出来るだけの研究及び報告までもなさねば進展が遅いだろう。

（１９７２年度春山、日高合宿団体装備表）

| 品目 | 重量 | 個数 | 備考 |
|---|---|---|---|
| A）露営用具 | | | |
| ウインバー No.50 | 10.5 | 1 | ポール．内張．断熱マット含む |
| ウインバー No.2 | 6.5 | 1 | 同上 |
| ツエルト | 4 | 4 | 全使用 |
| 金ペグ | 2 | 60 | 各天幕30 |
| エンピ | 3.5 | 3 | 大－1．中－2 |
| 氷ノコ | 1 | 3 | 小－2．大－1 |
| ローソク | 5.5 | 28 | 残20 |
| ササラ | 0.5 | 3 | 全使用．1本紛失 |
| B）登攀用具 | | | |
| ザイル | 9 | 3 | 80m（9㎜）－1．40m（11㎜）－2 |
| Fix | 4 | 100m | （6㎜）50m使用 |
| アイス・バイル | 1 | 1 | （ピック用）使用せず |
| カラビナ | 5 | 25 | 各自1枚＋各Party 5枚 |
| ロック・ハーケン | 1 | 10 | } 使用せず |
| アイス・ハーケン | 2 | 10 | |
| ハンマー | 2.5 | 2 | 各Party 1 |
| 捨て縄 | 1 | 約25m | 使用 |
| 竹ざお | 2 | 20 | 全使用 |
| トランシーバー | | 4 | SONY ICB－160B<br>〃 ICB－650 |
| 双眼鏡 | 0.5 | 1 | 使用 |
| 赤旗 | 1 | 50 | 30枚使用 |
| その他 | | | |
| ガソリン | 28 | 28 | 17ℓ使用 2ℓ紛失 |
| メタ | 1 | 4 | 1箱半使用 |
| 薬品 | 3 | 3 | |
| 小物袋 | 2 | 2 | 全使用 |
| 背負子 | 4 | 2 | 使用 |
| 天気図用紙 | 1 | 60 | 18枚使用 |
| ラジオ | 2 | 2 | 使用 |
| ホエーブス | 4.5 | 3 | 使用 |
| 炊事具 | 5 | | 鍋．ヤカン．等 |

# ～ポカラでのこと～

平井幹夫

１９７１年の春、ぶらりとネパールへやってきた。

カトマンズ郊外のトリスバザール付近で１０才と８才だという結婚式を見て微笑ましいと同時に何かかわいそうな気になり、「まあ、これも民族性の違いか」と納得して何処か美しい所でひるねでもとポカラに来た。

マチャプチャレをバックにその横にアンナプルナが広がって、もうそれは絵ハガキのようであった。一人で飛行場のそばでひるねした。

飛行場と言っても牛がごろごろしている草原で、一日４回飛行機が飛んでくる、それも元インド空軍のはらいさげとかで少々ガタついたプロペラ機で２０名位乗れる。

飛行機が飛んで来ると係員が棒を持って牛を追っぱらうその姿がなんともこっけいである。

昼寝している近くでくだものを売っていた。じっとすわって客を待っていた。昨日もそうであったが、一人も客らしい人はみかけない。しかしじっとすわっている。

すぐそばでバザールへ行くバスが出るとオッサンが言うので、バザールへでも行こうかとバスに乗った。

しかし、ちっとも出そうにない。聞くとまだ２～３人は乗れると言う。このバス、満員になると出るのだそうだ。結局３０分位待たされる。やっと出発しようとするとバスが動かない。降りてくれと言う、いっしょうけんめい押すとやっと動き出した。ガタボコ道をゆっくりとゆっくりと、１５分位でバザールであった。「あ～何とまあ」。

次の日の朝、日本のマナスル西壁隊のキャラバンが出発していった。３００名ほどの大キャラバンで次々と出発して行くがなかなか終りにはならない。こっちも少々退屈して又、ひるねした。

起るともうキャラバンの皆んなは、いなくなり又、あの果物を売るオッサンが、じっとすわって客をまっていた。そして夕日がヒマラヤの山々を染めていた。明日もいい天気であろう。きっと、そして、又、ひるねでもしよう。

# ＝女子活動報告＝
# ＝中・高合宿報告＝

# 目　　次

## 女子活動報告


女子活動記録 ---------- 63

はじめに ---------- 西川 けい子 ---------- 63

山行記録 ---------- 65


## 中・高校合宿報告


1971年度夏山合宿・朝日岳縦走 ---------- 吉田 啓方 ---------- 70

1972年度夏山合宿 ---------- 70

気　象 ---------- 吉田 啓方 ---------- 71

夏山合宿失敗談 ---------- 石塚 直也 ---------- 71

1973年度夏山合宿 ---------- 72

## 女子活動記録

| | | |
|---|---|---|
| 45年 | 4月 | 益子、マネージャーとして入部 |
| 46年 | 4月 | 中辻、南条入部 |
| | 5月 | 西川入部 |
| | 6月 | 個人山行<上高地> |
| | 11月 | 秋山<穂高・慶応尾根末端> |
| 47年 | 3月 | 益子退部 |
| | 4月 | 鷹巣・吉松入部 |
| | 5月 | ハイキング<岩湧山> |
| | | 岩登り<蓬莱峡> |
| | 6月 | ボッカ訓練（20Kg） |
| | | 個人山行<尾瀬> |
| | | 岩登り・ボッカ訓練（25）<ロックガーデン> |
| | | 岩登り<仁川> |
| | 7月 | ハイキング<東おたふく山> |
| | | 夏山<雷鳥～針ノ木縦走> |
| | 10月 | 岩登り<仁川> |
| | | 〃 <保曇> |
| | 11月 | アイゼンワーク・月見コンパ<ロックガーデン> |
| | | 秋山<女子だけ・七曲りを経て六甲最高峰> |
| | | アイゼンワーク・ボッカ訓練（30）<蓬莱峡> |
| | 12月 | スキー合宿<親沢甲南W.V.小屋> |
| 48年 | 3月 | ボッカ訓練（30）<金鳥山> |
| | | 春山<蝶ケ山> |

## ―はじめに―

男子のガッチリ組まれた組織の中で、表現は悪いが、籠の中のハツカ鼠のごとく行方定かならず暗中模索という感じで、しかしながら、喘ぎながら必死でかけっこをしている、それが私たち女子部員だと思います。今、2年目が終り、今後どういう方向に進んでいこうとするのか‥という問題に関しては、後の欄で述べることにしまして、女子がどういう風に今まで歩んできたのか、という事をまずは述べたいと思います。

甲南大学山岳部に、女子が再び顔を出し始めたのは、沢田さんたち以来7年後の、しかもマネージャーという形としてでした。翌年の46年軽い気持で女子が3人入部してきました。女子の希望する山行と部の方針がうまく一致してか、下界での雑用に明け暮れする毎日でも不満は大して起こりませんでした。いわば、今日の女子の姿はマネージャー的なものから派生してきたといえるでしょう。6月の個人山行期間中に、当時4年生の大辻さんが、涸沢へ入られる為に途中の徳沢まで女子を連れて行って下さることになりました。徳沢といえども、山登りなどしたことのない、従って山を知らない女子にとっては大はしやぎするにまさに価値ある所でした。

また、下界での部活動はというと、週末のキャンプはしないで、月に1－2度日曜日にテントサイトまでハイキングの様な形で参加。勿論岩登りの事など考えてもみませんでした。

トレーニングは男子とは程度こそ雲泥の差がありましたが、計画通りやっていました。

そして１１月になり、男子が荷上げで上高地に入るのに便乗して女子も途中まで連れて行ってもらいました。人気のない山の美しさを実際目で見、膚で感じ、又男子の山生活に１日だけだけれど触れることができ、その力強さに感激してしまいました。

女子４人共通していえることは親との問題であり、それに打ち勝つだけの勇気もなかったということであります。しかし、山や部に対しては各々少しずつ意見が異なり毎日の様に話し合っていましたが、結局３月に各々違う意味で〃このままでは嫌〃という結論に達し、当然退部という問題が起こりました。そして益子さんは退部され、中辻・南条はマネージャーとして、西川は女子部員としてがんばることを決意しました。

そして４月になると２人の若々しい新人が入部。基本的なロッククライミングは身につける必要あり・・・・との考えで、週末のキャンプに参加するようにもなりました。６月の個人山行では、マネージャーもいっしょに楽しい山行を・・という目的をもって尾瀬を計画し、期待通り天候にも恵まれ、行動中以外は笑いが絶えない楽しい山行となりました。やはり同性は多い方が楽しい！　その後も男子と行動を共にして夏山に至ったのであります。北海道から直行の平井さん（来春山は男子は北海道・日高）をリーダーに初めての夏山に挑む。
雷鳥から五色ケ原まで男子といっしょでしたが、食料のとり方、ピッチのきり方・・・など、男女の違いが形になって表われ、お互いにマイナスにならない為に、考えるべき所が多かったです。又雪上訓練など受けた事のない女子にとって、針ノ木雪渓の下りはまさに地獄の百丁目の様なもので、雪上訓練の必要性を痛感致しました。

その後何度も〃女子のあり方〃について討論を重ねたものの、正否がはっきり言える程単純な問題でもない為、結局結論が出ずにおえてしまう事がほとんどでした。しかし、最終的には女子パーティーとして山行できるだけの力を得る、即ち女子パーティーで山に行くことであるので、手始めに、周囲の目を気にせず、六甲最高峰へ、かえる岩をＢ・Ｃとして女子３人だけで〃七曲りコース〃を選び、２泊３日でゆっくりアタック（？）しました。
そうこうしている内に冬がやってきましたが、女子の冬山は考えていませんでした。が、男子の縦走終了後のスキー合宿の時参加してはどうか・・・というリーダー会からの意見で、女子はすぐ有り難く賛同し、山本さんをひっぱり出し、そして実験などの関係で男子の方へ参加できなかった田口、松下両名も加わってにぎやかに出発しました。初めて歩く雪山に女子はただ夢中！ワッパ・スキー・アイゼン・ピッケル・・・そしてイグルー生活！何よりも雪合戦！すばらしい日々でした。そして、年が明け、春がやってきました。雪にあこがれる気持は募るばかりでしたが、男子が北海道へ飛んで行くので、来年から春山へ・・・とあきらめていましたが、４年生の方が２人、諸事情により残られる事になった

ので、チャンスとばかり連れ出し、雪山に行く計画をたて〝蝶ケ岳〟に決まりました。冬にしろ、春にしろ、直前になって決まるという風な無計画な山行になってしまい、これは大いに問題がありましたが、女子の指針をはっきりしていなかったことの代償ではなかったろうか・・・と思います。しかし、とにかく蝶ケ岳アタックは若干のハプニングを残して、無事成功しました。そして女子の各々の小さな胸に残ったものは、すばらしい雪山と、すばらしい仲間と、そしてこんな無計画な山行では長つづきしないという一抹の不安だったのではないでしょうか。

## 山行記録

### 1971年

#### ～6月個人山行<上高地>～

大辻（4）中辻（1）南条（1）西川（1）

6月13日　大阪発

6月14日　松本ー上高地ー明神ー徳沢

生まれて初めての山行で女子3人はしやぎまわる。時間は少し遅れたが、予定通り表縦走パーティと合流。テントとロッジの行き来も楽しい。

6月15日　新村橋付近散策ー上高地ー松本

梅雨期中の晴天日なので人も少ない。男子が横尾まで行っている間新村橋でヒルネ。

6月16日　帰阪

#### ～秋山<慶応尾根末端>～

男子・南条（1）　西川（1）

男子の冬山（北尾根）偵察及び荷上げを兼ねて慶応尾根末端まで。

11月8日　上高地ー明神養漁場（デポ）ー黒岩ー慶応尾根末端T．S

初めてのキスリング、ボッカ、テント。デポ分を含めて計18Kgもないザックのなんと重いこと！その夜は入山コンパと女子の撤収コンパで、生まれて初めてウィスキーを飲む（ちょっぴり）

11月10日　T．Sー徳沢ー上高地

偵察に行く男子と別れて、徳沢目指して昨日のトレースどおりポッケポッケと降りて行く。ふり返れば新雪に抱かれた穂高のなんと美しいことか！

11月11日　帰阪

### 1972年

#### ～6月個人山行<尾瀬>～

井上（4）松本（3）中辻（2）西川（2）
鷲巣（1）吉松（1）

5月30日　大阪発（急行北国）

5月31日　晴れ

大清水（13：30）ー一ノ瀬（14：30～15：20）ー三平峠（16：10）ー尾瀬沼T．S（16：30）

マネージャーも交えて賑やかに出発。不慣れな夜汽車の疲れがでてか、三平峠までの辛く長い道！峠に立つと尾瀬沼が一望のもと。皆今までの苦しさを忘れてみとれてしまう。

やはり尾瀬は美しい。

6月1日　晴れ

Ｔ．Ｓ（７：００）ー沼尻（８：００）ー下田代（９：１０〜１０：４０）ー山の鼻Ｔ．Ｓ（１３：００）

鍋のついたキスリングを背負い、黙々と木道を歩いて行く。（尾瀬はやたら木道が多い。）

期待のミズバショウはまだ咲いていない。全員昼眠ばかりして楽しむ。

6月2日　晴れ

Ｔ．Ｓ（７：２０）ー鳩待峠（８：４０）ー小至仏（９：３０）ー鳩待峠（１０：１０）

鳩待峠で１年生２人を残し（風邪ぎみ）、小至仏に登る。久しぶりの土の感触が嬉しい。上部は雪渓が残っており、雪上歩行を楽しむ。

6月30日　帰阪

## 〜夏山<雷鳥〜五色ケ原〜針ノ木縦走>〜

平井（３）西川（２）鷹巣（１）吉松（１）

7月28日　大阪発

7月29日　曇り

室堂（１０：３０）ー雷鳥（１１：１０）

室堂で北海道から直行の平井さんと再会し、今日三ノ窓に入られる井上さんと共に定着合宿を終え明日より縦走に向う男子の待つ（？）雷鳥に向う。さあこれからダ！

7月30日　曇り後雨

Ｔ．Ｓ（６：３０）ー一ノ越（８：２０）ー獅子岳（１１：１０）ーザラ峠（１２：２０）ー五色ケ原Ｔ．Ｓ（１３：３０）

鬼岳をトラバースした所で、雨が本格的に降り出し雨具をつける。男子とは今日のＴ．Ｓも同じ所だが、別行動をとりマイペースで進む。ピッチのきり方も３０ー４０分とした為思った程辛くない。

7月31日　晴れ

Ｔ．Ｓ（５：４０）ー刈安峠（７：３０）ー平ノ小屋（８：４０〜１０：５０）ー平ノ渡場（１１：００〜１１：３０）ー南沢（１３：１０）ーＴ．Ｓ（１３：２０）

今日は３パーティに分散する。が、平ノ渡場まで森さんたちの東沢パーティと行動を共にする。傾斜が急で、しかも道も悪い為かかなり派手に転ぶ者も出て来る。平ノ渡場で昼食をとり、東沢パーティと別れた後、太陽の照りつける河原をケルンを追って進み、２ー３度浅い渡渉す

るが、無事南沢に着き、上流へ行って幕営。

8月1日　晴れ

T.S(5：40)ー針ノ木沢出合(8：40～9：10)ー針ノ木峠(12：50)

快適なT.Sを後に、ケルンや踏跡をたどって川を登って行く。針ノ木沢出合は幕営地としては状態があまりよくない。その後脇道を1本見落した為、ガレ場を嫌という程登るハメとなる。バテながらもやっと峠に到着。

8月2日　晴れ

T.S(7：30)ー針ノ木岳(8：10～8：40)ー針ノ木峠(9：10～10：10)ー大沢(12：10)ー扇沢(13：50)

サブザックで針ノ木岳へ。すばらしい大展望に皆感激。雪上技術など皆無の女子は、針ノ木雪渓の下りでは悪戦苦闘。平井さんの苦労は絶えない。雪上訓練の必要性を痛感し、女子部員の今後の方向づけともなった。

8月3日　帰阪

## ～スキー合宿<親沢甲南W.V.小屋>～

山本(4)田口(2)松下(1)西川(2)
吉松(1)

男子の冬山縦走の終了地W.V小屋で合流し、共にスキー・雪上訓練を受ける。

12月23日　大阪発

12月24日　雨のち曇り

立屋(12：40)ー親沢スキー場(13：20)ーW.V小屋(14：40)

豪雪の為4時間も国鉄が遅れたにもかかわらず、当地では雨が降り、辺りは春山の様な風景で、一同思わず渋い顔。スキー場よりスパッツとワカンを付け快調に進む。が、小屋は見えるのになかなか近づかない。テントもないので団装は少ないが、それでも雪の上を歩く事はなんとしんどいことか…。その夜はX'マス・イブでもあって、ケーキで祝いあう。

12月25日　雨のち雪のち曇り

〔午前〕スキー訓練

〔午後〕雪上訓練(女子)・スキー訓練

天候が悪い為、〃山ノ神アタック〃は断念して急きょスキー訓練に変更。なんとまあ…。昼食の後、女子は田口君の指導のもと雪上歩行の練習。こんなに多くの雪に接したのは初めての為か、何をやっても目新しくすばらしい。持病の神経痛でこられなかった鷹巣の事を思うとかわいそうになる。男子との無線交信はダメ。その夜は、W.Vの4年生2人を交えて楽しいクリスマスの一時を過ごす。

12月26日　曇のち雪

W.V小屋(7：10)ー合流(10：00)ーW.V小屋(11：40)午後から雪上訓練(1年・女子)他はスキー訓練

今日は山ノ神付近まで行くことになり、ファイトを燃やしいざ出発！雪がしまっているので急斜面もトレースに沿って快調に登る。サポート隊との無線交信がやっとできた。縦走隊と合流し今下山中とのこと。もうすぐ会える。そう思うと皆胸はずませて足早に前進。次の交信後まもなく合流。元気だ、皆。バンザイ、バンザイ！

１２月２７日

イグルー作りとスキー訓練

初めてのイグルー作り。氷の堅さにびっくりしながら氷のこで切っていく。その夜は、女子と１年の男子が２つのイグルーに分れて、心踊らせながらシュラフに身を包む。

１２月２８日

下　山

Ｗ．Ｖ小屋を早朝に立ち、男子はスキーを女子はワカンをはいて下の親沢スキー場へ降りてゆく。そこでしばらくゲレンデスキーを楽しみ、帰途に着く。

１２月２９日　帰阪

## ～春山合宿＜蝶ケ岳＞～

山本（４）森（４）中野（２）西川（２）

鷹巣（１）吉松（１）

３月２２日　大阪発

３月２３日　晴れ

山吹隊道（７：００）ー坂巻隊道（９：３０）ー中の湯（１０：２０～１１：００）ー木村小屋（１４：００～１４：４０）ー小梨平Ｔ．Ｓ（１５：１０）

みかんをさし入れて下さったタクシーの運転手さんとも別れて、いざ〃蝶ケ岳〃目指して元気よく第一歩を踏み出す。坂巻隊道はよく凍っていて、転倒してオデコに大きなコブを作る者も出てくる。くわばら、くわばら・・・・ピッケルで足場を作り通過。釜トンネル出口からしばらく雪崩多発地域なので、呼吸を整え、安全を確めて一気に通過。木村小屋で熱いお茶と漬物を御馳走になり、その後、小梨平で幕営。

３月２４日　雪

Ｔ．Ｓ（７：４０）ー明神（９：３０）ー徳沢（１０：５０）

雪道で女子盛んに踏み抜いて足を埋まらせ、それだけでかなり体力を消耗する。明神からは、すれちがったパーティーのトレースのおかげで、やや楽になった。長塀山の途中までデポする予定だったが中止して、テント生活を楽しむ。ここは我々だけのまっ白い世界。ウキウキする。今日は４年生の方の卒業式の日にあたり、心からお祝いする。おめでとうございまーす！

３月２５日　曇り

Ｔ．Ｓ（７：００）ー長塀尾根次テント予定地（2.４５０ｍ）（１１：３０～１２：００）ーＴ．Ｓ（１３：３０）

今日は明日のテント予定地までデポだ。長塀尾根の樹林帯の中、急斜面をジグザグにどんどん高度をあげていく。ラッセルも膝より下で、クラストした所もアイゼンがよくきく。が、うわさ通りのきつい登りだ・・・。森・中野による上部偵察の後、２ピッチで下る。

３月２６日　曇り

Ｔ．Ｓ（６：５０）ー長塀尾根Ｔ．Ｓ（１１：００～１１：２０）ー長塀山（１２：１０）ー長塀尾根Ｔ．Ｓ（１２：４０）

前日のトレースがほとんど消えていたが、皆頑張って、昨日より少し速いペースでテント地着。森・中野・西川の３名が長塀山まで偵察に

いく。その夜は、テルモスが２つも割れる程冷え込んだ。

３月２７日　晴れ

Ｔ．Ｓ（６：２０）ー長塀山（７：１０）ー蝶ケ岳（９：４０〜１０：２０）ー冬期小屋（１０：５０〜１１：２０）ーＴ．Ｓ（１４：００）

「オッ！すばらしいモルゲンロートだ」その声に皆一斉にテントから飛び出す。今日はすばらしいアタック日和。ラッセルも膝より下で、快調に進捗。稜線に出ても風はそれ程なくて、アイゼンのキュッキュッときしむ音だけが快い。そろって頂上に立つ！穂高が目の前に迫る。感概無量！下山中、鷹巣神経痛がでてき、初めてツェルトの暖かさを知る。

３月２８日　雪のち雨

Ｔ．Ｓ（７：２０）ー徳沢（１３：３０〜１５：００）ー明神（１６：２０）ー木村小屋（１８：００）

赤旗や昨日までのトレースどころか、今つけたトレースも、ものの１０分程したら消えかかる中を、木村小屋目指して下山する。夏道より少し左まきにトラバースしたようで、ルンゼのような所をクライミングダウンしながら慎重に降りる。かなりスリップする者も出てきたので、マンツーマン方式で必死で下山。西川再びスリップしそうになり、キスリングだけ先におろす事にする。が、雪の下に埋まったのか、どうしても発見できず（５月に発見）。上部では雪だったのが、徳沢まで降りて来ると雨に変わり、徳沢園冬期小屋でしばらく休む。そして雨の中をただひたすら木村小屋へ。

３月２９日　曇りのち雨

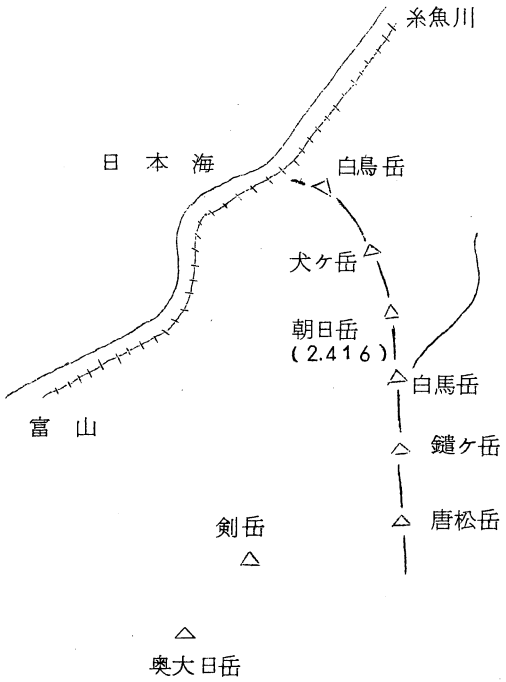
木村小屋（８：００）ー中の湯（１０：２０〜１０：４０）ー山吹隊道出口（１２：４０〜１３：２０）ー沢渡（１３：４０）

昨日の雪や雨の為か、かなりなだれていて、デブリが発達していたので、中の湯までペースをあげて進む。坂巻隊道をすぎてしばらく行くと、除雪車が入ってきていて、その後の道のりはかなりしらけたムードになる。前もってチャーターしてあったマイクロバスに乗り込み、思い出深き北アルプスの峰々を後にする。

# 甲南高校・中学合宿報告

## －1971年度夏山合宿－

メンバー　沢田　匡　吉本英公（C・L）
　　西田　守　吉田啓方
　　高橋先生




### ＜朝日岳縦走＞　吉田啓方

メンバーは沢蟹山岳会という会の開いた新ルート、栂海新道を行くことになった。

日本海のすぐ横の所から犬ケ岳、長栂山という1,000m級の稜線を進み、朝日岳、雪倉岳、白馬岳、蓮華温泉というコースである。朝日岳まで1泊2日か2泊3日だと思っていたのが、4泊5日になってしまった。コースが出来てから、2つ目のパーティーだということなので、踏跡なんかはなく、コースもかなり荒れているのでものすごく時間を使わされる。それに雨に降られる、道に迷う、水場にはたどりつけない。テント・サイトへも行けず、毎日毎日、道の真中にテントを張り、結局朝日岳迄の間は体を伸ばして寝れる日はなかった。

でも、他のパーティーにはほとんど会わなかったので、自分達だけが山に入っているような気分になれた。しかし、道は、両手両足を使わされる所も数多かった。

そして白馬についた時、Gパンなどで登って来た人達を見た時、同じ山に登るのに色々な登り方があるということがよく分った。

この合宿では、エッセン計画は完全に失敗に終った。3泊も伸びたので、エッセンを少し切りつめただけなのに、最後の日にはエッセンがたくさんあまっていて、持って降りたほどだった。

## －1972年度夏山合宿－

メンバー：C．L　西田　守（高2）石塚直也（高1），吉田啓方（高1）、上村一正（高1）山内　透（中1）、東　久人（中1）、OB多田　高橋先生、南里先生

### ＜劔・立山・黒部＞

行動予定：7月22日大阪発　○23日富山→室堂→劔沢（B．C）　○24日劔沢→立山

○２５日剣沢⇄剣岳頂上○２６日剣沢→仙人池○２７日仙人池⇄大窓・小窓○２８日仙人池→ケヤキ平→富山○２９日大阪着

＜気象＞　吉　田　啓　方

剣・立山では、太平洋の低気圧の影響は少ないができると、かなり影響する。又台風によっても天候が大きく崩れる。

＜雲＞

雲が厚く低くなって、雨雲（乱層雲）が押し寄せてくると雨になり、薬師の方から、積乱雲が押し寄せて来て、雷が発生する。雷は上からだけでなく、左、右、下からも来る。雷雲（積乱雲）が見えると、金物をはずして岩影にかくれる。大木は近づかない。

＜天気図＞

２０日○３時の天気図によると、台風９号の影響が心配される。天気図の型としては、梅雨明け型となるようだ。天気の型で停滞前線が日本海に上り、オホーツク海の方から高気圧が張り出してくると、夏型の天気図で、天気は１０日間程安定する。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

## ー夏山合宿失敗談ー

石　塚　直　也

この合宿で私は、大失敗をやらかした。なんと大阪駅にザックを置き忘れたのである。今思えば笑い話しとして、なつかしい想い出なのだが、あの時はまったく泣きたいような気持ちだった。この話をここに書くのは大変勇気のいることだが、今後私以外の人が（たぶん私は二度とザックを忘れることはないだろう　）このような失敗をおかさないためにも、あえて書くことにする。

７月２３日、われわれ８名は、台風のため１日出発が遅れたことも気にせず、意気揚々と大阪駅で列車を待っていた。ザックはいつもの通り、ホームにきちっと並べて置いていたが、私のザックは乗客が多かったため、同じ所におけず、少しはなれた荷物運搬用のワゴンの後に置いていたのだが、これがまちがいの元であった。

列車が入ってくると、私とリーダーの西田さんは、席を確保するためピッケルを持って車内に飛び込んだ。まづピッケルで席を確保し、他の部員が窓からザックをほり込んで、確保を完全なものとする。という抜群のチーム・ワークでまんまと座席をせしめることはできたのだが、私のザックだけ入れ忘れていた。しかし列車の窓からはワゴンの影になって見えず、誰れもザックが残っていることに気付かなかった。結局富山で気付いたのだが後のまつり、電話で友人にザックのことをたのみ、１日遅れて来られる多田氏に持ってきていただくよう手配したのだが、うまくコンタクトできず、しかたなしに駅前のスポーツ店で雨具やアイゼン等を買い揃え、後から来られた多田氏を迎えて富山電鉄にて室堂に向った。あの時は高橋先生と多田氏にはずいぶん御迷惑をおかけしました。とくに、しょげ返っていた私に、色々気をつかって下さった高橋先生、ほんとうにありがとうございました。ここであらためて御礼申しあげます。

## ー１９７３年夏山合宿ー

中央アルプス北部縦走を行ないました。メンバーは石塚直也、吉田啓方、峰山重行、上村一正、渡辺誠一、山田隆雄、山内透、常岡武史と高橋先生の９名です。

最初の計画では奈良井から将棋頭を越え、駒ケ岳で一泊、宝剣を越え、檜尾との間で一泊、殿こしで一泊、そして、空木、南駒、須原と、三泊四日の計画だったんです。

でも、まず、バスが途中までしか行かなかったのですが、僕達はトラックをヒッチ出来たんです。そして四合目から歩き出したのです。ピッチは大変遅く、全員汗だく、その上雨もパラパラして来ています。でもピッチはあがらず、将棋ノ頭についたころには、日は西に沈みかけていました。その日は、駒ケ岳まで行けず、でした。

次の日は、岩とくさりの宝剣を越えて、檜尾の先まで行けたんです。昨日の遅れは取りもどしたし、上機げん。でも、今日は駒ケ岳の小屋でお花畑をふんだことと、昨日の設営のことですごくどなられたんです。ほんとうに中央アルプスでテントは駒ケ岳以外張れないなんてことは……　。

次の日は３時起きの４時半出。ビバークだったので朝のさむさが身にしみた。その上今日は、必死にならなくてはという予想だったのです。でも、以外に空木の殿越までは近かったと思います。１１時頃着いて、空木にアタックだけしか出来なかったんです。

南駒への道は、工事中通行止だったんです。それで、倉本に下ることになり、下り出したのは４時前でした。４合目あたりに小屋があるので、そこまで行くのです。でも、日はとっぷりとくれても小屋には着きません。小屋にたどり着いたのは、８時を回っていました。もう全員、ぐでんぐでんに疲れていました。この日は１５時間行動だったのです。

翌日はゆっくりと寝て、倉本へ向って下ります。途中、沢で水遊びをしたりして、倉本の近くまで着いて、倉本駅は見えるのですが、着かないんです。結局、駅が見えてから一時間ぐらいかかったと思います。

今回の合宿はコース変更がありましたが、まず成功だと思います。

# ＝1973年甲南大学山岳部
# カナダ・ロッキー山脈登山報告＝

| | | |
|---|---|---|
| リーダー | 井上知三 | （48年卒） |
| サブ・リーダー<br>医薬 | 平井幹男 | （文4） |
| サブ・リーダー<br>食糧 | 松本好博 | （法4） |
| 記録・食糧 | 早川栄二 | （経3） |
| 会計 | 村田信一 | （経3） |

# 目　　次


カナダ・ロッキー山脈登山をふりかえって …… 井上知三　73

出発までの経過 …… 74

活動経過 …… 74

行動日誌 …… 松本好博　75

Mt. Robson …… 早川栄二　83

食糧報告 …… 松本好博　89

装備報告 …… 平井幹男　90

医薬報告 …… 平井幹男　94

会計報告 …… 村田信一　95

反省会議事録 …… 96

# —— カナダ・ロッキー山脈登山をふりかえって ——

48年卒 井 上 知 三

このカナダロッキー山脈登山計画は、〝海外の山を登りたい〟との我々の夢を実現しようと、昨年の5月頃より準備が始められました。そして、本年は、山岳部50周年でもあり、我々としては是非行ないたいとの気持ちが強まり、日頃の部活動と平行して準備を進めて行きました。その頃、関東の山岳部の友人達が、混成パーティーでカナディアン・ロッキーズ登山を行なっている事を知りました。（帰国後、資料を戴いたり、スライドを見せて戴いたり大変参考になり、そして励みにもなりました。）部会等で、カナダ・ロッキー山脈で合宿が出来ないものかを研究及び、討論を続けていた最中だったので、大変ラッキーだったとも言えます。合宿として全員参加という型で行なうには、相当の困難があるという結論に達し、分散合宿として半分は従来通り日本で合宿を行ない、半分は（上級生）カナダでという事で話がまとまり、先の関東の人達の御協力もあり、急速に進んで行った訳です。

この計画発案でも明確な通り、私としては、とにかく、日本を離れ、海外の山を思う存分楽しみに行きたかったのが本心であります。カナダは入国が容易であり、又山自体も高度こそ低いが氷河があり、日本では経験のできない多くのものがあると考えました。目標として、カナディアン・ロッキーズの最高峰であるMt.Robson(3953m)への北面からのルートを選びました。このルートは、日本には記録もなく、我々のよい励みにもなりました。

準備も軌道に乗って来た所へ、合宿として行く以上学校の許可が必要であり、又学校側としても、海外での合宿となると前例もなく、慎重にならざるを得なかった様で、山岳会のバックアップなしでは合宿としての認可が与えられないとの事でした。山岳会にバックアップをお願いするのと同時に、万一の場合の連絡経路も確立しておきました。以上のような段階を踏んで6月20日、カナダへ向けて出発した次第です。

カナダにおいては、五名の隊員一致協力し、初めの頃は語学力のなさに気のめいる日もありましたが、山に入ると水を得た魚のように元気を取り戻し、最大目標のロブソン北面からの登頂を始め、レイク・オハラ周辺では、ビクトリア、リフロイ、パーク・マウンテン、ロブソン周辺ではレスプレンデント、リアガード。そして、8月中旬、他の四名のO.Bと合流しMt.アシシニボイン登頂と、7つの頂に立つ事が出来ました。

海外に行った誰もが感ずるところの、海外の登山は、出発前の準備と、帰国後の処理が重要であることを痛感した次第です。

この様な海外登山は今回が初めての経験であり、今回の教訓を生かし、又批判を加えて、今

後もどんどん海外に出て行ってほしいと思います。〃夢〃は、アラスカ、アンデス、ヒマラヤと果てしなく広がります。〃夢〃の実現に努力する事、それ自体すばらしい事であり、忘れてはならない事だと思います。

最後になりましたが、この海外合宿に際して、お忙がしい中、現地からの連絡について御配慮を戴いたカナダ、太平洋航空・窪谷氏、種々お世話になりました中谷学生部長はじめ大学関係の方々、及び山岳部顧問・山本三郎先生、山岳会々長はじめ山岳会諸兄、遠征費用の面で御援助戴きました各団体の皆様に、誌上を借りて心から感謝致します。

◇　◇　◇　◇　◇

## ＜出発までの経過＞

我々、大学山岳部が、その山行を海外に於て行なう事は色々と問題があります。しかし、そのような諸問題以上に、海外合宿を行なう事によって、外国の人々と直接話し合い、多くの違った経験を与えてくれる事は、学生である私達にとって、貴重な事であり、国内の山行では得ることの出来ない何物かがあります。又色々な事務的手続等を経験し、問題点を整理して山行へと出発する事は、部員のより一層の協力が必要となります。

何か思いつめたように、同じ事ばかり繰り返し「行きづまった」とか「斜陽大学山岳部」だとかいう空念仏はもうこの辺でやめにして、違った見方も加え、山に登る行為のみに終ってしまわず、幅広い登山活動を行なおう、という我々の活動方針の一区切りであり、又新たな一布石としようと考え実行していった訳です。

計画発案当初は全部員による海外合宿を行なう考えでしたが、甲南として何分はじめての事であり、全員による海外合宿は今回の場合適当ではなく、今回は、上級生４名（４年２名、３年２名）とＯ．Ｂ１名の計５名からなるパーティーがカナダへ。又、基礎技術修得を目的とする１パーティーが剣岳真砂沢で、定着後分散。女子部員パーティーが剣沢定着、後半縦走、という分散形式で夏合宿を行なう事となりました。４８年度リーダ全員数が多かった事が、今回分散という形をとって、海外登山を行ない得た最大要因であったと言えます。

## ＜目標選定の理由＞

(1) 出入国が容易である。

(2) 関東の学生登山隊２パーティーがほぼ同一の山城に入山しており、学生隊としての技術面その他を考慮するに妥当な目標である。

(3) 氷河が存在する。

(4) この山城に入った日本隊の記録は、意外に少ない。

## ＜活動経過＞

４７年５月　部員総会にて発案。

６月　地図及び資料購入。

9月　情報収集及び資料購入の為、村上O，B、早川上京。

10月
11月
12月　資料翻訳及び、詳細な山城研究

48年1月　航空会社訪問

2月　昨年の、全日本学生カナダ登山隊の方々と会う。（井上他2名上京）

48年4月　目標山城を、レイク・オハラ周辺、ロブソン・グループ、アッシニボイングループの3地域にしぼる。

5月
6月　渡航準備及び梱包

6月20日　羽田発

## 〔　行　動　日　誌　〕

松本好博

6月20日

18：40羽田発（CPAir404便）

6月20日

12：00バンクーバー着。CPAir田畑氏の御世話で税関フリーパスとなる。時差ぼけの為、体だるくて仕方がない。

明日からのバンクーバーでの仕事についてミーティングを行ない、早々とベッドにもぐる。夜10時頃まで外は明るく、調子が狂う。

6月21日

井上、平井、村田、三菱カナダを訪ね、レンタカー会社を紹介して戴く。松本、早川の2名は、日本総領事館へ挨拶に向い、我々の計画内容を説明する。

夕刻、交通量の少ない道路で運転の練習を行なう。

6月22日

食糧及び装備買い出しを行なう。塩を頼んだらソースを出して来られ、英語に自信をなくし、モーターインに立てこもる。

本日でバンクーバーでの仕事は全て終了する。明日からBanffへ向う。

6月23日

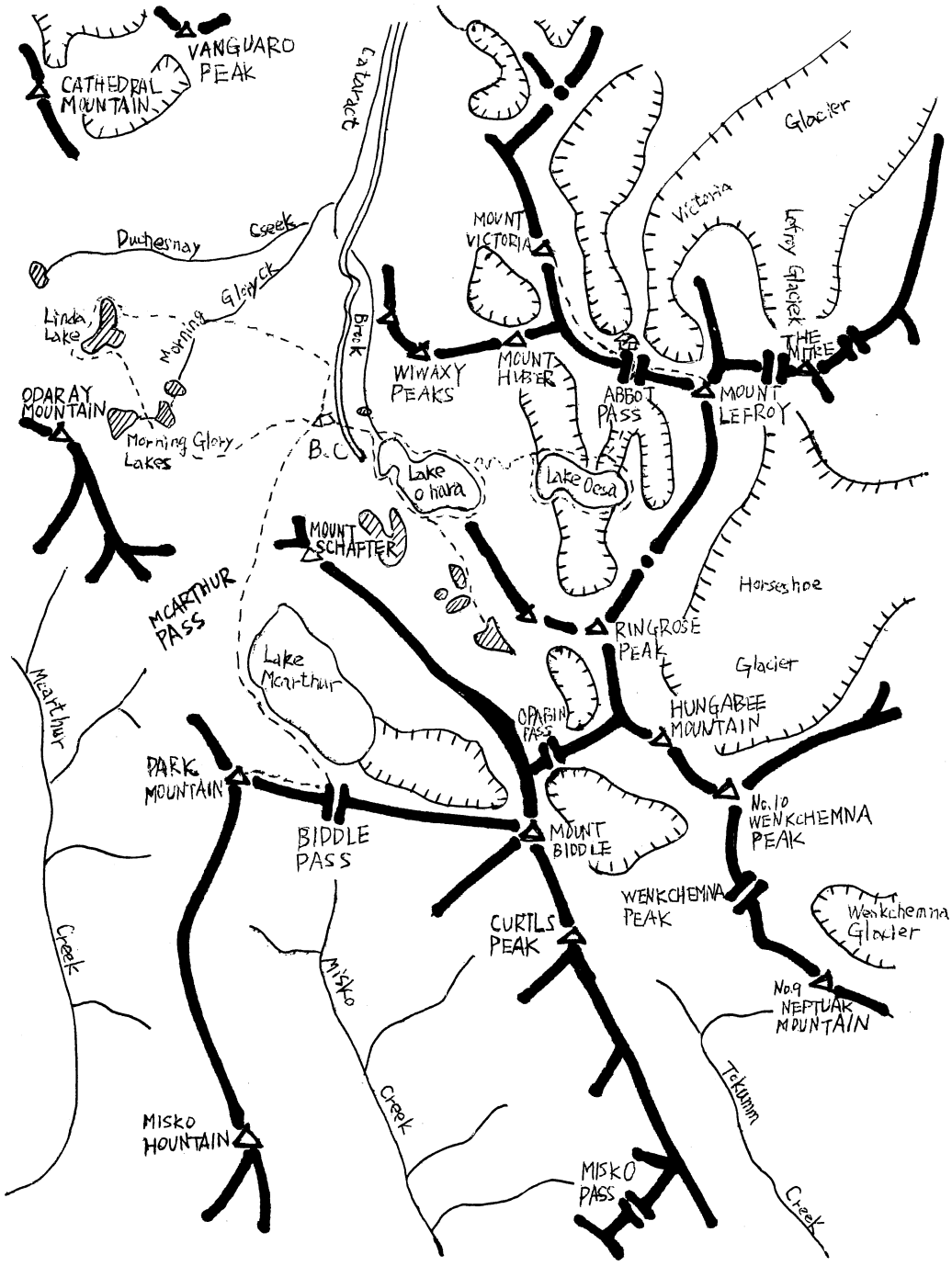
今日は週末であるので、郊外へ向う車が多くなるだろうと考え早朝のうちに市街地をぬける。車の運転については色々と注意を受けていたので、慎重にノロノロと安全運転を心がける。それでも予定より多く進み、グレーシャーパークのキャンプ場泊りとなる。

夜、キャンプ場のゴミ箱をあさりに来た熊の親子と対面する。

6月24日

ハイウェイ沿いの山々も次第に急峻な姿を持

# Lake O. hara 概念図



つものに変って来た。周囲の山々を地図と照らし合せてワイワイ言っているうちに、登山基地バンフに到着する。トンネルマウンテンキャンプ場に入る。

6月25日

カナダ山岳会のオフィスを訪ね、クラブ・マネージャーのP．ボスウェル氏に面会し、日本からのみやげを手渡す。

午後、最初の山行、レイク・オハラ周辺への入山に備え、食糧を買い出しする。

6月26日

入山。Banff　レイク・オハラ

6月27日　晴後快晴

cPark．Mt．アタック：松本、早川、村田。

6時5分B．Cを出発し残雪を踏み抜きながら30分程進むとSchaffer湖に出た。いかにも熊の棲んでいそうな所だなどと話しながら、おっかなびっくりでMacCarther湖への近道を、3人共先頭を譲りあいながら行く。湖はまだ凍りついており、対岸のMt．Biddleの岩壁とが美しく調和して、外国の山へ来たんだなあ、と実感が湧く。湖の辺の斜面をトラバースし、Biddle Passへ突きあげる顕著なルンゼをつめPassへ出る。Biddleへはここからも登れそうだが、岩が脆そうであり快適な岩稜登りは楽しめそうもない。我々はPark．Mt．への稜線を辿る。この稜線は、ちょうど西穂の稜線を思わせる。10時55分頂上着。帰りは同じルートを下る。こんどは湖の氷の上を横断して帰る。ずっと近道であった。井上、平井は、Abbct・Pass偵察にLake・Oesa迄行く。

6月28日　曇後雨後晴

日本出発以来、あわただしく動き回っている為、入山第2日目は休養日とし、体を休める。まだ天候が安定していないのか、めまぐるしく天候が変わる。

6月29日　晴後曇

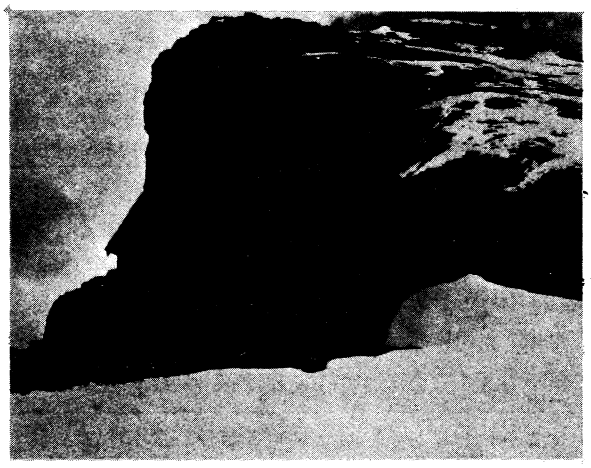
全員で、Abbct・Passへ上る。平井、早川、村田は小屋到着後その足で、Mt．Lefrcyをアタックする。B．Cを5時40分に出発し、Hut9時35分、頂上まで2時間かかった。雪の状態さえよければ下からラッシュでアタックできそうだ。しかし、我々は慎重に且つのんびりと登る事にする。

6月30日　ガス後雪

停滞。昨日より雪降り始める。行動出来ず小屋でゴロゴロしている。我々の他にガイド連れの5人パーティーと、アメリカの若者2人の2パーティーが小屋にいた。5人パーティーの人達はいずれも中年紳士といった人達ばかりで、Mt．Victcriaを登りにやって来たそうだ。

ここ、Abbct・PassHutは1922年に建てられたそうで大層りっぱな、石造りの小屋だ。炊事用具一切、食器にいたるまで何でも揃っており、ベッド、毛布も完備されている。登山者はホワイト・ガソリンさえ持って行けばO・Kといった具合だ。それにストーブにくべ

る薪も持ってあげれば暖もとれる。真白なテーブルクロスと粋な木造りの椅子。最初小屋へ入った時は、びっくりした。



（Abbot・Pass・Hut）

7月1日　雪

今日も天気悪く、Victcriaアタック出来ず、一旦B．C迄下る事にする。Mt．Victcriaは何とか登っておきたく、再度アタックを行なう事にする。

7月2日　曇

松本、井上、Mt．Victcriaアタック。Hutから登り4時間、下り3時間を要す。新雪のラッセル膝位迄あった。登頂した2名は小屋にて泊。平井、早川、村田は、B．CよりOpabin　Pass方面偵察に出る。

7月3日　晴

井上、松本アタックを終えB．Cへ下る。

Lake　Oesa～Abbct　Pass間は、長次郎雪渓のような感じの所であるが、周囲全体が大きいため、近いように見えてもなかなか着かず、判断に困る。3時間でB．Cへ帰りつく。

7月4日　晴

全員で、リンダ・レイク、モーニング・グローリー・レイク方面へPicnic。本日の行動で、レイク・オハラ周辺の計画を終える。

前後するが、7月1日に、Hutから下ってアルパインメドウ・キャンプ場に帰った時我々のテントに、ハリーというアメリカ人がやって来て、このキャンプ場が昨日より幕営禁止になった事を教えてくれた。理由は、雪も解け、これから草・花が芽をふく季節となるので、キャンパー達より、しばらくの間保護するとの事だった。それで我々も仮設のキャンプ場へ移動した訳だ。bad、newsを持って来た。ハリー君とはその後大変意気統合し、色々と語りあった。ヒッピー的な、しごく調子のいい奴で、毎日精力的に付近の山々を登り続けていた。

7月5日　晴

下山。Banffのキャンプ場へ舞い戻る。

この日、下山してパーキング迄戻ると、我々の車の三角窓が割られ、中からメンバーの小遣が盗まれていた。隊の金には全く影響なく、今後も登山活動を続け得る事は不幸中の幸いと言える。即、ワーデンと警察にとどける。

7月6日

トンネルマウンテン・キャンプ場には、シャワーの設備がないので、Banffの温水プールへ行き一週間分のアカを流す。

7月7日
7月8日 } 休養日、洗濯、散髪に精を出す。

7月9日　装備、食糧を買い出す。

7月10日

Ｂａｎｆｆの町を後に、Ｒｏｂｓｏｎ入山の為Ｊａｓｐｅｒへ向う。道路上に時々、熊、鹿などがノコノコ出てくる。休暇を利用し、キャンピングカーを引いての多くの人々が、車を止めカメラに収めている。我々も敗けじとシャッターを切る。

7月11日

Ｊａｓｐｅｒの町へ入る少し手前のキャンプ場で、最大目標のＭｔ．Ｒｏｂｓｏｎ入山を前に、食糧、装備の最終的な計画を立てる。

7月12日　食糧買い出し。

7月13日　食糧買い出し。装備荷分け。

7月14日　晴

Ｍｔ．Ｒｏｂｓｏｎ入山。Ｔｈｏｕｓａｎｄ Ｆａｌｌｓの登りにかかる手前でテントを張る。

ＷＨＩＴＥ・ＨＯＲＮＥ

7月15日　曇

Ｂ．Ｃまで荷上げ。Ｒｏｂｓｏｎ氷河末端にデポする。

7月16日　快晴後曇一時雨

Ｂ．Ｃ設営、全員Ｂ．Ｃ in。

7月17日　曇後晴

Ｒｏｂｓｏｎ氷河上、約8,000ｆｅｅｔ地点に中継キャンプを作り、食糧一週間分、登攀具等荷上げする。

7月18日　晴

明日からの登山活動に備え休養日とする。

7月19日　快晴

先日のデポ地にＣＩ設営し全員入る。午後Ｄｏｍｅ迄のクレバス帯のルート偵察を行なう。

（17：00　高度2,400ｍ）

| テント内 | テント外 | 雪　温 |
|---|---|---|
| 5℃ | 0℃ | －1℃ |

7月20日　晴後吹雪

Ｄｏｍｅ上へ、アタック・キャンプを設営する。（約10,000ｆｅｅｔ）午後から天候崩れ風雪となる。

（14：00　高度3,000ｍ）

| テント内 | テント外 | 雪　温 |
|---|---|---|
| 7℃ | 0.5℃ | －1.5℃ |

7月21日　風雪

風強く、一日中テントから出る事も出来ない。

（5：00　高度3,000ｍ）

| テント内 | テント外 | 雪　温 |
|---|---|---|
| 5℃ | 0℃ | －1℃ |

7月22日　風雪

停　滞。

（5：00　高度3.000m）

| テント内 | テント外 | 雪　温 |
|---|---|---|
| 5℃ | −2℃ | −1.5℃ |

7月23日　風雪

すでに頂上は目前だというのに、悪天候続き行動出来ない。全員イラ立つ。

（5：00　高度3,000m）

| テント内 | テント外 | 雪　温 |
|---|---|---|
| 4℃ | −3℃ | −1.5℃ |

7月24日　ガス後晴

一旦A．C撤収し、Rcbscn氷河上8,800feetまで下る。平井、松本食糧を補給の為B．Cまで下る。

7月25日　曇

平井、松本の2名はB．Cより食糧を荷上げ。A．Cの3名は本日も天候悪くアタック出来ず。

7月26日　曇

井上、平井、松本、村田、Mt、Resplendentアタック。ロブソン方面は相変らずガスがかかる。少し好天の兆があったので、時間的に短かいアタックで済む。Resplendentを先にアタックする。

7月27日　雨後晴

朝方雨が降っていたが、10時頃にあがったので、平井、松本、早川の3名で、Reaguard．Mt．アタック。今日もロブソンはガス。食糧残り少なく、明日が最終アタックチャンスとなる。

7月28日　快々晴

井上、村田、早川Mt．Rcbscnアタック。平井、松本はB．Cで待機。15時20分登頂成功！オーロラの揺れる星空の中、翌29日午前1時45分帰幕する。よくぞねばったものだ。

7月29日　晴

撤収、下山。

7月30日　晴

下山。　Rcbscn計画終了する。

c詳しい記録は後記。

7月31日

VeleMcunt．ヘルクローさん宅の前にテントを張らせて戴く。ヘルクローさんは身よりのない子供達を引きとって面倒を見ておられ、15人ばかりの子供達がここで生活していた。テントに遊びに来た子供達に、箸の使い方を教えてやったり、みそ汁を食べさせてやったりした。皆驚ろく程元気で、自然の中でのびのびと育っているといった感じだった。

8月1日

VeleMcunt　Edomcntcn

移民しておられる、京都出身の西脇氏宅を訪問。大変御世話になる。アルバータ大学を見学。

8月2日

エルク・アイランド国立公園見学。

8月3日

Edomcntcn　Banff（トンネルマウンテンキャンプ場）

久しぶりにBanffの町へ帰って来る。カ

ナダ山岳会のオフィスにＲｃｂｓｃｎ登頂を伝える。

８月４日　Ｂａｎｆｆのキャンプ場で休養。

〜　Ｒｃｂｓｃｎでの疲れをとる。

９日　Ｂａｎｆｆの町は、夏期休暇シーズン真最中とあって、大変騒々しい。ガイド・クラブの前には山行の参加者を募うポスターがべたべたはってある。

毎日、山岳会のオフィスへ行き、日本からの連絡を受け取るのが日課となる。Ｏ．Ｂ４名の到着、予定より２日遅れるとの連絡あり。

８月１０日〜８月１１日　食糧買い出し及び装備点検。（トンネルマウンテン）

８月１２日　Ｂａｎｆｆ　Ｃａｎｍｏｒｅ

井上、平井、キャルガリー迄Ｏ．Ｂを出迎えに向う。他は食糧買い出し。

８月１３日

ヘリコプターで入山する事となり、交渉。明日午後迎えに来るとの事。

８月１４日

Ｃａｎｍｏｒｅ　Ｍｔ．Ａｓｓｉｎｉｂｏｉｎｅ肩の小屋。

８月１５日　曇

ｃノース・リッジ。雨宮、森本、村上、村田、井上。ｃ南西面：浪川、平井、松本、早川２パーティーに分れ、頂上で合流。ワイワイ言いながら、ノースリッジを懸垂２回を交えて下る。太陽、なかなか沈まないので気長にのんびり行動出来る。両ルートとも、岩がもろく、大いに神経を使う。

８月１６日　晴

村上、松本、早川の３名、Ｍａｇｃｇ湖までテントを持って下る。他の６名は小屋にて停滞。肩の小屋：ＨｉｇｈＣａｂｉｎは設備も素晴しく、利用者のマナーもよい。最初、本等で調べたところでは、使用料が必要とあったが、カナダ山岳会のオフィスで尋ねたら、自由に使って下さいとの事。

８月１７日　晴・風強し

朝食の準備をしていると突然ヘリが向えにやって来た。出来あがった御飯を鍋に入れたまま、ヘリにほうり込む。アッと言う間に全員下山。Ｊａｓｐｅｒへ向う、Ｏ．Ｂ４名と分れ、長かった合宿、最後の夜を、思い出多いトンネルマウンテンで過す。

８月１８日

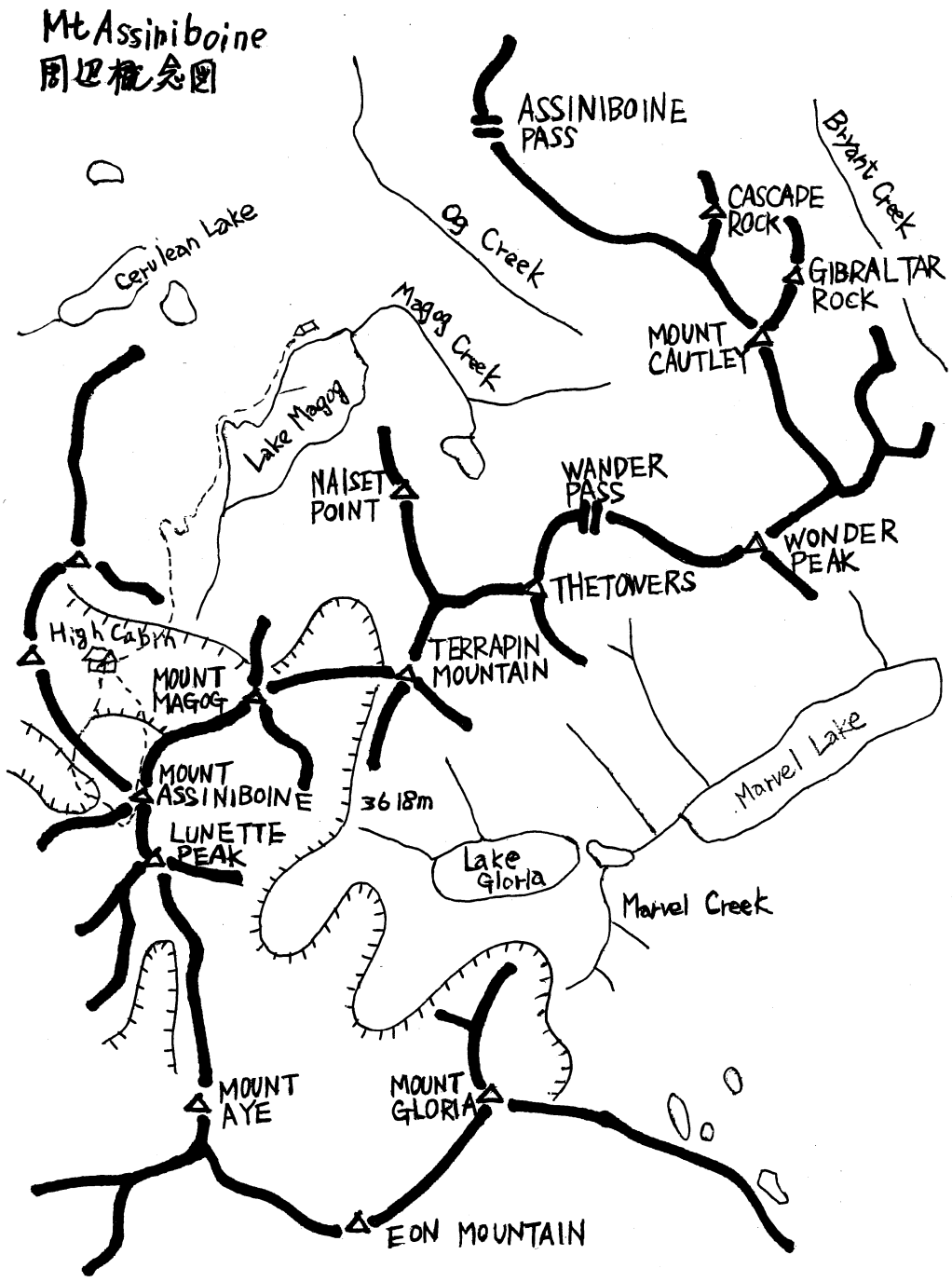
解散。井上、平井、松本の３名で、今まで長い間使用してきたレンタカーを、バンクーバー迄返しに行く。村田は東海岸へ、早川は合衆国からメキシコへと解散後の旅行を楽しむ。

８月１９日

バンクーバー着。レンタカー返却。日本総領事館へ挨拶を済ませ、登山装備、船便で発送、以上ですべての仕事は終了。

平井はアラスカから北極圏を目指し、井上、松本はテントを持ってアラスカ・ハイウエーヒッチ・ハイクに挑戦した。山行終了後の各自の小旅行も有意義なものであったと思います。

９月１１日　バンクーバーより松本帰国して、全員帰国となる。


Mt Assiniboine
周辺概念図
ASSINIBOINE PASS
Bryant Creek
CASCADE ROCK
GIBRALTAR ROCK
Og Creek
Cerulean Lake
Magog Creek
MOUNT CAUTLEY
Lake Magog
NAISET POINT
WANDER PASS
WONDER PEAK
THETOWERS
High Cabin
TERRAPIN MOUNTAIN
MOUNT MAGOG
Marvel Lake
MOUNT ASSINIBOINE
3618m
LUNETTE PEAK
Lake Gloria
Marvel Creek
MOUNT AYE
MOUNT GLORIA
EON MOUNTAIN

# Mt. Robson

## カナダ・ロッキー山脈の最高峰

カナダの西部地方に位置するカナダ・ロッキー山脈は、南北に走り、標高3,000mを越すもの約700座を数え、19世紀末期より英米の登山家によって初期の探険が行なわれ、1,925年頃から多くの頂が登頂されている。

カナダ・ロッキー山脈の最高峰（3,953m）Mt. Robsonは、ジャスパーの北西、ロブソンランチよりハイウエーから北東に聳える独立峰である。そしてYuh-hai-has-kunというインディアン語の異名を持っている。

我々の登頂は、Mt. Robson北東面Robson氷河より、最大のキー・ポイントであるkainフェイスからの登頂、及び下降の記録である。

この北東面、kainフェイスについての日本隊の記録は手にしておらず、恐らく日本人初登攀であると思われます。

メンバーは、井上、松本、平井、村田、早川の5名である。

## —1973年夏の記録—

早川栄二

### Berg Lakeより Robson氷河へ

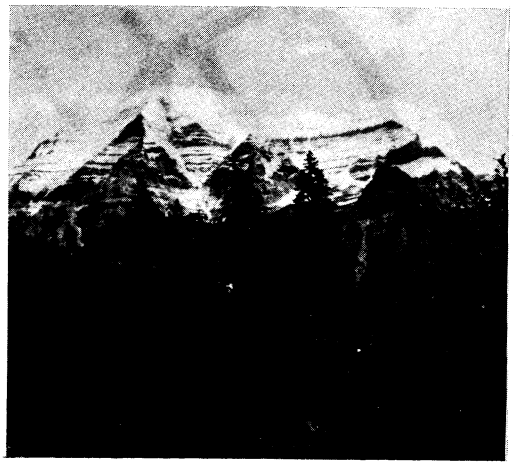
7月14日　晴れ

ジャスパーのキャンプ地から、装備・食糧を乗せた我々のレンタカーは、一路Robson峰の見えるロブソンランチへと向う。

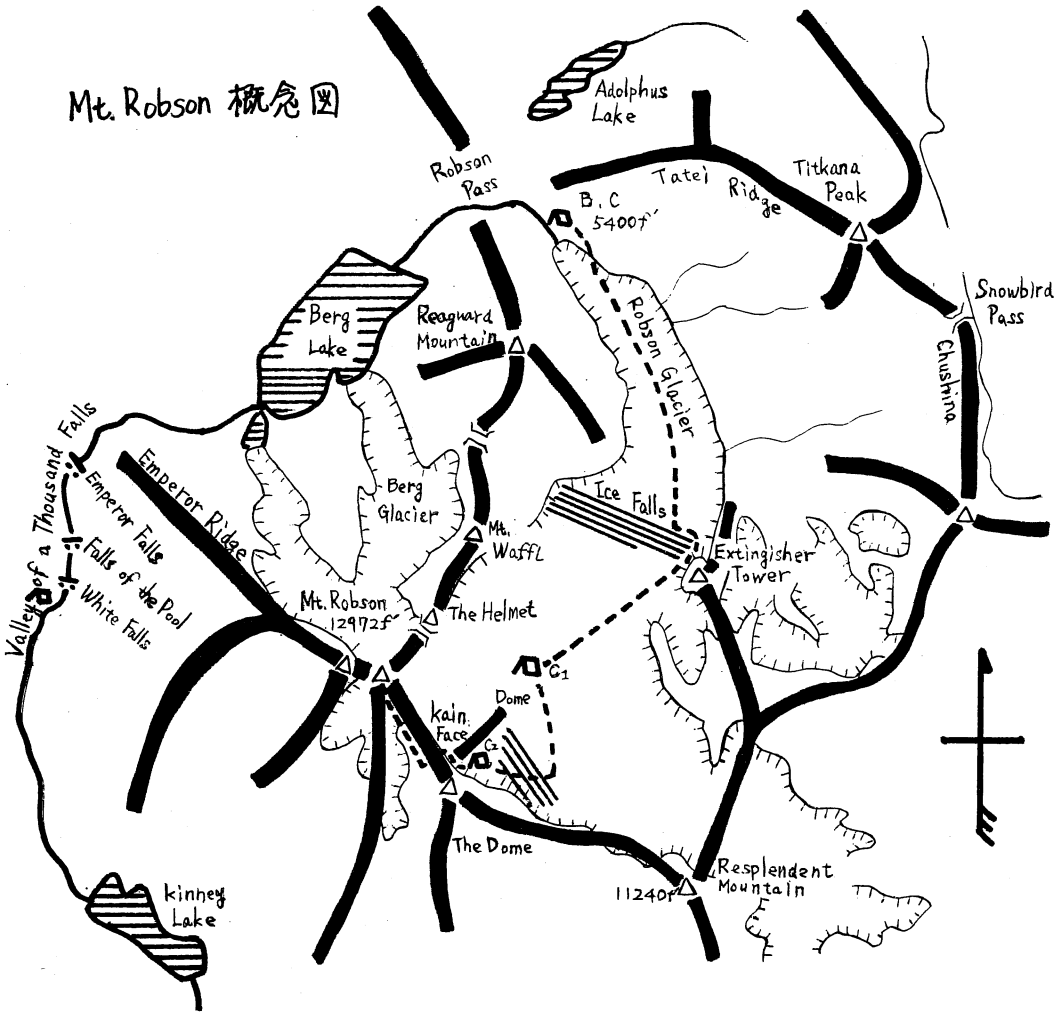
ロブソンランチでは、以前我々が写真等で見ていたRobson峰が、目前の現実となり、その岩峰は、我々の登攀意欲を駆り立てるものであった。頂上付近には、いやな雲がべったりとかかっていた。

入山手続きを済ませ、いよいよ40Kgの歩荷が始まる。

Kinney Lakeまで、1時間半。



（Mt. Robson 南面）


Mt. Robson 概念図
Adolphus Lake
Robson Pass
Tatei Ridge
Titkana Peak
B.C 5400f
Snowbird Pass
Chushina
Berg Lake
Reaguard Mountain
Robson Glacier
Valley of a Thousand Falls
Emperor Falls
Emperor Ridge
Falls of the Pool
White Falls
Berg Glacier
Ice Falls
Mt. Waffl
Extinguisher Tower
Mt. Robson 12972f
The Helmet
C1
Dome
kain Face
C2
The Dome
Resplendent Mountain
11240f
kinney Lake

このKinney Lakeは Rcbscn初登を狙ったKinneyの名に因んで名付けられている。KinneyのRcbscn開拓の努力についての話はまた興味をそそるものである。

広大な濃緑色の針葉樹、万年雪をつけた岩肌、空の紺、湖水の緑青これら全てが、一度に視界を埋めるのであった。

（Robson 氷 河）

入山初日は、Valley cf a Thousand Fallsの中のWhite Fallsに近い、針葉樹林に囲まれた渓谷の片隅に天幕を張り、楽しい一時を過ごした。

7月15日 曇り

B．Cまで二重歩荷することになり、この日は、B．C付近まで荷上げして戻る。

White Fallsを越え、Emperor FallsからRcbscn Emperor Ridgeが、真正面に眺められる。我々は、丁度、Mt．Rcbscnの真横に来たのである。

Emperor Fallsを越えると、急に緩傾斜になり、広大な谷間の平地に出る。

あまり広くて、いくら歩いても進んでいる気がしない。向こうから馬に乗った連中が、行列をなして来るではないか。実に気分よさそうに。我々は、「肩に食い込むキスリング」か。

Rcbscnの を南西側から北東側へぐるっと巻いて、Rcbscn氷河の見えるAlpine MeadowにDep．してキャンプへ戻った。

この日、初めて北東面のRcbscnを見たのだが、南西面よりもずっと傾斜がきつく、岩と雪のMixした氷壁は、断然、人を寄せつけない様相を呈していた。

7月16日 快晴後曇り・にわか雨

残りの荷上げを済まし、昨日Dep．した場所よりもRcbscn氷河に近い所に、B．Cを設営した。そこは、堆石がゴロゴロしていて殺風景で、また氷河の解け出ている水流は、泥のように濁り飲めるようなものではなかったが、その流れより少し離れた所に、大きな水たまりがあった。その水たまりは、静まりかえっていて、氷河から吹く微風に、心良くなびくだけであった。そしてその水と言えば、全く透明で新鮮そのものという感じであった。我々は、その全てを写す鏡の前に天幕を張ったのである。

7月17日 曇り時々晴れ

予てからの念願であった氷河上を初めて踏む。

霜柱の上を歩いているようで、アイゼンを着けなくても快適に歩ける。

氷河上には、幾つもの水流があり、休憩時にそれを汲み、そして飲む美味さもまた格別であった。

氷河の途中で会った四名のパーティーに、上の状態等を聞いたのだが、ドームまでの所の状態が非常に悪く、Ｓｎｏｗ　Ａｖａｌａｎｃｈｅが頻繁に起っていたので、彼等は断念したと言う。

松本、村田の両名が、ルート旗を立てながら、歩荷している後の３名より先行し、我々は、クレバス帯を越えて上部の大雪原に出る。

そこからは、全面氷雪でおおわれたＫａｉｎフェイスがはっきり見え、今にも落ちそうな大きな雪の塊が、雪面より張り出していた。

この辺りの大雪原は、氷河上に新雪をのせ足首から膝辺りまで潜る程度の雪上で、氷河といっても日本の雪山を歩いているのと変りはなかった。

途中で会ったパーティーの話に聞いていたようにドームからは、始終雪崩が起っていたが、安全な場所に荷物をＤｅｐ．してＢ．Ｃに戻った。

７月１８日　晴れ

Ｂ．Ｃの設営を終え、Ａ．Ｃまでの荷上げも終了したので、この日は休養となり一日中ベース・キャンプで気ままな生活を送った。

## 第１キャンプよりドームの頭

７月１９日　快晴

いよいよ第１キャンプ設営に向けて出発。今日から雪上生活が始まるわけである。

午前中にＤｅｐ．地に到着したので、第２キャンプまでのルート偵察に行くことになった。ドームの頭までのルートは、雪崩が頻繁に起こり、その斜面をいかに越えるか問題となる。双眼鏡で偵察していると、他のパーティーのトレースを発見したが、それも我々の目の前で、たった今起った雪崩が消し去ってしまった。

７月２０日　晴れ後曇り

第１キャンプからのアタックを考えてみたが、２０時間以上のロングランになることは確実と思われたので、ドームの頭まで第２キャンプを上げることになった。

早朝第１キャンプを出発し、昨日偵察に行った所まで行く。そのすぐ前には、大きなクレバスがポッカリ口を開けていたが、辛うじてスノーブリッジがかかっていた。そこは、ザイルを出して慎重に渡った。

行動を敏速にするため、荷を半分にして、ドームの頭までの斜面を通過し、その上に、第２キャンプを建設し、Ｄｅｐ．回収もまたスムーズに終える。

ドームの頭には１パーティーの天幕が張ってあったが、これは我々がここを登る途中で見たＫａｉｎフェイスを登っていた３人パーティーのもので、彼等が帰幕したのは、０時３０分頃であった。

7月21日　雪・ガス

停滞。10時頃少こし良くなり、彼等は下山して行った。Kainフェイスの状態を彼等に聞くと氷と雪の連続で、アブミを使用した所もあったらしい。

それから3日間停滞が続きドームの頭までのルートの雪の状態が一層悪くなった。

下降路の確保という面から、天候が回復した24日に、アタック日を後1日残し下山。

そして、第1キャンプよりも前進した所、下降路の心配のいらない所まで一旦退去してアタックチャンスを待つことになった。

そのまま、松本、平井両名は、B.Cの3日分の食糧を取りに帰るべく、アタックメンバーを励まし下山していった。

## Mt. Robsonの登頂

7月25日　曇り・ガス

一向に天気回復せず停滞。アタック用食糧は7日分。今日の朝食で、食糧切れとなる。我々3名は、早朝起床しアタック準備を整え天気待ちをしていたが、全く回復せずアタッを諦める。そのためアタック用レーション以外には、昼食に食べるものはなく、B.Cへ帰った二人が、食糧を持って上って来るまでおあずけをくった。午後にやっと二人が戻って来たが、それまで何度天幕の外に顔を出し、彼等の来るのを、否食糧が来るのを待ち焦がれていたことか。

そして、3日分の食糧を4日で食べることになり28日までアタック日を取ることができるようになった。

7月26日　曇り・ガス

ドームの頭の第2キャンプと、退却したここのキャンプでは、天気が大分違っていた。丁度ドームの頭から上部は、ガスがかかっておりRobsonもKainフェイスも全く見えない。

Mt. Robsonへアタックせず、Mt. Resplendentへ、井上、平井、松本、村田の4名が行くことになった。

稜線はものすごい強風であったらしい。

7月27日　曇り時々晴れ

今日もまた上部の天気が悪く、松本、平井、早川の3名は、Reaguard Mountainに行くことになった。

ついに、アタック日1日のみを残すことになってしまったが、明日の晴天は期待できた。Reaguard Mountainから南西側は、大陸をおおう程の雲はなく、Mt. Robsonピーク南西及び北西側は、日ざしを浴びた氷壁が、続いた悪天にもあっけらかんと顔をのぞかせているのであった。

この二つの山々は、Mt. Robsonよりも標高は格段に低く、easyに属する山である。この二日間の行動は、Mt. Robson登頂断念の言い訳がましい最後のあがきに近いものであるようにも思われた。

しかし、この行動は、停滞が続き鈍った体を馴らすという意味において、結果的にはRobson登頂に忘れられない行動であっただろう。

７月２８日・２９日　快晴・晴れ後雨

２時３０分起床。満天の星！

待ちに待った晴天。いよいよアタックである。

井上、村田、早川の３名は、松本、平井両名に激励され、３時４０分Ａ．Ｃを出発。

ドームの下の雪崩の斜面も慎重に越えて、ドームの頭の第２キャンプを設営した所に着いた頃に、空は白みがかり、Ｋａｉｎフェイスに取付いた時には、丁度明るくなっていた。

このキー・ポイントであるＫａｉｎフェイスは、最大傾斜５５°位で、３００ｍ程の雪壁である。我々は、８０ｍザイルを使用したのであるが、その２ピッチ目の終り頃から、氷が現われ、ステップカッティングと、出歯アイガンのキックステップの連続であった。

ビレイには、Ｖ字アイスハーケンがよく効き、グリップビレイが有効であった。

３．４ピッチ目は、最も傾斜がきつく、出歯のツアッケ２本で立っている状態であった。

この壁を登るのに４時間費やした。そして、この稜線上の下降点に、スノーバーを６本埋め込んでおいた。

そこからは、コンティニュアネで登り、最後の斜面でまたザイルを伸ばして、ついに、Ｍｔ．Ｒｏｂｓｏｎ東峰に立った。もう１５時を過ぎていた。主峰まではもうすぐそこであったが、Ｋａｉｎフェイス下降中に暗くなってしまうと思われ、この東峰で、写真を撮り、即、下山した。

Ｋａｉｎフェイスを下降したのは、１９時０５分であった。

埋め込んでおいたスノーバーを下降ビンにし、６㎜の補助ロープを１００ｍ伸ばして、それにセットし、メインザイル８０ｍ一杯、クライミングダウンした。

２ピッチ目からは、Ｖ字と平型アイスハーケンを１本ずつ並べて打ち、ザイルをダブルにして、それにブルージックを作りクライミングダウンで下降することを繰り返し、計８本のアイスハーケンを使用した。

下降が終った時には、もう真暗になり、時計は、もう２３時をとっくに回っていた。

そして、ドーム下の雪崩の斜面を、もう我武者羅に駆け降り、その下で休憩した時には、もう不安もなく、「あと１ピッチで帰れるなあ。」と思いつつ夜空を見上げれば、満天の星。また流星を２度見ることができた。

夜空のサーチライトは、我々を称え、輝き、そのカーテンの如き光は、ただ、ただ縦縞に揺らめくのであった。

「オーロラよ！もう一度君の姿を見せてくれ。」

２９日の１時４０分Ａ．Ｃに帰幕した。思うに長い長いアタックであった。

待っていた二人は、我々に温い紅茶を飲ませてくれた。そして、天幕の中に入ると、何か妙なものを作っていてくれたが、私は（私だけじゃないと思うが）もうボーとしてしまって、ものすごい睡魔におそわれ、それを食べるとすぐ眠ってしまった。

同日、１０時半頃起床し、Ｒｏｂｓｏｎ氷河

を後に下山した。この日に会った鵬翔山岳会のエッセン係の人、どうもありがとう。

ソーセージ本当においしかったです。

7月30日　晴れ後曇り

Valley of a Thousand Fallsでの夜は楽しかった。

さよなら氷河よ！　さよなら……。

◇ 本文中、KainフェースとはRobson東フェースの事であり、地元の登山者にならって我々もそう呼んだ。Kinneyフェースとは別である。

## ＜食糧係報告＞

松本好博

2年生の時、食糧係を担当していた関係で、今回も食糧係を仰せつかった。私は食べるのは好きだが、作る事となるとあまり好きではない。2年当時、食糧係になりたての頃には手間をはぶき、簡単な材料で、うまく栄養のある食事が出来ないかと考えもした。

しかし、これらの条件を全て満たす食い物を作る事は不可能であるとはやばやと断を下した。元来「食う」という事は、人間の本能的なもので、その美味さとかなんとか言うものは二の次であった。ところがその二次的なものが、現在ではかなり巾をきかすようになって来た。このことは、食べる側に回った場合は全く問題なしとし、作る側に回った場合、調理時間の短縮を食糧係のモットーにしようと決めた。今もこの考えは変っていない。今度の海外登山に於て、メンバーの誰一人として栄養失調にも、食欲不振にもならなかったのは、この頼りない食糧係を助けてくれた。隊長をも含めた、他の4名の御陰げだったと感謝しています。今回の食糧計画は、入山時1日1人あたり3ドル、その他の移動日、休養日の時は1日1人4ドルとし、また当番制で2名づつが献立て、買い出し、調理、後かたづけまで、全て行なう事としました。この事は食事もバラエティーに富んだし、今回最下級生となり食当を担当していた3年生にとっては真の休養日となったようで、このことも3ケ月におよぶ長い合宿をうまくやり終えた原因の一つだと喜んでいます。また多くの海外登山隊が頭を悩ます食糧輸送費の問題ですが、今回の場合、目的とした山域がカナダであった事もあり、現地でほぼ何でも手に入り、日本から持参する食糧はアタック・キャンプ等、調理時間を急ぎ、軽量化を考慮せねばならない山行事に使用するアルファ米、そして「日本食を食べたいとの欲望がある」と過去の登山隊の食糧報告を参考に、日本的な味付けの出来る調味料、インスタント味噌汁、その他副食品のみとしました。不思議に思った事ですが、日本から持参のカレーライスを作った時、全員の食欲が普段よ

り著しく増した事、又純日本食を食卓に出した場合、それを食べる事によって連帯感が強まるのを感じた事を記しておきます。バンクーバーの日本人町で米、醤油等を購入した訳ですが、想像以上に何でも揃っていたのは驚きのみでした。これも冷静に考えてみれば当然の事なのですが、一島国に住み続けていた者の持つ多くのバカらしい考えの一つの現れの"驚き"だと思います。入山中の食糧は日本での合宿事と同じようなものでした。Mt.Robson周辺で登山活動を行なっていた時は悪天候の連続で、一時は食い延ばしまで行ないましたがこの方面での忍耐力も日本の冬山、春山での経験が役立ちました。

以上のような食糧係の苦労は言葉が少々通じにくい点をのぞけば、日本の山と何ら異なる点はなかったように思います。言い訳がましいですが、全くはじめての事ばかりで、どうも山に登るのに精一杯で、何事も、じっくり見てこなかったのが悔やまれます。

今度、海外に行く時は、色々調べて行きたく思っています。

## ＜装備係報告＞

平井幹男

今合宿の装備は日本で使用している装備から、春山から五月の山行に必要と思われる装備を使用した。登攀用具に関しては、カナダロッキーの地質を考えてみて、ほとんどロックハーケンの使用は無いと考えていたが、実際にもロックハーケンは1本も使用する事はなかった。岩登りに主目的をおく山行でも無いかぎりカナダではほとんどのルートが雪か氷のためアイスハーケンが有効と思われる。又ロックハーケンも大きい横型が良いと思う。カナダのキャンプ（ふもと）では蚊の予防が必要であるので、その事なども考え、冬用のテントを使用した。これは小動物（リスなど）からエッセンを守るにも良く、雨の心配はフライシートをすっぽりかぶせれば防ぐ事が出来ると思う。その他の装備については特に工夫する事もなく、日本で使用している物で充分に役だつと思います。

# 装　備　表

| 品　名 | 数 | Kg | 備　考 |
|---|---|---|---|
| 天　幕（B.C）<br>（ポール2.1,本体4.5） | 1 | 6.6 | 主にキャンプ場及びB.Cで使用 |
| フライシート | 1 | 1.0 | 冬天用に友光で別注　大変有効 |
| 天　幕（A.C） | 2 | 5.0 | ツリ天、高所でのA.Cとして使用<br>軽量で今回のような山行にはうってつけ |
| ツェルト | 1 | 0.7 | |
| ペグ | 50 | 1.0 | プラスチックペグ使用 |
| スコップ | 2 | 0.5 | スノー（取付式） |
| ザイル（9㎜） | 1 | 4.5 | 80m |
| 〃（11㎜） | 1 | 3.0 | |
| フィックス | | | 100mはロブソン、ケインフェイスで使用 |
| 捨てなわ | 1 | 0.5 | |
| ハンマー | 3 | 1.0 | |
| ロックハーケン | 15 | 3.3 | 今回の山行では使用せず |
| アイスハーケン | 10 | | 平型5，V型5，ケインフェイスで使用 |
| スノーバー | 6 | 1.0 | 2本をケインフェイスの下降ポイントに使用 |
| カラビナ | 30 | 2.3 | |
| アブミ | 6 | 1.5 | |
| シャンピング<br>ボルト | | | 使用せず |
| コッフェル | 1 | 1.5 | |
| オタマ．包丁<br>茶こし．飯ベラ<br>切り | | 0.5 | |
| フライパン | | | 現地購入 |
| 鍋 | | | 現地購入 |
| やかん | | | 現地購入 |
| 食器 | | | 現地購入 |
| テルモス | 2 | 1.0 | |
| ガソリンコンロ | 2 | 3.0 | 1台使用不可能となり、新しく1台買い入れる |
| メタ | 10 | 2.0 | |

| 品名 | 数 | Kg | 備考 |
|---|---|---|---|
| 布バケツ | 2 | 0.5 | キャンピングの際非常に便利 |
| ポリタン | 5 | 0.5 | 現地にて調達 |
| 双眼鏡 | 1 | 0.5 | |
| 寒暖計 | 1 | 0.1 | |
| 計量器 | 1 | 0.5 | |
| カサ | 3 | 1.0 | |
| バスタオル | 2 | 0.1 | |
| 靴クリーム | 3 | 0.15 | |
| アマニ油 | 1 | 0.2 | |
| スピロ | 3 | 0.1 | 使用せず |
| 殺虫剤 | 2 | 0.5 | 日本から持参のものは使用せず、現地で新に調達 |
| 赤旗 | 50 | 0.2 | |
| 竹ザオ | | | 現地調達 |
| 修理具 | | | |
| ドライバーセット | | 1.5 | |
| ラジオペンチ | | | |
| コンロ部品 | | | |
| ビニールテープ | | | |
| テント修理具 | | | |
| ワセリン | | | |
| エアーマット修理具 | | | |
| 小物類 | | | |
| ニベア | | 19.0 | |
| 手鏡 | | | |
| トランプ | | | |
| 洗たくばさみ | | | |
| ツメ切り | | | |
| 毛抜き | | | |
| 針・糸 | | | |
| サボ・ガムテープ | | | |
| 洗面具 | | | |
| カメラ | 3 | 3.5 | |
| フイルム | | | |
| カラー | 20 | | |
| リバーサル | 5 | | |
| 白黒 | 300 | | |

# 医　薬　報　告

平井幹夫

## 医　薬　品　リ　ス　ト

| 外用 | | 薬品 | |
|---|---|---|---|
| 消毒用アルコール | 500cc | マーキュロ（赤チン） | 100cc |
| アクリノール液 | 200cc | オキシフル | 100cc |
| チンク油 | 500g | メンソレータム | 10ケ |
| ペニシリン軟膏 | 500g | ホウ酸 | 200g |
| ガーゼ | 3反 | 綿花 | 2袋 |
| 包帯 | ⑧－10本　⑥－5本　③－3本 | | |
| その他 | | 内服薬 | |
| ピンセット | 2 | 解熱剤 | 10日分 |
| ハサミ | 2 | 消化剤 | 20日分 |
| 包帯止 | 50ケ | 下痢止 | 10日分 |
| 綿球 | 100ケ | マイシン | 10日分 |
| 副木 | 3本 | 酔止 | 適量 |

海外で登山を行う時、第1に考える事は、もしもの時という事故の事と病気についてである。

ヒマラヤやアフリカその他極地で登山活動を行うとすれば、ドクターの同行と大量の薬品の携行を必要とする。しかしカナダやヨーロッパなどでは整った医療設備があり、それをうまく利用する事である。

しかし海外ではそれにともなって多くのお金がいる、その点を私達は保険を利用する事によって解決する事にした。

したがって我々は、医者や病院までの応急手当てに必要な薬品のみを携行した。

それに重量の点を考えて内服薬は熱や痛みというふうにその症状をうまくとりまとめて薬品の量を調節した結果は食物からくる食べすぎの胃痛と虫さされ位でほかに何の病気もなかった事で、私の仕事は無かったので、困った事はおきなかった。今後、カナダなどの医療設備の良い国での登山では、あとちょっとした傷口などにバンドエイドのようなものを多量に携行する事をおすすめします。

それに氷河の水などを使用するので、胃などの機能低下からくる口びるのあれをふせぐリップクリームなどが便利であった。

# 会　計　報　告

村田信一

日本円の部

（単位　円）

| 収入 | | 支出 | |
|---|---|---|---|
| 隊員負担 | 1,645,492 | 交通費 | 1,195,700 |
| 父母の援助金 | 200,000 | 輸送費 | 1,930 |
| 体育会本部援助金 | 100,000 | 装備費 | 60,400 |
| 甲南山岳会有志寄附金 | 100,000 | 食料費 | 5,840 |
| 甲南大学山岳部合宿費 | 60,000 | 医療費 | 15,957 |
| その他 | 11,965 | 通信・記録費 | 24,500 |
| | | 資料費 | 69,935 |
| | | 傷害保険費 | 95,700 |
| | | 雑費 | 17,078 |
| | | 外貨交換 | 630,417 |
| 合計 | 2,117,457 | 合計 | 2,117,457 |

外貨の部

（単位　ドル）

| 収入 | | 支出 | |
|---|---|---|---|
| 円交換 | 2,352.30 | 交通費 | 1,040.18 |
| | | 輸送費 | 81.00 |
| | | 装備費 | 84.01 |
| | | 食料費 | 758.06 |
| | | 通信・記録費 | 40.49 |
| | | 宿泊日 | 223.70 |
| | | 予備費 | 124.56 |
| 合計 | 2,352.30 | 合計 | 2,352.30 |

| 援助をいただいた方々 |
| --- |
| （アイウエオ順） |

尾西食品（株）　シャレー（株）

カナダ太平洋航空　トモミツ縫工（株）

カナダ政府観光局　南条医院

甲南大学体育会　日本ダンロップ（株）

甲南大学父母の会　ロッジ（株）

又、カナディアン・ロッキースに関して多くの資料を提供して頂きました。東海大Ｏ．Ｂ斉藤純一氏、中央大学山岳部・黒川恵氏に心から御礼申しあげます。

物心両面にわたり、励まし、協力頂いたＯ．Ｂ諸兄に改めて御礼申しあげます。

## ＜Ｏ．Ｂとの反省会＞

参加者

柏（兄）、雨宮、牧野、森本、村上、井上、柏浪川、赤田、山本、井上、平井、松本、朝倉、早川、村田

現役での反省会が終了した後、山岳会との反省という意味で１１月９日、京阪神の山岳会員と現役との会合が行なわれた。

△　議事内容

Ⅰ　報　告

○ 計画のあらまし（準備～出発まで）

○ 行動報告

○ 会計報告

○ 装備、食糧、医薬、気象報告

Ⅱ　反　省

出発前○山岳会に計画提出が遅く、提出されてからも検討するまでにかなりの期間があった。

○連絡網の不撤底、と、自主的連絡網の必要性。

○山岳会で事務局を設置し、同意書の確認、手続、計画等を管理すべきであった。

帰国後○同意書未提出に対して参加者の謝罪文或いは弁明書を山岳会に提出する事。

今後の問題点

○同意書の問題点

＝○＝○＝○＝○＝○＝○＝○＝○＝

尚、今回の資料保管については、地図及び参考文献は、山岳部部室内に、スライド、写真（カラー、白黒）は井上知三（４８年卒）が保管致します。

# 山岳寮

# 目　　次

## 山　岳　寮


ダイダラボッチの住む山々 ---------- 森　和則 ---------- 97

氷河と緑の山々へ　ーカナダロッキー山行ー ---------- 村田信一 ---------- 99

明神岳主峰東稜 ---------- 朝倉　満 ---------- 102

思い出の上高地 ---------- 中辻由美子 ---------- 104

北八甲田スキーツアー ---------- 西村　清 ---------- 106

いろんな山とあれこれと ---------- 平井幹男 ---------- 109

こんな私が ---------- 西川けい子 ---------- 111

お山の大将俺ひとり ---------- 松本好博 ---------- 113

雑記帳 ---------- 116

# ダイダラボッチの住む山々

S48年度卒
森　和則

大学入学以来の山岳部活動を通じて、四季の山に登ることは当然のごとく続いた。それとともに山への親しみは大いに変化してきた。色々な障害があると思いつつ入部した山岳部ではあったが、今は唯、山に接する喜びを与えてくれた山岳部に感謝している。又、それは一年毎に山の見方が広くなり、親しみが深まる喜びでもある。

さて、そんな中で色々な山が私の目前に現われてきたが、私とダイダラボッチの出逢いは山とは関係なく始まった。2回生の頃、唯ガムシャラに山に登ることを考えていた。そんな時、柳田国男の本でダイダラボッチと出逢った。しかし、それはどこか記憶の底に忘れられたものとなっていた。

2度目に逢ったのは、4回生の時である。山里に住む人々の心知らずして、山に行くだけの私自身への反省のころであった。唯、都市から山の真中までの文明（？）の力で入り、そして、得意満面として下山し、都市に直行する山行。山に生きる人々、山を愛し生活する里の人々を無視した山行。それが山屋とか山男とかいうセンスと自分に恥を感じたからである。本当の山の生活とは関係ない、妙によそよそしい山行が鼻についていた。六甲のゲレンデ、大阪駅の構内に多くたむろする山屋の一員としての自分の姿もあった。スポーツアルピニズムとか山の思想とか、町の生活の延長の愚考をしりぞけて、もっと土くさい、山全体の香りを望むようになっていた。

4回生になってから、下山後、里に残ってゆっくり山里から山を見るように努力した。今から思うと大いに勉強になったと思う。晩秋に劔岳に登り下山後、伊折の中村さん宅で泊めてもらった。山里から去る人々ばかりで、増えるのは観光客と登山者だけ。それも自然を荒らして去るだけである。会話のそんな言葉が聞きとれて心苦しかった。翌日は線香を買い、馬場島へ新人2人と行った。福永さんのレリーフに香をたて、見上げた劔は白銀が輝いていた。又、3月の女子合宿下山後、一人で、大町や鹿島部落で遊んだのも印象深く残っている。土地の子供達と木彫人形を作って遊んだり、後立山連峰を見ながら、日なたぼっこ中の老人との話は楽しかった。その旅行中大糸線の車中で、青木湖，木崎湖，中綱湖の伝説を聞いた。その時はダイダラボッチのことだなと思っていたが、それは間違いであった。とにかく、ダイダラボッチとの再会であった。

ダイダラボッチとは地方により色々ななまりがある。大人の足跡伝説の主人公であり、

栃木（デリデンボメ，ダイダラボッチ）、千葉（デーデーボ）、埼玉（ダイダラボッチ，大太坊）、東京（ダイダラボッチ）、山梨（レイダラボッチ）、静岡（ダイダラボウシ，ダイダラボッチ）、愛知（ダイダラボチァ）、岐阜（ダダホウシ）、京都（ダイトウボウシ）、島根・香川（孫太郎）、大分・長崎（味噌五郎）などの都府県にある。

信州におけるダイダラボッチの足跡の伝説をたどっていくとおもしろい事に気づかれる方が多いと思う。そこで私の荒唐無稽の推がはじまる。これは学問的論証ではなく伝説の遊びなのでよろしくお聞逃してもらいたい。

まず、軽井沢の浅間山と碓氷峠の間に住んでいた、デーランボの足跡は宇都宮から福島を通り阿武隅川まで至る。これは現在の東北本線である。つまり奥州道中である。又彼は千曲川で足を洗い、クソまでたれたというから、島崎藤村はこの話を知っていただろうか？さらにその足跡の点と線を追って行く。駿河から塩尻，諏訪と続く点は、駿河ー甲斐へ続く塩の道と結びつく。そこで対抗して出てくるのが日本海に住む仁王である。彼の足跡が青木，木崎，中綱湖の仁科三湖である。これは松本街道、日本海側の塩の道にそって伝説がある。塩の道で思い出すのが、武田信玄上杉謙信の長い抗争が思われる。塩尻峠の決戦，川中島合戦（１５５５～１５６４）など覇権の道であった。北塩の道にあたる姫川沿いは皆、よく馴染み親しんでいる道である。現在の大糸線、国道１４８号線である。又、白馬村神城の西山には北向観音があるが、そのふもとの道は鬼が大なわを引いた跡にできた道である、という伝説が残っている。

関東北方を中心に大人の足跡伝説は分布しているのであるが、その点と線をたどっていくと、まず、京都～江戸（中仙道）。塩尻～松本～糸魚川（松本街道）。府中～甲府～塩尻（甲州道中）。さらに例幣使街道（高崎～日光）などの峠・関所・番所を通過する。街道からはずれても峠道を通過して点は動いている様にも思える。

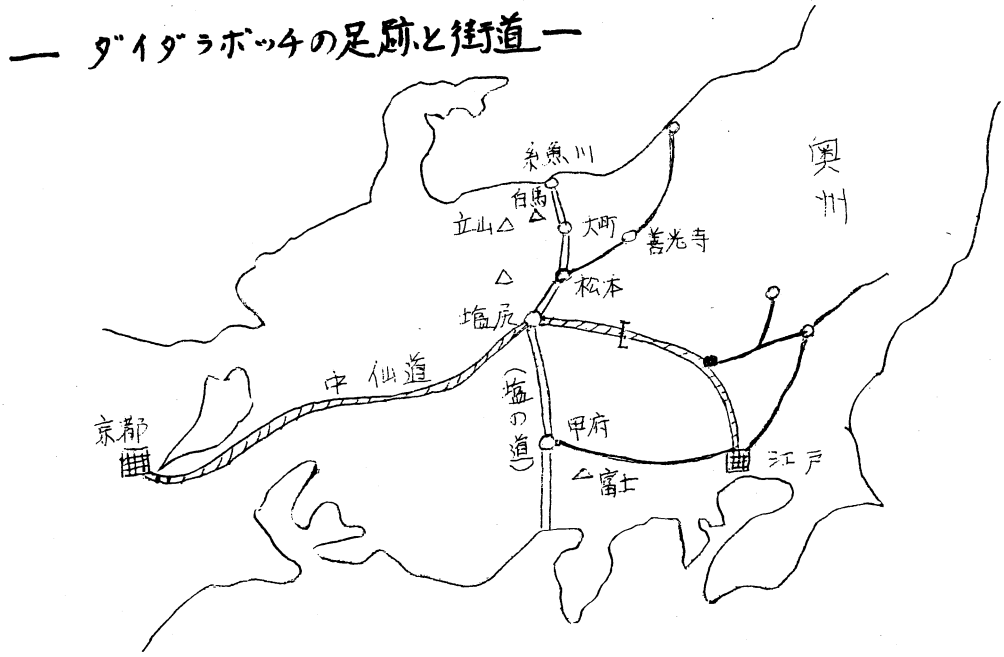
文化・権力伝道の跡を思わせる動きである。大人の足跡伝説から派生する、伝説類似性，物流。文化・権力交流の足跡とも見られるのである。

それにしても、山里の人々が大人伝説を生んだのは、どんな風土であったろうか。山里から山の連なりをながめた人は、その心情が理解できるであろう。どんな人でも、朝夕、日に染まりながら雄姿を見せる山の連なりに大人の寝姿を想像するのを禁じえないであろう。九州の肥後には連山の姿を涅槃像に託してながめる地方がある。それと同じく、大人（巨人）の寝姿に託して、土地の山々を教え、さらに遠い国のことを子供達に語る老人の姿。そんな光景が浮かぶのである。ダイダラボッチの懐に抱かれて、山と溶けこんだ生活がそこにはある。

昔より、多くの人々が往来した山里の道。

それにともない伝説を生んだ信州の山。ダイダラボッチの住む山々に思いを寄せる日々である。

S・48年12月9日




## 氷河と緑の山々へ
## ーカナダ・ロッキー山行ー

村田信一

山岳部が創立50周年を迎えた年、永年来の夢であった海外の山の頂を踏むことができました。過去試みこそあれ、実現されたのは今回が初めてで、その為入国が容易で登山許可も複雑でないカナダの山々が対象として選ばれました。

カナダ・ロッキー山脈は、国立公園の管理が行き届き、救助体制も万全である他、その高緯度から氷河が存在するなど多くの長所と魅力を兼ね備えた絶好の目標だったのです。

目標の具体化と共に、一昨年より本格的な準備を始め、多くの山域を選んで、最終的には、カナダ・ロッキー山脈の最高峰である、Mt. Robson（3953m）を含む4

つの山域に決定されました。

昭和４８年６月２０日、日本を出発した登山隊は、主目標のＭｔ．Ｒｏｂｓｏｎ他６つのピークに立ち、８月１７日無事終了と同時に現地解散しました。今振り返ってみて、約１年間に渡る準備過程の事柄は、単なる登攀自体の成功以上に重要だった様に思います。

そして多くの方々の協力を得て、実現と成功を得たことは、記しておくべきであり、忘れてはならないことでしょう。

## Ⅰ　準　備

かねてより海外登山を行なおうという意気の高まっていた部員達は、昭和４７年６月から本格的に動き出しました。最初大ざっぱな地図を買い込み、それは次第に２０万分の１、５万分の１という具合に細かくなっていったのです。それと共にカナダの山岳図書を購入し、部員達で手分けして翻訳し、山域がほぼ決定してくると、山麓の街の交通機関を調べ、ロードマップを手に入れました。航空会社を何度も訪問して、荷物の輸送について交渉し、アドバイスを受けカナダ山岳会（ＡＬＰＩＮＥ　ＣＬＵＢ　ＯＦ　ＣＡＮＡＤＡ）と連絡をとる。

年間１００日以上の山行を行う傍らこうしたことを行なうのはなかなか難しく資金面でも苦労し、せっせとアルバイトなどもしていました。嫌になってやめてしまおうかと思うこともありましたが、そんな時送られてきた色とりどりの地形図は僕らの気持を和ませ、べっとりと白く塗られた氷河を示す部分を見ると、まだ知らない氷河を踏みしめてみたい思いに元気付けられました。

準備が整うにつれて、登山許可や装備、食糧のことなどわからなかった事も次第に判明してきましたが、気象については問題が残りました。日本語の天気図なら書けても、英語の天気図は、日常の英会話すらあやふやな僕等にとっては、難しすぎて書けず、〃ＬＯＷ　ｔｏ　Ｅａｓｔ　９　Ｋｎ●ｔ　×○△＊－－－－／？〃では自己嫌悪に陥って登る気がなくなってしまいそうな気配です。結局僕等が行く６月から８月にかけては、天候が安定していることがわかったので、観天望気に頼らざるをえないということで落ち着きました。

色々な準備があったなかで、最も難行したものは、資金の援助と大学の許可をとることでした。これは、自分達の計画とその主旨を他の人々に理解してもらう努力を怠っていたそれまでに対する反省を与えてくれました。

## Ⅱ　カナダの印象

出発後のカナダでの生活は、出発前の準備の時の地味さとはうって変わった状態でした。もちろん派手という訳ではありませんが、幅広い余裕のようなものが感じられたのです。大陸の風土の中で語学の障外は多少あったにしろ、僕等は毎日愉快に過ごし、そして以前

にも増してあつかましくのんびりとしてきた自分達の変化に驚いていました。

一般の観光旅行とは異なり、奥地（？）へ入って行ったことをその原因の一つだと思います。それに田舎へ行けば、行く程のんびりした純朴さは目立ってきます。

ひなびた町の私設孤児院で泊めてもらった時には、子供達の粗野なのには驚かされましたが、人なつっこく、のびのびした純粋さを見て、忘れたものを取り戻したような気がしました。その時、この国に住んで見たいと考えたのは、僕だけではなかったと思います。

## Ⅲ　Ｍｔ．Ｒｏｂｓｏｎ の思い出

７月１４日、僕等はこの合宿の主目標であるＭｔ．Ｒｏｂｓｏｎをめざして進みました。Ｍｔ．Ｒｏｂｓｏｎは、４０００ｍ近い独立峰でであるだけに気象条件が悪く、また僕等の登攀した北東面からのルートは、かなりの困難が予想されていました。

Ｒｏｂｓｏｎ氷河にたどりつく迄３日、僕等はそこにベースキャンプを設営しました。Ｒｏｂｓｏｎ氷河は幅１㎞長さは５～６㎞もあったでしょうか、とにかく広大なものです。そしてその先、そこはもう雪と氷ばかりの氷河の上にアタックキャンプを設けて登攀のチャンスを待ったのです。

７月の末というのに、連日雪が降り続き、６日間狭いテントの中で待ち続けました。準備万端を整えたアタックザックを枕に、靴の凍ったのに気付いて舌打ちしたりしながら……。そして食糧の残りももうわずかしかなくなり、あと１日しかここにはいられないという日になって、チャンスは来たのでした。

出発午前３時２０分、雪にかくれたクレバスをわたり、雪崩の危険なセラックをぬって、３００ｍの氷の壁を攀じ登頂する迄１３時間を費しました。ピークからはカナディアンロッキーズの山なみが果てしなく広がっていたのを憶えています。帰幕の途中ながめた夜空いっぱいの星と、絶え間なくゆらいでいたオーロラ。その直後転落したクレバスでの恐怖と助かった時の喜び。延々２４時間のこのアタックは、僕等が今迄に経験した山々のうちで最も辛く、困難なものでした。それだけに印象深いこの山のことを僕は忘れることができません。

## Ⅳ　熊の話

Ｊａｓｐｅｒの街のマスコットは愛嬌のある大きな熊の像です。僕等の宿泊していたＪａｓｐｅｒ郊外のキャンプ場では、夕食事になると食物の匂いを嗅ぎつけて熊が出没していました。子供がとりまいて、あとをつけたりしていますが、獰猛な動物です。熊による被害も多く、カナダでは野生の動物に餌をやることを禁じています。その為国立公園では残飯もみだりに捨ててはならず、所定の厳重なゴミ箱に捨てに行かねばなりません。Ｊａｓｐｅｒ市内の熊の像も実はゴミ箱なの

です。山から降りる時自分達のゴミは、吸いガラ一つでも持って帰らねばならないというのが規制のようで、違反すると罰金２００ドルとかで、さっそく僕等も実行しました。野生動物による被害と自然保護の立場からいえば、これは当然のことだと思います。

熊は、ハイウエーの道路脇にも出没していました。そんな時ハイウエーの車は熊の真横で停車して、写真を撮ったり、熊に吠えてみたりで、またたく間に交通渋滞。それでもいいかげん人間が増えてくると熊の方から退散して、交通渋滞は解消します。

入山中は、たえず熊への恐怖にさらされていた僕等は、ある日キャンプ場で催されていた熊についての説明を聞きに行きました。この説明を聞いて十分な対策をねらうとしたわけです。けれども、熊について十分知るには、英語を十分に知る必要があったように思います。

# 明神岳主峰東稜

朝倉　満

１９７２年１０月１２日～１３日

松本好博（Ｊ３）　朝倉　満（Ｊ２）

（Ａ）

冬期合宿偵察山行（朝日岳～白馬岳）に行っていた松本と、槍ケ岳北鎌尾根のトレースに行っていた僕は、明神の養魚場で待ち合わせ、ＵＢの方より、割に静かで〝オモロイ〟所と聞かされていた東稜及び奥又白の岩場に向う前、梓川の川辺や吊橋で午前中一パイ、秋の濃厚な気配に満ちた上高地の風情に浸り、午後近く、やっと温い日差しを受け、少し汗ばみながら養魚場を出発した。（11：15）

樹林帯はすぐに抜け、涸沢と化している下宮川を割と明確に、Ｂｕｓｈ帯の中に続く道をたどって、どんどん高度をかせいでゆく。上を見上げれば、明神岳Ｖ峰のピラミダルな男性的偉容が我々を魅了し、下には、梓川がまばゆく日を照り返し、樹海の間に明神館や養魚場の屋根が小さく見える。ワデ宮川、宮川の急な草原の傾斜面を上りぎみにトラバースにゆく。途中、もろい明神岳東面の岩壁帯を間近に仰ぐが、登攀意欲を呼び起すしろものなどではなく、もろに、ガラガラのもろそ

うな岩壁で、やはり、草原に寝っころがって眺める－観賞壁－にふさわしい。Ⅳ峰東稜末端には、事故死されたであろう人の〃人をおとのう人の……云々〃に始まるレリーフが埋め込めてあり、そのつつましやかな墓碑銘に黙礼し、長七沢を横切って、前面のｃｏｌ－ヒョウタン池に着く。（１３：３５）

池は、なる程、名前の通り、池と呼ぶには小さいがヒョウタン形をしており、まわりは、日本式庭園のような感じで笹原に寝っころがり、Ⅴ峰の秀麗な姿や、反対側の三本槍の姿を眺めながら、満ちたりた気持ちで、ツエルトを張る。

（Ｂ）

T·Sのヒョウタン池より踏跡に毛の生えた程度の道を登りつめ、４０分程で行く手に、ｂｕｓｈが岩交りと、変じている。通称、第一段階に、つき当る。（７：２５）

かなり急な４０ｍ程の草付きを登るが、積雪期に用いたのだろうクレモナのＦｉｘがやたらに残置してある。相当木の根やカン木をつかんで、身を引き上げる行程を経て、やっと、ラクダノコブに達すると、バットレスが行く手をさえぎり、その上に、Ｐｅａｋがひかえている。（９：１５）ここで、一息も二息もいれ、一応登攀具、ヘルメットを着用しザイルを出して、草付ｇｕｌｌｙをつめ、２０ｍ程の岩を右手の凹角にそって登る。（９：５０）

残置ハーケン５～６枚＆Ｆｉｘロープも、備わってはいるが、キスリングを背負っていては、やりにくく、カラ身でトップは登り、セカンドはそのまま、ラストはキスリングの吊り上げだ。

しかし、無念、残念、こんな芸当は二人共始めてで、ザックは素直に上ってくれず、強引に、引っ張って、あわれザックは、軽度の負傷。二人、にが笑いしながら後コンテで、急なガレ場を崩さない様、気を使いながら、左斜方をねらって、つめ、裏側をまいて、Ｐ－ｅａｋへ。（１０：５５～１１：５５）

稜線上は、風が強く、東面側に、腰を下し箱庭の様に感じられる上高地周辺の眺めを楽しみながら昼寝。

昨日も今日も本当にポカポカ温かい。

Ｐｅａｋより岩稜をたどり、Ａ沢入口に向うが、明神方面から向うとＡ沢入口に極似したものが多々あり、途中ミスって、中又白を３０分程下ってしまい、今度は、前穂高岳を確認して、Ａ沢を下降する。（１３：４０）

奥又白池畔にて、東面を登りに来ている仲間３名と合流し、二人共、山行に入ってより久し振りにテントに入る。（１５：２０）

昨日、今日と、振り返り、我々の外に、誰一人会うこともなく、静かで、又、この奥又白の様に、余り汚されておらず、展望は最高であり、又、行程も技術的には余り困難でなく楽しい登行だった。全体に、小じんまりとした感じはあるが、もう一度訪れたい気持ちを抱かせる。

（附記）

前回のもう一度が、今度はもっと大がかりなものになってしまった。昭和４８年冬期合宿に、明神岳主峰東稜より、前穂高岳、及び明神岳Ｖ峰のＡｔｔａｃｋという計画で、荷上げに訪れた際（１１月中旬）、雪に覆われた東稜は、相当困難の度を増し、又、それ由にこそ、十二分に、我々のクライムを満足させてくれる山域に思われる。

（Ｓ４８・１１・２４）

## 思い出の上高地

中辻由美子

「よりにもよってこの梅雨時に行くの？」と言われながらも、大阪を出発した。行く先は上高地、徳沢である。大学に入り、そして山岳部に入っての初めての山行である。

当時の女子部員数は四名。皆、張り切っているのに、どの家庭でも山行に際しては反対であった。そこでここなら許してもらえるとある先輩が提案して下さったのが、上高地、徳沢である。

かねてより計画をたてていた表銀座縦走パーティーと、徳沢で合流する約束をして、西川、南条、そして私の女子三人は先輩大辻さんに連れられて、出発した。

私たちも入部したばかりだし、初めての山行とあって、小屋泊りにする事にした。その為、幾分、出発前の準備は、楽で、サブザックの中はがらんとしているのに、ずい分、あわただしい内に出発したのである。

六月とは言え、上高地の朝方は、私たちの想像以上の寒さで、バスから降りると、まず震え上った。が、それでも大辻さんは、私たち三人専用の名カメラマンとなり、次々とシャッターを押して下さったのである。私たちも、ただ震えてばかりは居られなかった。物音一つなく静まり返った朝もやの中の大正池に続いて、河童橋から望む、穂高連峰の豪快なスカイライン。橋の下を流れるその雪渓を溶かしたのであろうその清流。目に入るその風景のすばらしさのに、ただ〜目を見張るのみであった。

そして、いよいよ、あこがれの地での行動開始。縦走パーティーは、今頃どうしている

んだなどと、おしゃべりに花を咲かせながらただ、遠足の子供たちのように、はしゃぎまわっていたのである。徳沢への道は、明神池・明神岳と、移り変るその景色に見とれている内に、到着した。梅雨にもかかわらず、運良く、お天気にも恵まれ、どの山々も、きれいに見えた。あれが噂に高いあこがれの穂高なのか……。しばらくの間、ぼう然と、立ちどまっていた。もちろんこれは、私だけでなく、彼女たちもそうであったのであろう。大辻さんに、「さあ、小屋へ行こうか」と声かけられて、我に返ったものの、その場を離れるのが、もったいなくて、聞こえないふりをしていたのを覚えている。

小屋に荷物をおろし、食事を済ませると、すぐに、また、外へとび出して行った。そして、つい先程までは、あんなに、おしゃべりしていた私たちなのに急におとなしくなって各々思い思いの所に腰をおろし、山を眺めていたが、いつの間にか、緑草のおふとんの上で眠ってしまったのである。

何か冷たいものが、顔にあたって、目が覚めた。雨である。やっぱり降りだしたんだ。彼女たちも目が覚めたらしく、あわてて、小屋へかけもどった。

縦走パーティーはまだ来ていない、どうしたんだろう？……。と話しているうちに、夕食の用意が出来たと、知らされた。食事をしながらも話題はその事ばかり。すると玄関の方で、「甲南大学の者ですが……」というなつかしい森さんの声！

私たちは、食事もそこそこ、とんでいった。いやになつかしかった。遠い外国で親しい肉親に会ったように……。彼らは、テントを張り、食事を作っていた。何もかもが、私にとっては、珍らしい事だった。その準備を、手伝わさせてもらったりもしたけれど、これは、かえって、準備を手間どらせたのではないかと、今になって反省している。彼らの食事に、私たちも入れてもらい、久しぶりの対面に、ただなつかしく、話題も豊富であった夜空には、夢の中の出来事のように、たくさんの星がきらめいていた。

翌日も晴天であった。男子が横尾の方へ行っている間、私たちは、新村橋で彼らの帰りを待つことにした。歌をうたったり、思い出話をしたり、昼寝をしたり……。彼らがもどってきて、とうとう帰らなくてはいけない時間がやってきて、いや応なく、現実に引きもどされたのである。

今から思えば、あの感激は夢のようであり、先輩諸兄からは、まるで幼稚園の遠足であったと、軽蔑されていたかもしれない。が、しかし、私にとっては、数少ない山行経験の一つとして、あの清流の水の冷たさと共に、十二分に心に残るものとなったのである。

# 北八甲田スキーツアー　1973年

3月26日～29日

西村　清

メンバー、井上知三4，松本好博3，西村清1

行動概要：26日　雪　青森発9：20　酸ケ湯10：50→仙人岱ヒユッテ15：20

27日　雪　ヒユッテの東側斜面でスキー練習

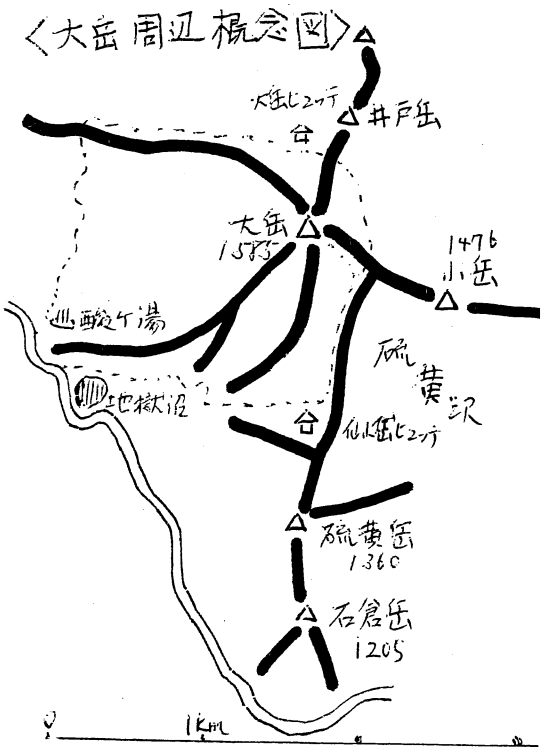
28日　曇　ヒユッテ⇄大岳頂上

29日　晴　仙人岱ヒユッテ発12：30→酸ケ湯15：10＝青森17：10

この年の春山合宿は北海道の日高山脈で行われた。合宿終了後、滅多に行く機会の無い八甲田山でスキーを楽しんでいこう、と松本さんが発案した。その計画に井上さんと僕がとびついた、というわけだ。

八甲田山は大きく南北に分けられ、その北八甲田の主峰、大岳を中心として小岳、硫黄岳、井戸岳のつくる4キロ四方の火山台地をコースに選んだ。火山の裾野は広く、傾斜も緩いというスキーにはもってこいの場所で、樹林帯というものは殆ど無く、わずかな灌木が樹氷となって我々の目を楽しませてくれる。あの広い雪原を輪カンでラッセルするなんて馬鹿げている。下手なスキーでも苦しいラッセルから解放されて、短い晴天を十分に堪能することができた。

八甲田では各ツアーコースが番号入りの看板で明示されてあり、その途中には休憩所として利用できる無人小屋が幾つかある。我々は無人小屋の1つ、仙人岱ヒユッテをベースハウスとし、大岳周辺を探策した。



２６日　（月）

バスで酸ケ湯に着いた我々３人は温泉旅館の豪華さに驚かされた。ひなびた湯治場というものを想像していたのだが、片田舎の湯治場などとは形容し難い立派なホテルだった。

ホテルの前につッ立っていると北国独特の痺れる様な寒さに身体の芯まで冷えてしまった。天候は思わしくなく小雪がちらついている。我々は恨めし気に天を睨むばかり。

スキーにシールを着けてバス道を歩き始めるが、コースへの入口がわからない。２００メートル程進むと地獄沼に出くわした。沼は噴煙をあげ、周囲の雪を解かしている。沼の左手に石碑があり、その先に御堂が見える。あそこまで行ってみよう、というのでブッシュのつき出ている斜面を越えるとスキーのトレースを見つけた。立木に「大岳コース１」の三角形の看板が付けられてある。この看板の数字を追っていくと小屋に辿り着くことができるはずだ。樹林帯の中のコースは、ほぼ平坦で東に向っている。大きく開けた沢筋に出るとここから登りとなる。大きなギャップを越えようとした時、遂にビンディングの金具がとれてしまった。それまでも故障の連続であったが、細引きで用は足りていた。スキーをはいている分には踝までしかもぐらないが、スキーをはずして脚を雪の上に置くとどっぷり膝までもぐってしまう。スキーなしで歩くとなるラッセルの程度が思いやられる。

ザックを降ろしてペンチと針金を出して、凍えた指で修理にかかる。看板を見ると小屋までの半分位いの距離しか進んでいない。どうにか使える程度に修理して井上さんと松本さんの後を追う。松本さんにはすぐに追いついたが井上さんは先に小屋を捜しに行ったらしい。高度をあげるに従って、木はまばらになり風も強くなる。ガスが濃く１０メートル程前の松本さんが黒い影にしか見えない。突然、奇怪な姿を目にして立ち止まると何の事はない、樹氷だった。雪面はクラストしていて、かろうじて判別できる井上さんのトレースだけが頼りである。沢をぬけて高原状のところに出ると竹ザオが立ててあり、一安心。背丈程の樹氷の間を縫って５分程進むと小屋の前にとびだした。屋根のすぐ下まで雪が積っている。小屋の前に回ると井上さんがスキーも脱がずに待っていてくれたのが印像的だった。入口のところは除雪されているが、くぐりぬけるようにしなければならない。

小屋にはストーブがあり ── マキは持参しなければならないが ──、４畳半程の大きさのカイコ棚が縦横に並んでいる。先客が２パーティー程あったが、我々はその一角を占領することができた。

２７日　（火）

天候は依然思わしくなく、ツアーコースを知らない我々は身動きできなかった。やむなく東向きの硫黄沢にてスキー練習をした。

２００メートル程滑り降りてからシールを着けるとまた登る、という具合で２～３回繰り返すといいかげん疲れるもんだ。それに風が強いのにもまいってしまった。１時間もすれば小屋に逃げ込む仕末。小屋に入れば真暗なのを幸いに真昼間からシュラフにもぐり込んで昼寝を決めこんだ。

２８日　（水）

相も変わらず悪天候。が、昨日より比較的ましな様である。昼寝をしてから外へ出てみるとガスが晴れて青空だ。一時的な晴れ間だろうが、この機会に大岳の頂上を極めることにする。

大雪原をスキーで歩くのは何と気持ちが良いものだろう。大岳の登りに差し掛かる前に振り返ってみるとその眺めにアッと驚かされた。真白な雪原にポツンと緑色の小屋が雪をかむって在るのが、どことなく極地の測候所を連想させる。我々は東側の斜面から取付いて、登りの斜面は大きく稲妻型に進む。ピーク付近にはガスがかかっている。西側はいつもガスがかかっている様だ。クラストした緩斜面を越えると縦走路の様な所にとび出した。斜面を越えると縦走路の彼方にもっと高い場所があらわれ、そこがピークかと思われた。下方には大きなカールが見える。と、思いきやガスがすっかり晴れるとカールと見えたのは実は火口で、我々は外輪山の一角に立っていたのだ。異様な風影にしばらく見とれ、風の冷たさに現実に引きもどされ追われるに下り始める。シールをはずし踝を固定して斜滑降、キックターンと、南側の斜面を小屋を目指して降りて行く。小屋に近づくに連れて風雪はひどくなり小屋の前でスキーをはずす頃には昨日と同じ天気だ。ビンディングをはずす手間ももどかしく思うが狭い入口なので一人ずつしか入れない。陰気な小屋に雪まみれで替り込む。

２９日　（木）

連日の悪天候で一つもコースを廻れなかったが、今日は下山の予定である。うまい具合に晴れてくれたので大岳コースを通って下ることにした。このコースは概念図でも分るように大岳の裾野を一周している。だいたい大岳の東側は平坦で西側は滑降のコースとなる。縦って井戸岳、大岳の鞍部まで歩いて、その鞍部から滑降態勢に入る。

仙人岱ヒユッテを後にシールを着けて歩き始めるが、気温が高いので湿雪となりシールの裏面に雪がベッタリと付着して重くなるのでシールをはずす事にした。

大岳と小岳の斜面には幾人かのスキーヤーが認められシュプールも鮮やかに滑降している。大岳のだだっ広い裾野を巻いて大岳、井戸岳の鞍部に着くと酸ケ湯側はガスが立ち籠めている。このガスは部分的なものらしい。鞍部から少し下ると大岳ヒユッテに着く。大きな雪の固まりにしか見えない。小屋の横で

小休止を取り踝を固定して滑り始める。大岳を西に向ってトラバース気味に斜滑降で下り幅の広い尾根に出るとコースのクライマックスとなる。ところが肝心の技術の方がまるでお留守なので深雪をこなせずに、転倒ばかりしていた。近道をしょう、と５０度近い斜面を下った時は滑るというより落ちていく様だった。ここらの山はスキーをする為に在るようなもので、何処を見てもそれらしき場所は容易に見つけ出せる。徐々に増えてくる樹に視界をさえぎられても、それらは樹氷となっているので見飽きる事はない。樹林帯をぬけると眼下に酸ケ湯温泉が望める。そこまで３０度程の斜面を一滑りすれば終わりだが、やはりここは無難に斜滑降、キックターンと慎重に降りた。到頭、最後まで格好良くは滑れなかった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

いつもなら下山後「やった！」という満足感か、或いは「終わった！」という安堵感に浸るものだが今回の山行はそうはいかなかった。長い間、自分でも莫然と振り切れないものを感じていたが、やはりスキー技術に原因があるのだ、と納得することができた。スキーツアーという新しい試みにおいて、新雪があれば雪上車がラッセルしてくれるゲレンデでは知り得ないスキー技術の存在を知ったからであり、登山の中のスキーの位置を思い知らされたように思う。

一般のスキーヤーはスキーのかかとの上がらないビンディングを使用している為にスキーを担いで登り、シールを使ってもその効果は十分に発揮されない等の無駄を払っている。翻って我々について言えば、最大の問題はスキー技術である。全般的な技術の向上は勿論の事だが特に深雪の回転技術、担荷をしての滑降など、前途は多難である。

## いろんな山とあれこれと

平井幹男

ある時「どんな山が好きですか」と聞かれて答えに困った時がある。

「何処」と聞かれれば、ぼくはわかりませんとはっきり？答えるが。「どんな山か」と聞かれると、少々考えてしまう。

それにもう１つ「どんな山が楽しいか」こ

れも困る。

山はそれ自体に魅力があるのかそれとも、その行為が好きなのか、それも問題である。

あまり深く考える事はやめにして、様は楽しかったらそれでいいと、自分自身、答えを出して、山に登っている。

アルピニズムとは困難の追求であるとするならば、石屋の見習いの様にハンマーをふって、岩にへばりつき何センチかをずり上っても、それは一つの困難へのチャレンジである。しかし、それではおのずと限界が見えてくる。人が作ったルートの横にハーケンやボルトを打ちたして新ルートとさけんでも、それはあまりにも悲しい。かと言って、エベレストに一人で登ると言って途中で遭難したイギリスの登山家の話も少々悲しい事である。

様は楽しく登るのにある程度のテクニックと少々の知識を持って山へ登る事から始まる。そして少し時間がたつと自分は『これでいいのか。』と考え、より立派なアルピニストたらんとあれこれ考えるものであるから、よけいにわからなくなる。

こんな事は日本人だけが考えるのか、又これは大学の山岳部という一つの社会の中であるからか、と考えてちょっぴり世界をながめてみた。

１９７１年の春に、ヒマラヤをながめにネパールへと行った。

ヒマラヤはそのアプローチが困難である事からすでにその山の持つ困難性という問題にぶつかる。

ネパールにおいて登山とは、それ自体、彼らシエルパ族の生活をかけての労働である。そして何百人もの人員を必要とする大キャラバンともなると、これはもうその通路にあたる住民にとっては大きなサイドビジネスであろう。

１９７３年の夏、カナディアンロッキーで合宿した時は、ハイウエーを車で飛ばして、パーキングして少し歩き出すと氷河にもう取り着けるといった具合に、この国においては登山はあくまでもスポーツであった。

では、地域は登山そのものに何か変化をあたえているのかという問題が次に気になり出した。

たしかにアフリカのルムエンゾリなどの山々に登るにはジャングルをかきわけて進む探険家でなくてはならないし、南極やグリーンランドの山に登るのには犬ゾリの名手であったほうが良い。

こう考えていくと実に楽しい事ではないか、そして登山とはそれ自体、まったく形を一定させたものでもなく、色々な山を色々な登り方ができるものであること、あらためて考えさせられた。

登山とは、人間性を豊かにする一つの方法であるとするなら、やはりより良く楽しまなくてはならない。そう、大いに楽しめば良い。だから、どんな山が良いかはその時の気持ちにもよるし、その登り方にもよるものである。

ヒマラヤは雄大であったし、ロッキーは美しかった。そして、ロッキーから帰った年の秋の日本の山は、美しすぎるほどの紅葉であった。何も考えこむ事はなかった。こうと決まった登り方もなければ、これにしょうという山も決めなくても日本は広いし、世界はもっと広いのであるから、自分にあったとても楽しい山と、とても楽しい登山をしょう。

## 「こんな私が……」

西川 けい子

〝登山〟というのは、私にとって生まれてから此の方18年間ずーと無視されてきたスポーツであった。又幼い頃より〝女の子がテントで寝るなんてとんでもない〟という偏見のある家庭教育を受けてきた。だのにどこをどう間違ったのだろうか…？運動靴にナップザックの格好から、いつしか登山靴に特大のキスリング、そしてピッケルという代物まで身近に置くようになった。本当にいつから…ああ、確かにあの針ノ木峠での雲海が悪いのだ。いや、新雪の穂高だ、いや新村橋でのヒルネだ。いや、いや…。今までのすべての山行が甘酸っぱい優しさとほろ苦い感傷を伴って、私の心に蘇る。女の子はあらゆる面でいろいろ規制される。山における自分の位置を把握し、かつ男子に負けじと頑張る信念がない限り、自ずと山行自体に枠ができてしまう。だからこそ、今この時を大事にしたいのであり、又一つ一つの山行が惰性的なものになりえないのである。

大学1年6月、新緑の徳沢は女の子のたわいないおしゃべりと男子パーティーの迸り出る程の活気で満ちあふれていた。私にとって、この輝くばかりの光景は、最も美しいものの一つだと信じせしめた。

そして、11月。徳沢に再び足をふみ入れる。男子に全面的にパッキングを頼りきり、出発の時やっと一人前の姿となる。喜んで足を踏み出したものの、上高地から5分もたたぬ内に手がしびれ出し、どうしょうもない苛立ちと虚しさを感じた。どこからか楽しげなコーラスが聞こえてくる。ムム…人の苦しみも知らないで…！ほんとにしんどかった。私を支えたものは、ただ男子の足手まといになるまい…それだけだった。〝しんどいか？〟と聞かれても〝しんどい〟と答えてはいけないと思っていた。時々その頃リーダーの山本さんが女子の様子を見に、前の方まで来て下さっ

たそうだが、こちらは前の子の足を見て歩くだけで精一杯。脇目もふらず、ただ足だけを…。たかが１８kg…人は笑うだろう。しかし、私にとっては、生まれて此の方１９年、１８kgなんぞの重い荷物を持ったことがない。辛い、苦しい明神までの１ピッチであった。明神からは団装がなくなり、かなり楽になったと思いきや、今度は睡魔が私を襲う。頬をつねったり叩いたり、賑やかにやってはみたが、それでもダメ。前の彼女の靴を何度踏んだことか。

結局当然ではあろうが、景色なんぞは私の視界には入らず、テントサイトに着いてしまったのである。アッという間にテントが張られ、一斗罐からの食料の出し入れに必死になっている間に、すでに夕食はできあがっていた。今ではありえない事だが、この時はまるでお客様扱いであった。夕食の後は入山と女子徹収コンパ。生まれて初めてのウイスキーに舌鼓をうつ（？）。空は満天の星であった。私の山での不眠症はこの頃からなのか…ちっともねむれない。枕はどこかへ飛んでったし、足はおさえつけられていて身動きならず、体はそり返ってしんどいし、誰れかのいびきはすごいし、したがって朝がくるのをどれほど待ちこがれたことか。

朝！「おきろヨー」男子の声。ガバッ！〃ああ助かった。〃が、喜んでいる暇はない。即、ブヌがプレイヒートされ、「あれ取れ」「これ取れ」「ハイ」「ハイ」……なんというスピード。あっという間に朝食であった。歯切れが良い…というのか、一人ニタニタ快よく笑っていたら、即出発の用意。借りものの超特大のキスリングは個装だけ入れるのにはあまりにも大き過ぎる。エアーマットをふくらませ、なんとか格好をつけてみた。やはりこの時も男子にパッケを手伝ってもらう。思い出のテントを後に眼下の梓川目指してヒョイヒョイ降りてゆく。「がんばって下さーい」「気をつけてネー」「ちゃんと降りて帰れョー」「気ーつけてナー」互いの声が朝の冷気にとけこむ。ふり返り見ると、もう男子の姿はない。黄色いテントがポツンと残っている。そして、テントさえも見えなくなる。すると、さっきまでの事が大変なつかしく思われる。今頃男子はどこを登っているだろう。見えるわけもないのに、赤いジャージの一団を白い尾根の上に追う。徳沢でも寝転びながら、あくことなく白き峰々を仰いでいた。

一年生の頃の山行というのは、現在の山行と較べようがない程、その場だけのお遊び的要素が強かったといえるかもしれない。しかし、それは生々しい思い出ではなく、遠くなつかしい、あまいすっぱいものである。どちらにせよ、結果的に何年かたって、あまいすっぱい思い出として心に残る、そんな部生活でありたいと願っています。又、そうである為に今この時を大切にし、がんばっていきたいと思います。

# お山の大将俺ひとり

松本好博

＜日高で……。＞

カムイ北東尾根１８００ｍ。ベースキャンプから眺める日高の主稜線が茜色に輝く。

数日後、２年の朝倉とアタックに出る事になっている遙か彼方ピパイロまでの稜線を目で辿った。ピパイロと、北戸蔦別岳との間に１９４０ｍ峰と称される、べっとりと雪をまとったなだらかなピークがある。ピパイロが１９１６ｍだから、ピパイロよりやや高い事になる。

３月１７日。待望のアタックの日、日高幌尻へ向う８名とゾロゾロ列をなしてＢＣを後にした。ＢＣより、カムイ岳ジャンクションまでの登りは、トレースをつけてもすぐ消えてしまう。我々ピパイロパーティーは後方につき、幌尻パーティーのトレースを辿る。戸蔦別岳で、幌尻へ向う８名と別れ、それからは２人交替交替で必死にラッセルしながら幾つものコブを越えた。ガスが一段と濃くなり雪面判別しにくくなって来たので、明日の晴天を信じて早目にツエルトを被る。翌日、ピバークサイトから１９４０ｍ峰を経てピパイロまでは、ナイフリッジあり、岩峯ありの期待通りの稜線であった。

ピパイロ岳、アタックを終えての帰路。コルから見上げる１９４０ｍ峰の雄姿。

そして安の定、その登りの辛かった事。

１９４０ｍ峰……。なぜか心豊かになるような気がする山である。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

＜岩登り＞

入部以来、土・日の山行やら、授業をサボッて裏の岡本バットレスへはよく行った。バランスが悪いのかあんまりうまくならない。１年の時は井上さんによくしごかれ、よく落ちた。好きなゲレンデは、保塁岩と、岡本バットレスである。どちらも見晴らしがよい。晴れた日に行くと神戸港が一望のもととなる。

秋晴れの日など先輩、後輩を誘ってバットレスへ行く。

高い所から下界を見下ろすのは、気分満点だ。夜景も又最高である。今はもう卒業されて、腹の出てきた森さん、平田さんと「林中紅葉を焚きて、燗を楽しむ会」とかなんとか言って、落葉を集めて燗をしては秋の夜長を過したし、渋谷と２人で１週間、バットレスにテントを張り岩登り合宿をした。毎晩、大声で歌をがなった。

俺はディレッティシマなんぞ大嫌いだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

＜ロッキー山脈道すがら。＞

森林と、湖と、独特な横縞模様の峰々そして氷河。

6月20日バンクーバー着。食糧、装備等を3日間で調達し、ロッキー山脈目指して、ハイウエーを飛ばした。

この頃になると、バンクーバ到着当時とは格段に度胸もすわり、始めはボソ、ボソと喋っていた我々も、ブロークン・イングリッシュでまくしたてた。

第1回目の山行は、6月26日から10日間の予定で、レイク・オハラ周辺の山々を登ろうと入山する。

アルパインメドウ・キャンプ場は、周囲を岩壁に囲まれ、その中をリスが飛び回る静かなテント・サイトだ。入山の日、早々とテントを張り芝生の上に寝そべり、悠々たる大空を見上げる・・・・・・。

7月3日　Mt Victoria 登頂を終えて、アボットパスからの下り道、氷河上に立てておいた標式用の竹ザオを5本ほど持ってBCに向っていた。登って来る人に会う度に「魚釣りか？」「何匹釣れた？」などと聞かれた。最初の内は苦心して、「このバンブーは、フイッシング用のポールではなくて、我々が安全な登攀ルートを見失なわないために、グレイシャーに立てておく、レッド・フラッグである。」と説明しては見たが、通じたのやら、通じなかったのやら、定かではない。

会う人、会う人皆聞いて来るのにはまいった。終いには、面倒臭くなって、「釣か。？」「そうだとも。」「何匹釣れた？。」「全然釣れなかった。」と、なるべく簡単な会話で済ませるようにした。

めずらしいのか、すれ違う人皆が話しかけて来た。「いい天気だな。」「ヘイ・ボーイ何処へ登った？」「すばらしい国だろう。」「美しい国でしょう。」「昨日の夜は何処で泊った？。寒かったか？。寝袋は持っているのか？。」等々……。

多くの老若、男女が自分にあった形で、山登りや、自然を楽しんでいる。それだけに自分達の自然に誇りを持ち、大切にするんだろうと思う。

Robsonへ入山した時、僕達はRobsonの天候の悪い点についての事柄ばかりを耳にしていた。悪天候に備えて、17日分の食糧を担いで上った。我々チビッ子5人が背負う、ふくれあがったキスリング、どんなに奇っ怪に見えた事であろう。

BC予定地まで、半分の荷物を荷上げしての帰路。バーグ・レイクのほとりにテントを張っていたアメリカの若者は、僕達のボッカ姿を見ていたらしく、荷物をデポして来たので、空になったキスリングを見て曰く。「お前達はクレージーだ。登って行く時のあのパッキングの中はすべて昼食で、全部食べてしまった。」と言って来た。説明するのに30分程かかった。

やっと、北面（ケイン・ルート）からの登

頂成功しての下山途中、例によって行きかう人々が話しかけて来る。Ｒｏｂｓｏｎ頂上まで登ったと言うと、「おめでとう。」、「眺めは素晴らしかったか。」と祝福される。「そこに並べ、記念写真を撮ってやる。」と自分の事のように喜び、はしゃぐ家族連れもいた。最高の誉め言葉で称えられるのには戸惑った。しかし、誉められて悪い気のするはずがなく、苦労して登頂した喜びが増して来た。お国柄の違いとはいえ、〝誉める事〟と〝しかる事〟が鮮かである。

× × × × × × ×

レイク・オハラ周辺の山行中、アボット・パスの山小屋で会ったアメリカの若いカップルとは、その後ｊａｓｐｅｒの町でばったり会い、キャンプ場で夜遅くまで話をした。２人は、ポートランド大学の学生で、夏休みを利用して、カナディアン・ロッキーズの登山を楽しみ、アラスカまで行くそうだ。卒業後結婚するというこの２人は、我々に大麻を勧めた。

× × × × × × ×

話せば切りがない。どれも、これも、愉快な思い出となる。

スケールの大きな自然、そして大陸。地続きで国が変わる。若者達は、ザック付の背負子を肩に、道路に立ち、ヒッチ・ハイクでいとも簡単に国境を越える。地続きで、国が変わるのである。僕達にとっては大層な事も、彼等には何でもない当然の事となり、又その逆も有る。地球は広く、そして、狭い。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

＜山を下る時に……。＞

心に残る山は？。

１年の５月合宿の始めての山、鹿島槍。ＯＢさんに連れていってもらった、毛勝の大シリセード。ひっくり返って、散々な目で下山した夏山。あまりの寒さに震えあがり、下山したら絶対に上等のシュラフを買ってやろうと誓った冬山。春山合宿で、小日向コルから、ぼんやり見える細野の灯のわびしかった事。雨の笠ケ岳。錫杖岩登り。立山登山研修会。雨の夏山・剣岳。「石にかじりついても」と頑張った、朝日～西穂縦走。新雪の奥又から仰ぐ四峰。秋の剣・平蔵避難小屋生活。

冬の北尾根。春の杓子・樺平での沈殿。八方尾根でのイグルー生活。

はやくもリーダーとなっての、不帰東面。尾瀬。晴天に恵まれた夏山。荷上げ、偵察。冬の縦走、ラッセル、台湾坊主。春の日高。八甲田スキー。どれもなつかしい山行だ。

充実した山行であればある程、下山の時の事がすぐ頭に浮ぶ。どんな山行がｂｅｔｔｅｒであるかと言う事は、個人の好みによって異なる。だから人に自分の好みを押しつけるのはよくない。

いずれにせよ、下山の時、思わず山を振り返る。そんな山行を常に心掛けたい。

# 雑　記　帳

※大学部室内、及び松本・富山等登山基地の街の連絡所に置いてあるＮＯＴＥに、部員各々が好きな事柄を書き記したものの一部を抜粋しました。

× × × × ×

◎リーダー会を持って初めての合宿で戸惑いながらも、無事に終った事をうれしく思う。不備な点も多くあったが、これから一層全員協力して、よりよい山岳部にしようと思う。5月の岳沢は本当に素晴しかった。

（Ｓ４３・５　ａｎｉｍａｌ）

◎岳沢より下る。入山より３日の雨。沈澱で暮れた合宿。下山の日の快晴がせめてもの…。ツマラナイ下山。登りたかった!!（ｋｏｊｉ）

◎またまた松本へ来る。１週間の偵察、まずまずであった。沈澱の日が多く、動けた日は１日だけ。その日の天気がバツグンだったので救われた。

ここで飲むビールは、いつもバツグンである。　（ａｎｉｍａｌ１）

◎最後となるであろう春山合宿。ボッカのみの為ついて行く。今朝、猿倉より１人で下山。淋しい…。　（４４・３・７　赤田）

◎双子尾根を石原さんと登っただけで、今合宿帰らねばならないことになった。何といっても天候の悪さにはまいる。テント内での花札、全然強くならないままで帰らねばならなかったのは残念である。ボッカに来たような合宿であったが、昨日の猿倉台地の樹氷の美しさには、心引かれるものがある。（矢吹）

◎３年間の努力の結晶、今合宿は多くの教えを私に残した。その中の１つ。足元からナダレた事。３年目にして雪の恐怖を知る。

◎誓の言葉：槍沢を下ったが、あの下りはすげえもんだ。今後絶対に槍沢登らないぞ！

（知三）

◎１１月の山々は山麓では、木々の紅葉が深味を増しつつあり、山の峰々は純白の雪の帽子をかぶって、さぞ岩と雪のコントラストが素晴しい事と思い、又山に来た。しかし、雪は少なかったが、天気に恵まれ素晴しい景色を満喫する事ができた。

槍ケ岳の少し傾いた穂先を、キレット越しに見ながら奥穂へと進む稜線でのあの一時、奥穂から西穂への途中のジャンダルムのあの雄姿。どの思い出も新たな人生の一時であった。　（矢吹）

◎……もし天気回復したら北尾根に行く気だったが、雨相変らず強し。

涸沢へ行く事を断念する。雨の中、下山にかかる。山という対象までも人間は自己満足の対象にするものらしい。つくづく、そんな山が厭になった。

何をなさずともよい、唯無心に、山に総べ

てをつくして登り、素直に山にある〝人〟を感じたいものだ。山は決して他人の注意や、心をそそるために非ず。唯、己れ自身のためにある。山の感想を語るにはあまりにも自然は大きいと思う。己れの心のみに触れる美しさを忘れて上高地へと帰りを急ぐ人人人！感じるままに下山できないのか。

山にある時は里が恋しい。里に向う時、山は背を引き寄せる。大衆登山に追われる様に山岳部は必然的にバリエーション・ルートに向う。何故？。山岳部とは山を愛せる集団ではなかったのか？。だが今は、他の山岳部から上に見られることを愛する様になったのではないか？。

しかし、やはり山岳部員としてバリエーション・ルートに情熱は燃える。今は唯、理屈抜きで情熱を燃やそう。それは、なににもかかわらず、山を愛する心に通じるから……。

（S45・10・12　森）

◎蝶ケ岳から帰って、食った、食った。稜線を初めて歩いた。そんなもんじゃない。跳びはねてやった。冬の寒風が俺の耳にここちよかった。　（12・28　平田）

◎とうとう冬山合宿は終った。スキーを持っての登　はエラかったなあ。どうも後立は駄目だ。夜になると町の灯がチカチカ。すぐ里心がつく。（1969・12・26　山本）

◎又々穂高（涸沢）へ来たが、強雨の為に、何もすることなしに下山。わずか北穂沢ー北穂ー涸沢槍ｃｏｌ迄のＡｔｔａｃｋに成功したのみ。又、奥又白に何の足跡も残さずじまいだった。コンチクショウ。上高地のすいている時に、じっくり穂高を攻めたい。それにしても、聞きしに勝る涸沢の風だった。

この風の中に涸沢よりテントを徹収せず、頑張ったのは、甲南・竜大・立正の大学山岳部と、もう1パーティーだけだった。

次回こそ必勝を！！（S46・6　山本）

◎槍沢の下降中、遺体収容中の人々に出合った。山は美しい、そして魅力もタップリある。が、しかし……。

俺も山での生活にも慣れ、余裕も出てきたところだが、この辺で心機一転、初心に返って気持をひき締めて、より一層楽しい山行ができるよう努力したい。

遭難された2人の御冥福を祈ります。すべての岳人に栄光あれ！

（S46・6・25　松本）

◎最近になって（2年になって）、岩登りの練習もある程度自由で、気ままである。また、岩に対する情熱（岩に行こうとする意志）も高まった。しかし、1年の時考えていたパイオニアワークは心にとどまるところが少なくなってきた。はっきり言って、俺は今も、過去においても岩登りのおもしろさがはっきり解らない。しかし、とりとめもない〝動力〟がある。それは何か解らない。生活のはけ口なのかも知れない。

ただ、うまくなりたい。どうしてだか解らない。山が好きな奴は、自分がこの世で一番

素晴しい人だと思っているのかなあ……？。岩に登っている時、自分は特別な事をしていると思っているのかなあ……？。

まだ満足した（充分に）岩の快感を味わった事がない。快感を味わったと分った時点には、もうお終いなのかも……。

（S47・6・H）

◎今朝、大峰パーティーが出発。留守番の我々、天候の悪化せんことを切に願っているのだが、あいにく今日は晴。

この上は、パーティー各々のわら人形を作り、釘を打ちこむしかないだろう。彼らに多くの修練を与えたまえ。

（S47・6　？）

◎皆が急に授業に出始めたと思ったら、前期試験は目前に迫っていた。

もうすぐ眠そうな顔をした劣等生達が、トボトボと部室からカンニングペーパーをしのばせて、グランドを横切り、部室での会話は決って、「出来たか……？」「アカン」の季節がやってくる。

もう少し成績のましなのが、入って来てもよさそうなものである。もう少しと記したのは、若干は現在にもいる、という意味であり、ここではあえて名前は記すまい。それは、昨年度の後期試験中もそうであったが、今日も試験中、ずっとアルバイトを行なうという。大胆不敵なる余裕を示し、なおかつ優秀（？）なる成績を残すという、信じられないような人物の事である。

（S47・9　自惚れ屋）

◎秋山を終えて、心残りな事及び、腹立たしい事。　・・・アア、ジャコビニ流星群！。

我々4名は、朝日小屋の前でまった。寒さに震えながら、完全装備で待った。双眼鏡を片手に持った。トリスを片手に持った。おかげで、縦走分のアルコールは全部飲みほした。しかし、全く酒はまわらなかった。満天の星であった。しかし何も流れはしなかった。

宇宙は神秘である。

（S47・11）

◎己自身山を求めて行く以上、余裕をもって山を愛していたいものだ。余裕（？）、全てを抱含する余裕だ。クラブ員、又各自の心を思い、家を、学問を、そして愛しき君を思い山を見たい！。

山は難かしい。自から独りだけ山に浸り切り楽しみたいけれど、それも許されない程余裕がないみたいだ。

噫！人は悶々として山を棄てて行く。そんな姿を部員の中に見る。たまらない程の怪しさを感じる。独り上がりの山に対する愛情は簡単に人は理解してくれまい。だが、山を愛せる人間を失しなって行くのは淋しくてしかたがない。山は自からのものであるだけに・・・・・！。　（S47・11　M・K）

# 記　録

八ツ峰・六峯Dフェース登攀

# 目　　次

その他の山行記録 ---------- 119
甲南山岳会名簿 ---------- 132
甲南大学山岳部部員名簿 ---------- 133
山岳部部歌　（山の歌） ---------- 134
（雪の歌） ---------- 134
編集後期 ---------- 135

## その他の山行記録

◎　６８年度夏山合宿（7月15日〜8月15日）

目的：全部員の雪上訓練、基礎体力の養成と上級部員のリーダーシップ、岩登り技術等の向上。

場所：前半；大タテガビン、中半；剣（二股）後半；笠ケ岳と唐松、二隊に別れ縦走。

＜前半＞　７月１５日　大阪発　八島ＯＢ、木村３、北川３。

７月１６日（曇）　黒四ダム９：１０内蔵之助出合ＢＣ１１：００　一尾根末端まで偵察、全員。

７月１７日（雨）　沈澱。

７月１８日（雨後晴）　昼より天気回復。大タテガビン沢の偵察に、木村、北川で。第１の滝の上部まで行き引き返す。

７月１９日（晴）
７月２０日（晴）　大タテガビン第１尾根アタック。木村、北川。別記

７月２１日（晴）　沈澱。

７月２２日（晴）　後発隊と合うため、ＢＣを二股にかえる。ＢＣ６：５５ハシゴ段乗越１０：２０二股１２：２０

＜中半＞　ＯＢ横山、現役：赤田４、森４、北川３、木村３、伊藤３、矢吹３、高橋２、南野１。

７月２３日（曇）　後発隊を向えに行く。ＢＣ３：３０室堂８：００ＢＣ１９：３０

７月２４日（晴）　沈澱。森、北川で三ノ沢をのぞきに行く。

７月２５日（晴後ガス）　○六峰Ｂフェース：横山、伊藤、木村　○雪上訓練（三ノ窓）：北川以下４名。森下山。

７月２６日（快晴）　○剣尾根上部：横山、木村、○チンネ左稜線：赤田、北川　○雪上訓練（長次郎）：伊藤以下３名。

７月２７日（晴）　○チンネ日嶺ルート〜ｇチムニーｃｄクラック：北川、木村　○池の平散歩：横山以下５名。

７月２８日　沈澱。

７月２９日　沈澱。横山、赤田下山。

７月３０日　沈澱。

７月３１日　沈澱。八ッ峰、三ノ窓と出発はしたけれども、雨にて引き返す。

８月１日（曇）　八ツ峰縦走：全員。ＢＣ６：４５、２・３のコル１０：００チンネ13:06三ノ窓１３：４０ＢＣ１５：１０。

８月２日（晴）　撤収。ＢＣ９：１５剣沢小屋１３：２０雷鳥１５：２６。

＜後半＞　Ａ隊　薬師岳ー黒部五郎ー双六ー笠ケ岳。北川、矢吹

８月３日（ガス時々晴）　定着用装備を富山におろす。

８月４日（晴）　雷鳥５：３５五色ケ原１０：００〜１１：００スゴ乗越１５：５０〜１６：２０スゴテント地１７：１５。

８月５日（ガス後晴）　テント地６：００薬師頂上９：００〜９：２０太郎テント地11:00。

８月６日（晴）　テント地５：３５上の岳乗越７：３０黒部五郎頂上９：３０三俣頂上１３：００双六テント地１４：４５。

８月７日（ガス）　槍頂上往復。テント地８：０５槍頂上１１：３０テント地１４：３０。

８月８日（ガス後晴）　テント地６：０５弓折頂上６：５５〜７：０５秩父平８：２５笠の小屋１０：３０〜１１：１０錫杖岩小屋14：40槍見温泉１５：５０高山１８：４５

ＯＢ隊：伊藤、木村、高橋、南野

室堂ー薬師ー太郎ー三俣ー烏帽子ー唐松ー小桜ケ原ー蓮華温泉、の予定であったが故障者を２名出し、太郎より有峰に８月６日下山。

……

◎　秋山：新穂高〜槍・常念・蝶ケ岳縦走（１０月９日〜１５日）　Ｌ北川３、高橋２、南野１。

１０月９日　全員で大阪発

１０月１０日（雨）　新穂高１３：００白出沢出合１４：２０滝谷出合１５：４５槍平小屋１６：５５。

１０月１１日（快晴）　槍平５：３０飛騨乗越９：４０西岳１３：２０大天井岳１７：２０。

１０月１２日（晴）　大天井７：００常念乗越８：５０〜９：３０常念岳頂上１０：３０〜１１：１０蝶ケ岳ヒュッテ１５：００。

１０月１３日（曇後晴）　蝶ケ岳６：３０大滝小屋７：３０徳本峠１２：３０イワナ留小屋１４：００。

１０月１４日（曇一時雨）　イワナ留小屋１０：４５島々１５：２０。

全員よく頑張った。

……

◎　６９年５月新人合宿・剣岳　（６９年４月２７日〜５月４日）

ＣＬ木村４、ＳＬ高橋３、矢吹４、大辻２、南野２、井上１、三木１、吉田１、森１、山本１、ＯＢ柏、浪川、赤田

４月２７日　２２：１７大阪発

４月２８日（晴）　天狗平１０：５０御前小屋１５：５０剣山荘１７：００。

４月２９日（晴）　６時起床、午前中雪上訓練、午後は晴天沈澱。

４月３０日（雨・風強し）　沈澱。

５月１日（晴）　６時起床、午前中雪上訓練、午後晴天沈澱。

５月２日（晴）　４：３０起床、柏、浪川両ＯＢと高橋の３名は八ッ峰縦走。他は雄山へ遠足。

５月３日（晴）　浪川、大辻、源治郎尾根縦走。１年生は長次郎より本峰アタック。

ＢＣ５：３５長次郎出合５：５５池ノ谷乗越８：０５剣本峰９：０５〜１０：００ＢＣ１２：３５。

５月４日（晴）　浪川、大辻、高橋、南野、４名は早月尾根を下山。他は雷鳥を下る。富山で合流の後解散。

ＢＣ７：００剣御前８：４０天狗平１０：３０

（井上）

……

◎　白馬岳　（６９年６月７日〜８日）

吉田１、山本１

６月７日（曇後雪）　東急山荘発８：５０栂ノ森山荘１１：３０神ノ田圃１２：１５。

６月８日（快晴）　神ノ田圃６：３０天狗原８：３５〜９：１５神ノ田圃１１：３０〜１３：３０東急山荘（１５：１０）。

……

◎ 涸沢 （６９年6月１６日〜１９日）

ＯＢ雨宮、横山、現役南野２、井上１、山本１、

6月１６日（曇） 上高地８：１５横尾１０：２０涸沢１６：００。

6月１７日（曇後雪後雨） 涸沢発５：４０5.6のコル６：３０前穂高岳９：１０奥穂高岳１０：５５奥穂小屋１１：１５〜１１：４０涸沢１２：００ 横山ＯＢ入山。

6月１８日（雨強し） 停滞。雨宮、南野下山。

6月１９日（曇時々雪） 涸沢発５：２５南稜取付き６：３５北穂高岳８：００〜８：３０（以下タイム不明）涸沢槍のコル一涸沢一横尾一上高地。

……

◎ ６９年夏山合宿 於剣岳 （６９年7月１２日〜２０日） Ｌ木村4、ＳＬ高橋3、杉原3、大辻2、南野2、井上1、三木1、森1、山本1、吉田1

7月１２日（曇） 室堂１０：３０剣御前小屋１３：１５〜１３：３５三田平１４：００。

7月１３日（晴） 三田平６：１５真砂沢８：００二股ＢＣ９：００。

7月１４日（晴） 三ノ窓雪渓にて全員で雪上訓練。井上、石突で足をつき南野と一緒にＢＣへ。残りは、三ノ窓のコル迄行く。

ＢＣ７：１５雪上訓練７：５０〜１０：３０三窓１１：５５〜１２：３０ＢＣ１３：２０。

7月１５日（曇） 木村、南野、大辻チンネアタック。ケガの井上はテント・キーパー。残りは、長次郎雪渓にて雪上訓練。ＢＣ７：０５真砂沢７：５５雪上訓練９：００〜１０：１５ＢＣ１１：４０。

7月１６日（晴） 井上を残し、全員で大窓雪渓をつめて、池ノ平山へ行く。池ノ平小屋から下山中、森捻挫。ＢＣ６：００池ノ平小屋７：２０大窓９：００〜９：３０池ノ平山13:05池ノ平小屋１３：５０ＢＣ１５：００。

7月１７日（晴） 高橋、大辻、南野チンネアタック。井上、森を残して全員三ノ窓雪渓にて雪上訓練。ＢＣ６：２５雪上訓練７：００〜９：１５ＢＣ１０：３５。

7月１８日（快晴） 木村、杉原三ノ沢より、マイナーピークアタック。残りは停滞。 ９：１０頃木村三ノ沢にて事故。平井ＯＢ入山。非常に助かる。１８：００真砂沢小屋へ到着、治療。２０：３０室堂へ向け出発。３：３０室堂小屋着。

7月１９日（曇） 石原ＯＢ、伊藤4、北川4入山。１２：４０のバスにて、木村、石原、杉原、吉田富山へ出発。残りは、ＢＣ撤収へ向う。室堂１３：１５剣御前小屋１４：５０真砂沢１５：５５〜１６：２０ＢＣ１６：５５。

7月２０日（晴） ＢＣ６：００室堂16:30

……

◎ 北岳 （６９年8月１５日〜１７日）

ＯＢ雨宮、村上、浪川、現役井上１、山本１

8月１５日（晴） 広河原一扇沢出合一前白根沢出合。

8月１６日（晴） 前白根沢出合一北岳一大樺沢、草つき尾根より。

後、井上、登攀具をとりに広河原迄下る。

8月１７日（晴） 浪川、井上第１尾根アタッ

ク。大樺沢ー広河原

……

◎槍ケ岳・西鎌尾根より　（６９年１０月１０日～１３日）　Ｌ南野２、矢吹４、井上１、山本１

１０月１０日（曇）　新穂高１１：３０ワサビ平１３：２０出合１４：２０。

１０月１１日（晴後曇）　出合６：００鏡平８：４５～９：０５双六小屋１１：０５～１２：００硫黄乗越１３：２０。

１０月１２日（晴）　硫黄乗越６：００千丈乗越７：５０槍ノ肩９：００～９：５０槍山頂１０：００～１０：１０槍ノ肩１０：２０～１１：００一ノ俣小屋１３：５５横尾14：40

１０月１３日（快晴）　横尾８：３０上高地１０：４０

……

◎　大天井岳・中房温泉より　（７０年１月１日～４日）　ＯＢ雨宮、鈴木、国分、石原、現役北川４、南野２、井上１、山本１

１月１日（曇後晴）　発電所ー中房温泉

１月２日（晴）　中房温泉ー合戦小屋ー燕山荘冬期小屋ー燕岳ー小屋

北川、南野は、１日一気に小屋迄入っており、２日、石原先に到着する。小屋で３名、我々が来るのを待っていた。

１月３日（雪）　小屋ー大天井岳ー小屋ー中房温泉。

１月４日（晴）　中房温泉ー発電所。

……

◎　雄山・２６８１尾根より　（７０年６月３日～５日）　Ｌ山本２、平井１、長谷川1

６月３日（曇）　黒四９：１０新丸山１０：35～１０：５０　２２００ｍ付近１１：５５。

６月４日（晴後曇時々雪）　２２００ｍ付近６：３０　２６８１ｍ峰９：５０～１０：２５雄山１２：２０富士の折立１３：０５別山乗越１４：４０。

６月５日（曇時々雪）　別山乗越１３：２５地獄谷１４：３０室堂１４：５５。

……

◎　剣岳西面　（７０年６月２１日～２２日）　ＯＢ雨宮、浪川、現役井上２、山本２、平井１

６月２１日（曇後雨）　馬場島ータカのスワリのゴルジューー１３００ｍ付近ー馬場島

高巻き道を、赤谷尾根の道と間違い１３００ｍ付近迄、雨の中を登る。

６月２２日（曇）　馬場島発７時ー池ノ谷出合ー馬場島　雨宮さん休養。

……

◎　７０年夏山定着合宿・剣岳東面　（７０年７月１４～２９日）　Ｌ大辻３、ＳＬ南野３、井上２、森２、山本２、平井１、松本１、松田１。

７月１４日（雨強し）　風雨強く、雨がやんでも霧で１０ｍ位しか視界がない。雷鳥沢に幕営。

７月１５日（雨後曇）　停滞。午後２時頃より晴れ間見えだす。

７月１６日（曇後雨強し）　行動を起こすが、別山乗越へ着く頃より雨。真砂迄とする。

雷鳥沢６：００別山乗越８：００～８：５５真

砂沢１０：４０。

７月１７日（雨強し）　今日も又雨、停滞。

７月１８日（雨後曇）　朝、又雨が降っている。９時頃より晴れ間が見え出したので、二股へ向けて出発。三ノ沢の出合の下で、松本頭より１m程度落ちる。外傷はないが、大辻、松本を連れて下山。残りは二股迄入る。

真砂沢１２：００二股１３：００真砂沢１４：２０～１５：１０二股１６：００。

７月１９日（雨後曇）　又雨、停滞。

７月２０日（晴）　三ノ窓雪　にて雪上訓練。後三ノ窓迄上る。大辻、松本を大阪へ帰して帰幕。

７月２１日（曇後晴）　朝、雨が降っており停滞。７月１８日より、去年の豪雨で二股は幕営禁止になっており、三田平へＢＣを移す。

二股１２：１５真砂沢１４：００三田平１７：３０。

７月２２日（晴）　大辻、井上、松田八ツ峰アタック。大辻、松田5.6のコルより帰幕。井上別山尾根より。残り４名源治郎尾根アタック。

三田平５：５０二峰コル９：３５～１０：２５剣岳１１：００～１１：４０ＢＣ１４：５５。

７月２３日（快晴）　大辻、２年３名、一服剣下で雪上訓練。南野、１年２名、別山下で雪上訓練。

７月２４日（快晴）　大辻、井上、六　Ａフェースアタック。森、山本八ツ峰アタックするが取り付き間違い、三ノ沢上部登り一峰へ出る。三ノ沢の上部は面白い。5.6のコルより下る。

ＢＣ４：５０二峰６：５５　5.6のコル１２：２０ＢＣ１４：００。

７月２５日（晴）　大辻、森チンネ中央チムニー。井上、山本六峰Ｃフェースより八ツ峰上半縦走。

ＢＣ４：１５Ｃフェース６：１５～７：４５本峰１２：１５～１２：４５ＢＣ１５：１５。

７月２６日（晴）　大辻、１年２名雪上訓練。南野、２年３名停滞。

７月２７日（快晴）　下痢の井上、山本残して全員八ツ峰上半縦走。ニードル手前の雪渓で事故目撃。全員で救助に当る。午後７時頃スノーボートを剣沢小屋迄引き上げる。

７月２８日（晴後雷雨）　昨日の救助で今日は停滞。夜、駒沢大学と撤収合同コンパをする。

７月２９日（快晴）　撤収。南アルプスへ行く大辻、森、平井を見送り、雷鳥沢に幕営。

三田平４：４５雷鳥平６：０５。

……

◎　７０年夏山縦走　（立山から薬師岳迄・７０年７月３０日～８月３日）　Ｌ南野３、井上２、山本２、松田１

７月３０日（快晴、夜雨）　昨晩、松田吐く。熱あり、停滞。

７月３１日（曇）　１年最初から調子悪し。一時降雨有り。雷鳥平６：０５五色ケ原10：30

８月１日（曇時々雨）　五色ケ原６：０５スゴ乗越９：１５～９：４０間山１１：００。

８月２日（雨）　停滞。

８月３日（曇）　ＯＢカンサン、甲南高校山岳部に会う。間山５：４０薬師岳７：３５～７：５０太郎兵衛平８：５０～１０：１５折立１２

：４０〜１３：００有峰湖１４：４５。

……

◎　奥又白　（７０年１０月８日〜１２日）

Ｌ山本２、吉田２、森２

１０月８日（快晴）　上高地１０：５０松高ルンゼ取付き１４：１０。

１０月９日（快晴）　取付き６：４５奥又白池１１：３５、１５：３０森入山。

１０月１０日（雨）　停滞。

１０月１１日（雨後曇）　山本、吉田下山。奥又白９：２５取付き１０：３０〜１１：００上高地１４：１５。

１０月１２日（雨後曇）　森下山。

……

◎　涸沢　（７１年６月３日〜６日）

Ｌ山本３、下山３、平井２、朝倉１、早川１、村田１

６月３日（曇時々雨）　上高地７：２５横尾１０：４０〜１０：５５横尾本谷出合１３:15涸沢着１５：００。

６月４日（雨・風強し）　停滞。フライを破られ、１時間毎にテントの張りなおしをする。中で、ツエルトをかぶり、終日ゴロゴロしている。ほとんどのテントは、２パーティー程残し、小屋へ逃げ込んでいる。

６月５日（晴）　涸沢７：３５北穂高岳１０：００涸沢槍のコル１１：３０涸沢１１：５５。

６月６日（雨）　撤収、下山。

……

◎　７１年夏山定着合宿：剣岳別山平（７月１３日〜８月１日）

Ｌ井上３、森３、山本３、大辻４、南野４、下山３、平井２、松本２、朝倉１、中沢１、中野１、早川１、村田１、ＯＢ伊藤

７月１３日（曇）　縦走用のデポに手間どる。長い定着なので結構の重荷。剣沢小屋前にＢＣ設営。

室堂１０：５０剣御前小屋１５：２０〜１６：００剣沢１６：４０。

７月１４日（晴後雨）　剣沢上部で全員で雪上訓練。８時３０分より１２時迄。ガスがかかり寒い。ＢＣへ戻った頃より雨。

７月１５日（ガス時々雨）　停滞。

７月１６日（雨時々強し）　今日も停滞。関学パーティー入山。真砂沢迄。関大の松尾氏がくる。

７月１７日（ガス、午後より雨）　今日も天気がよくない。体がなまるので、長次郎雪渓で全員で雪上訓練。午後又雨が降り出す。厭になる。

７月１８日（ガス）　アタックにも出れないので、剣沢小屋の下で全員で雪上訓練。

７月１９日（ガス時々雨）　今日もまた天気が悪い。停滞。

７月２０日（快晴）　久し振りの青空に全員の顔もほころぶ。岩場は、アタック出来る状態ではないだろうの判断のもと、剣沢の上部で雪上訓練。大辻入山。

７月２１日（快晴　１６時頃より雨）　井上、大辻、平井、朝倉、中野、伊藤ＯＢは長次郎谷側から源次郎尾根。残りは、1.2峰間ルンゼより、八ツ峰縦走。両パーティー共に別山尾根よりＢＣへ。本峰あたりでまた雨が降りだし厭な

気分。

7月22日（雨とガス）　停滞。

7月23日（雨とガス）　停滞。

7月24日（雨とガス）　停滞。

7月25日（曇時々雨）　停滞。

7月26日（雨強し）　今日も雨。停滞。富山地方に集中豪雨注意報発令。明日も停滞に決める。

7月27日（快晴後ガス）　5時頃より雨強し。今日停滞と決めていたのに、朝起きると快晴なのでびっくりする。山本、井上、森、下山、平井、松本で、今からアタックできそうにもないので、三ノ窓迄偵察にいく。久し振りに動いたので、まったく調子でず。一年は伊藤ＯＢ、南野と共に奥大日から雄山、雷鳥沢のコース。パーティーに取り残された２人の女性ハイカーを雨の中で助ける。全員ビショ濡れ。又雨が降り出し、ゆううつな気分になる。

7月28日（ガス時々雨）　又雨。停滞。

7月29日（晴時々ガス）　井上、平井、チンネ左稜線上・下半。森、松本、チンネ左下カンテより左方カンテ。山本、下山、六峰Ｄフェース。一年は、伊藤ＯＢ、南野と共に、岩場見物。一年の声援のもと、Ｄフェースを登る。森、左下カンテの取付きを間違い、懸垂下降中ピンがぬけ、足にヒビ。一年をＢＣへかえし、残り三ノ窓へ集結。池ノ谷ガリーを全員でかつぎ上げ、乗越迄来ると、井上がスノー・ボートを持って到着。長次郎の出合より、一年も加わり、ＢＣ迄引っぱり上げる。ＢＣ着２３時４５分。すぐ医者の診察を受けるが、大した事はなさそう。

7月30日（快晴後ガス）　森は緊急を要しないし、昨日の疲れもあるので停滞。

7月31日（快晴）　井上、松本をテントキーパーに残し、全員で森を室堂迄降す。大阪迄は伊藤ＯＢ、南野、下山にまかせ、山本は富山迄。

8月1日（快晴）　雨ばかりのＢＣを後に、縦走に向け下山。　（山本　記）

……

◎　71年夏山縦走合宿・剣岳～燕岳　（8月2日～12日）

定着中のアクシデントの為、南アルプス全山縦走を割愛し、北アルプス全山、二パーティーとする。この縦走も、二人のケガ人を出し、又二つの台風におびやかされ、燕岳迄行くことができたが、満足すべきものではなかった。

ＣＬ山本3、ＳＬ平井2、中沢1、早川1、

8月2日（快晴）　雷鳥沢6：20一浄土山8：15五色ケ原11：40。

8月3日（晴後曇）　五色ケ原5：50越中沢岳8：45スゴ乗越11：05～11：45間山14：10。

8月4日（晴）　間山6：00薬師岳9：30太郎兵衛平14：00　薬師の下りで早川捻挫。

8月5日（晴時々雨・風強し）　停滞。台風19号のためポール曲げられ、テントを移す。

8月6日（曇・風強し）　停滞。

8月7日（ガス）　太郎兵衛平5：30上ノ岳8：20中俣乗越10：35～11：00黒部五郎カール14：00。

8月8日（晴時々ガス）　黒部五郎カール5：25三俣小屋10：15～11：30双六池

１４：１０　三俣の診療所で、早川の足と、中沢の眼を見てもらう。中沢眼が見えにくそう。

８月９日（曇）　中沢の眼の状態が悪いので、停滞。双六小屋の石松さんに世話になる。

８月１０日（快晴）　双六池５：２５千丈乗越８：４０槍ノ肩９：５０〜１０：０５西岳ヒュッテ１４：３０。

８月１１日（晴）　西岳テント場５：４０大天井ヒュッテ７：４０燕山荘１１：００。

８月１２日（ガス）　又台風が接近中。全員で燕岳迄行き、下山。頂上ではガスのため何も見えず。燕山荘７：０５燕岳７：３０〜７：５０燕山荘８：０５〜９：２０中房温泉１２：１５。

……

◎　穂高山行　（７１年８月２６日〜９月３日）

○　奥又白（８月２６日〜２９日）

柏、水渡（以上ＯＢ）、大沼、小西（以上関学ＯＢ）、山本３、下山３

８月２６日（曇）　下山、電車に乗遅れたため、柏、水渡、山本の三名で松高ルンゼ取付き迄歩荷。夜、関学ＯＢ大沼、小西両氏入山。テントサイトを酒のカラビンでうめる。

８月２７日（晴）　ＯＢ４名が歩荷して、奥又へ入る。山本は、下山を探しに上高地迄行くが会えず。（後でわかったことだが、山本が樹林帯を歩いている時、下山は河原を歩いており、入れ違いになる）　徳沢で酒を買い、奥又の池迄行く。

８月２８日（快晴）　ＯＢ諸氏はアタック。中畠新道で下山に会い二人で歩荷。

奥又ノ池８：００取付き８：４０奥又ノ池１４：１５。

８月２９日（晴）　山本、下山は北壁よりＡフェース。テントへ帰ると雨。そのまま撤収。

山本、平井を待つ為、全員と別かれ徳沢園泊。

奥又ノ池７：００取付７：５０〜８：４５前穂１０：３０〜１０：５５ＢＣ１１：５０〜１５：２０徳沢１７：４０。

○　涸沢（８月３０日〜９月３日）

Ｌ山本３、平井２

８月３０日（雨）　徳沢で待っていると、平井岳連パーティーと一緒に入ってくる。岳連パーティーはそのまま涸沢へ。我々は徳沢泊。

８月３１日（雨）　徳沢１０：００涸沢１４：２５。

９月１日（曇時々雨）　停滞。

９月２日（晴）　滝谷四尾根アタック。取付きを探すのに苦労し、１時間程ロス。縦走路では１パーティーに会うだけで、最高だった。

涸沢４：４０北穂のコル６：３５取付き７：３０〜７：５５終了点１２：２０南稜テラス１４：１０涸沢１５：００。

９月３日（雨）　奥又白四峰を登る予定だったが、雨の為岳連パーティーと別れ、雨の中下山。涸沢１０：２５横尾１２：１０〜１２：４５上高地１５：１５。

……

◎　奥又白・冬山偵察　（７１年１０月１０日〜１６日）　浪川ＯＢ、Ｌ山本３、井上３、平井２、松本２

１０月１０日（曇時々雨）　浪川、井上、松本３名は、屏風岩を登るため１日早く入山したが、

天候悪く、今回はあきらめる。

１０月１１日（曇後雨）　上高地９：２０徳沢１１：４０～１２：４０取付き１４：３０。山本、平井入山。明神で下山する浪川に会う。徳沢で井上、松本待っており、松高ルンゼ取付き迄行く。

１０月１２日（曇）　取付き８：０５池１１：００～１２：４０　5.6のコル１３：５０～１４：００池１５：３０。

１０月１３日（曇・ガス）　ＢＣ６：１０　5.6のコル７：０５前穂９：５０～１０：１０　ＢＣ１０：５５　5.6のコルより上半偵察し、Ａ沢より池へ。

１０月１４日（雪）　停滞。終日雪で、積雪３０㎝程。神大パーティーが入山しており、歌合戦をする。

１０月１５日（快晴）　慶応尾根より、5.6のコル迄、下半分を偵察。昨日降った雪が、なじんでおらず、厭な感じ。ＢＣ６：１０松高ルンゼ出合７：２０Ｐ８１０：１０～１０：４０Ｐ６１２：５５～１３：０５ＢＣ１４：０５。

１０月１６日（晴）　ＢＣ８：２０徳沢１１：００～１１：３０上高地１３：００。（山本）

……

◎　冬山荷上げ　（７１年１１月９日～１３日）

○Ｐ８荷上げパーティー：Ｌ山本３、朝倉１、中沢１、早川１、村田１、西川１、南條１。

○涸沢パーティー：Ｌ井上３、平井２、松本２。

１１月９日（晴）　涸沢荷上げパーティーと上高地で別れ、明神養漁場冬期小屋にデポしながらいく。上高地９：００養漁場１０：１５～１０：５５松高ルンゼ取付き１４：４０。

１１月１０日（晴）　女子２名は、上高地迄遊びながら下山。Ｐ８迄荷上げ。涸沢隊は5.6迄荷上げ。取付き６：３０Ｐ８１１：００～１１：３０ＢＣ１３：００。

１１月１１日（快晴）　天気がいいので、一年を奥又の池迄連れて行く。ワッパをはかす。奥又の池で、涸沢隊がＰ５上にいるのが見える。

１１月１２日（快晴）　涸沢隊は昨日徳沢迄下っていた。明神で、涸沢で使ったテントをデポして、徳本峠を越える。ＢＣ８：３０徳沢９：４０～１１：００白沢出合１１：３５～１２：０５徳本峠１３：４５岩魚留小屋１５：１０。

１１月１３日（快晴）　岩魚留小屋７：１０島々駅１０：４０。

……

◎　６月の雨飾山　（７２年５月３１日～６月２日）　Ｌ平井３、中沢２、西村１

５月３１日（晴）　中土駅より、バスの時間が遅いため、シブシブタクシーに乗る。小谷温泉で道を聞き、自動車道を歩き始める。やがて目前に雨飾の美しい姿が現れる。

それに向ってのどかな山道を歩いて行く。おりしも新緑の頃で、すがすがしい。やがて川の音が近くなり、山のすそ野近くで道を河原のほうへ下る。湿地帯に出ると、水芭蕉が左右に咲き乱れていて美しかった。

しばらく行くと、乾いた河原に出て、雨飾登山口の表示を見、今日はここでツエルトを張る。

＜タイム＞中土発７：００小谷温泉７：３５雨飾登山口９：４５。

６月１日（晴）　登山口からの道は昨日と変って急になる。これから、しばらくは雨飾のピークを見る事はできない。しかし、道の両側には岩鏡が咲きほこり、人があまり踏み込まない山の良さを表してくれる。

６月とはいえまだ所々に雪渓が残っており、トレースをたよりに道を進んだ。急に視界が開け、雨飾ピークが現われる。下には雪　、上にはスラブ帯の岩場が見渡せ、しばらく見とれていた。このスラブの上部がフトンビシの岩場である。

雪渓を渡り、坂を上って行くと途中で野生にんにくの群生を発見、我々はそこを“にんにく坂”と名命する。

さらに上ると左手に雨飾を望む丘に出る。そこにザックを置き昼食。その後、雨飾ピークにてしばらく景色を楽しんだ後、ザックの置き場に帰り、ツエルトを張る。

全く人に会わない山行きである。

＜タイム＞登山口７：４５ササケ平ビバークサイト１１：００雨飾頂上１２：０５ビバークサイト１２：１５。

６月２日（晴）　最後の春眠？を楽しんだため出発が遅れる。かなり長い雪渓が２ケ所有ったが、そこをグリーセードで飛ばす。途中雪渓が切れていたり、滝が出てきたりしたが難なく切り抜ける。

しばらく行くと梶山新湯から雨飾への本道が現れた。我々は雪渓を下り過ぎ、尾根道を歩くところ、もう一つ下の谷を下った事になる。

＜タイム＞ササケ平９：３０梶山新湯12：15梶山部落１３：３０山口バス停１４：１０。

（記　中沢）

◎　大峰　（６月１０日～１２日）

Ｌ中野２、山本４、朝倉２、松下１、福田１

６月１０日（快晴）　上多古発１１：４０行人滝出合１３：２０矢納滝出合１３：４５

朝は少し早い目の集合としたが、全員時間通り７時３０分に阿部野橋へ集った。本日の行動は短い予定だったが道を誤ってしまったので、結果としてはこれが幸いしたようである。

大和上市の駅より坂を少し下ったバス停より上多古へ。天気は申し分なく、吉野川沿いの道はすばらしい眺めであった。上多古で降り、前の橋を渡り、流れを遡る。道は普通の車が通れる。

しばらく行って昼食。実に簡単に釣れる。ゆるやかな登りを、左岸に見え穏れする勝負塚の岩峰を見ながら登る。行人滝から、矢納滝まではいい道だが、これもここでパッタリと消えている。矢納滝に向って小道を登る。右に折れ、右岸の小道を行く。左へ分れる阿古滝道の小道を過ぎ（ここには、天理大学ＷＶの標識あり）川の方へ降りてゆく。

まもなく小川みたいな流れに出る。ここには木を組み合せた５～６ｍの橋がある。（この上には２本のレールが渡してある妙なもの）　この手前で川原へ降り、少し行くとキャンプサイトに着く。（ブナ又）　なお、我々はここを渡って、まだか、まだかと思いつつ登ってしまって（多分、太尾を）上からここを発見し、しまったと思い、戻った次第。

６月１１日（快晴）　ブナ股出合発６：３０ホウキギノ滝１１：１５～１１：５０鐘掛岩着３：１０山上ケ岳キャンプ地４：２０。

ブナ股のキャンプ地より地下足袋にワラジを着けて上流へと出発。水量はまずまず。
我々のほとんどがワラジは初めての者や、長い期間使ってない者ばかり。途中多いに時間を取られてしまった。この谷には倒木が多く前進に多いに役立った。滝も１ケ所を除いて小さなのや、スベリ台状のものばかりで、横を登ったり、小さく巻いたり。
暑い日だったので気持よく、飛び石伝いや、足首あたりまで水に入って遡行できた。
４時間程行った所に３０ｍ位の二段になっている滝があり、段になっている所をザイルを張って登る。この上で川幅は少し狭くなり、しばらく行くと全くのドン詰り。
正面に滝の跡、その右に３０ｍ位の垂直の滝、右手は一面の壁、左手は木のおい繁る斜面であった。ここで昼食。
いよいよブッシュこぎの覚悟で取付く。ほんの少しで、合宿谷林道であろう細い道へと出る。偵察し、右へ少し行くとさっきの滝の続きと思われる狭い小川のような流れに出る。山上ケ岳への道はなく、この小川を詰めることにして、又又遡行。全くの完全遡行である。１時間ばかり行くと左手にかなり長く、大きな土砂崩れの跡があった。いずれは尾根に登らねばならず、ブッシュこぎの登りでは、時間的にも、体力的にも難しいのでこの斜面を登る。かなり急でよく崩れ、おまけに地下足袋で、かなり難しかった。このあたりは、地図、コンパス、それに回りの地形を始終見ていなければならなかった。
鐘掛岩へと続くらしい尾根に着き、小道を見た時は、全くホッとした。しばらく行くと鐘掛けの岩が、シャクナゲの花を鏤めて続いていた。
ワラジに地下足袋なので、登山靴とは要領が違い、緊張して行く。３０分程で行者の鈴の音や、声が聞え、整備された道へと出る。
時間もかなり遅く、皆疲れているので、稲村ケ岳へ下る道の手前のキャンプ地で、第２泊目とした。
６月１２日（雨）　山上ケ岳ー小稲村ー山上辻ー法カ峠ー洞川＜タイム不明＞
昨晩からの風雨は朝になっても変らず、ひどい雨であったが、視界は比較的によかったので急ぎ下山。小稲村まで、縦走路ではっきりした道であったが稲村小屋（山上辻）でお茶を貰い一息入れた。
雨は少し弱くなったが、まだやまない。稲村小屋から一路法カ峠へと急いだ。予定よりも早く法カ峠に到着し、ここで小休止。雨はまだ降っていたが、空は明るかった。
体が冷えないうちに洞川に向けて出発。途中、何事もなく、午前中に洞川に着く。　（中野）

……

◎　奥又白　（６月１３日～１７日）
森４、Ｌ松本３、田口２、早川２
６月１３日（曇）　上高地出発８：００奥又白池到着１４：３０　木村小屋での朝食もそこそこに、いまにも泣きだしそうな空模様の中、黙々と奥又白池を目指す。予想以上の残雪である。
夜は例によって入山コンパ。
６月１４日（快晴）　ＢＣ出発６：２０北尾根5.6コル７：３５　3.4コル８：５０　３峰ピ

ーク９：３５前穂高岳ピーク９：４５〜１１：３０ＢＣ帰着１２：３０　昨日のボッカ疲れで皆グッスリ寝る。奥又は、甲南のテント以外何もない。早く四峰へ行きたいと、はやる心を抑え、昨晩の約束通り、北尾根縦走へ向う。本谷をトラバースしながら、四峰東壁をカメラにおさめ、各ルートを目で追う。5.6のコルまで、アイゼンを効かせて快調なピッチで進む。冬山のエピソードを思い出しつつ、３峰チムニーを越え、前穂ピークに立つ。２時間ばかりの昼寝の後、Ａ沢を下降。グリセード発奥又池ＢＣへ。午後は三流カメラマン氏、大活躍の場となる。

６月１５日（晴後曇）

○４峰正面松高ルート：森、早川

○４峰正面甲南ルート：松本、田口

甲南ルートは我々の憧れであり、甲南山岳部に入部した以上、一度は登って見たいルートである。

６月１６日（曇）

○北壁〜Ａフェース：森、早川

○三峰リッジ：松本、田口

いまにも降り出しそうな空模様だったので、北条、新村ルートはあきらめる。夜は例によって撤収エッセン大会。

６月１７日（曇後雨）　奥又池ー上高地＜タイム不明＞　撤収の準備をしていると、ポツリとやって来た。未練が残らなくてよい。下山のピッチはいつもの如く、快ピッチ。　（松本）

……

◎　７２年夏山定着合宿：剣岳真砂沢　（７月１６日〜２９日）　森４、山本４、Ｌ松本３、中野２、中沢２、田口２、早川２、西村１、松下１

７月１６日　１１：０５発「立山４号」で大阪発

７月１７日（曇）　室堂９：３０雷鳥10：45別山乗越１２：５５〜１３：４５剣沢小屋１４：３５真砂１５：５５　室堂は毎年、大きく変わり驚ろかされる。みくりが池へ縦走用食糧をデポし、真砂へ向う。

７月１８日（曇）　雪上訓練（長次郎雪渓）

７月１９日（晴）　○六峰Ａフェース：山本、中沢、○Ｃフェース：森、田口、中沢、○雪上訓練（三ノ窓雪渓）松本、早川、西村、松下

７月２０日（快晴）　○六峰Ｂフェース・八ツ峰上半：松本、中野　○チンネ白嶺〜ａ・ｂ：森、中沢　○源治郎尾根：山本、田口、早川、西村、松下　○南壁Ａ２：田口、早川

７月２１日（快晴）　○チンネ左下カンテ〜ｇｃｄ：松本、中野　○中央チムニー〜ａ・ｂ：山本、早川、○八ツ峰縦走：森、中沢、田口、西村、松下

７月２２日（晴後雨）　沈澱。

７月２３日（雨）　　沈澱。雨の沈澱があってやっと夏山の気分が出てくる。

７月２４日（曇）　大窓遠足：ＢＣ５：５５北股谷出合６：４５池ノ平小屋７：５０大窓コル９：５５〜１１：００池ノ平山１４：００池ノ平小屋１４：５５二股１５：５５ＢＣ16：40

７月２５日（快晴）　○六峰Ｃフェース：山本、松下、松本、中沢、西村　○Ｄフェース：森、中野、田口、早川

７月２６日（快晴）　あまり米を食べすぎたのか、不足してきたので松本、中野室堂まで補給。○雪上訓練（三ノ窓）

７月２７日（曇後快晴）　○剣尾根（$R_{10}$より）：森、中野　○大タテガビン・中のガビン沢：松本、田口　○下の廊下遠足：山本、早川、西村、松下　◇大タテガビンパーティーは、黒部別山南尾根$P_2$の頭で、下の廊下パーティーは仙人湯でそれぞれビヴァーク。

７月２８日（快晴）　○中のガビン沢隊：$P_2$の頭～ハシゴ段乗越～ＢＣ　○下の廊下隊：仙人湯～二股～ＢＣ

７月２９日（曇）　撤収。雷鳥で女子パーティーと合流。

◇後半の縦走及び岩登りは前記。

……

◎　冬山偵察：朝日～白馬　（１０月７日～１０日）　Ｌ松本３、ＳＬ平井３、西村１、松下１

１０月７日（晴）　元湯出発９：４５越道峠１１：５０北又小屋１３：０５　元湯～峠～北又小屋間の雪崩の危険な斜面を偵察。

１０月８日（快晴）　小屋出発６：０５ブナ平９：００夕日ケ原１２：２０朝日小屋14：00秋のムード満点のイブリ坂を、落葉を踏みしめ登る。木ノ子豊富。夜、ジャコビニ流星群、待てど姿現さず。寒空の下、高所用アルコールすべて飲み乾す。

１０月９日（曇）　小屋発７：１０雪倉岳頂上１１：００三国境１３：３５白馬岳頂上１４：０５～１４：２５白馬大池１６：１５

１０月１０日（快晴）　大池発６：５５天狗原８：００山ノ神１０：２０甲南ＷＶ親沢ヒュッテ１２：３５

……

◎　明神東稜～奥又白池　（１０月１２日～１３日）　Ｌ松本３、朝倉２

１０月１２日（快晴）　上高地ーひょうたん池

１０月１３日（快晴）　ひょうたん池ー明神岳ーＡ沢ー奥又白池　井上ら３名と合流。

……

◎　奥又白岩登り　（１０月１２日～１５日）　Ｌ井上４、早川２、村田２　（１３日より、松本、朝倉合流）

１０月１２日（快晴）　上高地ー奥又白池

１０月１３日（快晴）　四峰甲南ルート

１０月１４日（晴）　○右岩稜～Ａフェース：井上、早川　○北壁～Ａフェース：松本、朝倉、村田

１０月１５日（晴）　松本、朝倉下山。○北条・新村ルート：井上、早川、村田。登攀後、井上ら３名も下山。

◇天候に恵まれ、楽しい山行であった。奥又の池もだんだん汚なくなっていくのは悲しい。ゴミは下まで持ち帰ろう。

……

◎　冬山荷上げ・偵察　（１１月１２日～１５日）　Ｌ松本３、早川２、村田２、渋谷１

１１月１３日（曇）　ＷＶ親沢ヒュッテ着１０：４０　スキー、シールをデポする。

１１月１４日（晴）　ヒュッテ発６：４０天原１７：３０

１１月１５日（雪）　天狗原７：３５栂池ヒュッテ９：２５東急山荘１０：５０

Ｌ平井３、朝倉２、田口２

１１月１３日　蓮華温泉

　　１４日　蓮華温泉ー朝日ー蓮華温泉

　　１５日　下山

◇冬山縦走のエスケープルート偵察。下山路としては不適格。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◎　八甲田スキー　（７３年３月２６日～２９日）　Ｌ松本３、井上４、西村１

（行動記録は山岳寮に記載）

## 甲南山岳会名簿

# 山岳部部歌

## 山岳部部歌「山の歌」

（旧文4回）
伊藤　愿　作詞
橋本国彦　作曲

1. 黎明の御空に聳ゆる峯は
　　瓔珞纏う久遠の姿
　連る山脈渺茫として
　　紺青の空玲瓏に照り
　栄は希望に心は躍る
　　これこそ我等が憧れの山

2. 嗚呼永劫の時の歩みに
　　変らで立てる沈黙の峯よ
　嵐は去りて白日の下
　　陽炎燃えて頂上に舞う
　我等が叫び虚空に響き
　　厳に立つ山岳の霊

3. 静かに夕陽落ち行く辺り
　　あかがね輝う山端の梢
　黄昏漂う谷間の木蔭
　　星の光の漏るる岩窟
　自然を己が揺籃として
　　彷徨う我等が憩いの褥
　　彷徨う我等が憩いの褥
　　ベルグ　ハイル!!

## 山岳部部歌「雪の歌」

（旧文4回）
伊藤　愿　作詞
（旧理4回）
石原徳春　作曲

1. 荒ぶ吹雪は静まりて
　　嵐は山に落ち果てぬ
　今し輝く山脈に
　　明け行く銀の雪野原
　流光高く際涯なく
　　樹氷映ゆる朝明

2. 陽はうららかに輝きて
　　歓喜胸に溢れ来る
　スキーを抱く男の子等の
　　心躍るや雪の山
　光と雪の舞うところ
　　白い広野の雪滑り

3. 夕陽西に茜して
　　山の彼方に消ゆる時
　雪の野末は黄昏れて
　　薄紫にうすろえば
　スキーの群は雪に浮き
　　夕べ静かに辿るかな
　　夕べ静かに辿るかな
　　シーハイル!!

# 編集後記

今、うず高く積まれた原稿の山を前に、これで落着いて冬山へ行けると、一安心しているところです。時報、部報の類は忘れた頃に発刊されるそうですが、あまり何年も出さずにいると、山行記録の収集、掲載で精一杯となりかねません。せめて、2年に1度位の割でも発刊するように努めたいものです。

◇　◇　◇

「時報12号」発刊は、昨年度より原稿依頼をはじめましたが、思うように集まらず、2年越しの編集となりました。お忙がしい中、多くの記録をまとめて頂いた、山本OBに励まされてどうにか発刊に漕ぎつけました。1968年度から72年度までの報告と、本年度行なわれたカナダ・ロッキー山脈登山に関する報告もあわせて掲載してあります。今後の「時報」にもどんどん海外の山の報告を見たいものです。

◇　◇　◇

毎年、毎年、部員が入れ変わるという、大学山岳部の欠点を補うものが山岳部のもつ"伝統"であり、その"伝統"とは、1年、1年の積み重ねに他なりません。その積み重ねも、ある期間ごとに1区切りをつけないと土台のしっかりしないものとなります。部の流れに一つの区切りをつけ、後への土台となるものが「時報」です。又、近ごろの我々登山者には、山の思想というものがないようにも思われますが、部員各自の"思想"が現われるのが「時報」であるとも言えます。果して、「時報12号」からどんなものが伝わって行くでしょうか。あつて、無きが如きの伝統とか、まったくバカ化た権威に惑わされる事なく、新しい伝統を積み重ねたい。そして、その土台の頂点はというと、8000mの頂か、南極大陸の山々かもしれないし、古里の1000mにも満たない山々であるかも知れない。山登りに対し、そのいずれにも限定していない。これが我部のカラーであります。

◇　◇　◇

編集を終えた今、山行を終えた後に感ずる、あの独特な気分と同じ気持ちを味わっています。何事にあたっても、尻ごみしているより、やって見るべきだと痛感している次第です。

尚、編集は、早川、西川、中辻、渋谷、吉松がカットは早川、西村が担当致しました。

◇　◇　◇

最後になりましたが、「時報12号」発刊に際し、快く財政面の御援助を下さいました広告主の方々、並びに御援助、御協力頂きました先輩諸兄に心から感謝すると共に、今後ともよろしく御指導を御願い申しあげます。

ベルグ ハイル!!

S48・12・17・部室にて

松本記

山のようなさわやかさと
新鮮さを御送りする

洋菓子の店

# チロル

東灘区岡本３丁目12－11　TEL 431－9892

好日山荘
KOJITU
サンコージツ

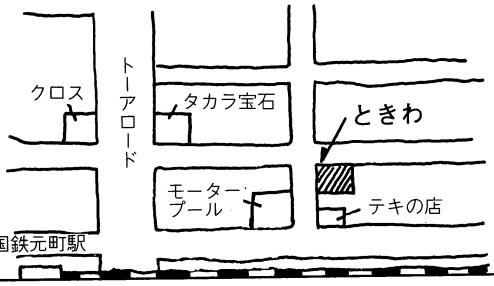
ドアロード店　391－4804　玉木
三宮店　331－5251　玉井
加納町店　241－1128　岩崎

「雪・岩・太陽」
ともに　語ろう

讃岐名代手打うどん

山女すいせん

# ときわ




鉄道保安工事

# 旭電設興業株式会社

代表取締役　中辻介朗

大阪市東淀川区十三西之町５丁目27番地
TEL 06（303）３１４１代

## 装備をへらせ・時間をかせげ

# アルファポが山行を変える

お湯を注いで15分、ホカホカのご飯ができあがり

**尾西食品株式会社**

本社　東京都港区三田4-15-36メゾン・ド・聖坂内
東京(452)4020
大阪　大阪市東淀川区新高南通2—9　大阪(391)5901
富山　富山市牛島新町３番28号　富山　(32)5935

**お求めは全国有名スポーツ用品店で……**

# 山

の装備はいつも万全!!
安心してご使用戴ける
トモミツ製を!!

TOMOMITSU T.H.K KOBE JAPAN

**登山用品(岳人)専門縫製販売**

**有限会社**

# トモミツ縫工

〒658
神戸市東灘区魚崎北町1丁目6—10
TEL　078—411—０２８７

**最古の伝統**
**最新の用具**

**山とスキー専門店**

**株式会社　好日山荘**

**大阪本店**
大阪市北区曽根崎上１—47
〒530　TEL　(06)　364—0933
梅新東交叉点　東北角
**セルシー店**
豊中市千里中央　セルシー1F
ジョイランド内
TEL(06)　833—０１２３
**福岡店**
福岡市博多区徳崎町１—４
〒812　ＴＥＬ(092)281—3440

学生に安い店

# LOOK!

まずロッジの商品をご覧ください

# ONLY!

ロッジは関西唯一の山とスキーの専門店です。

# DASH!

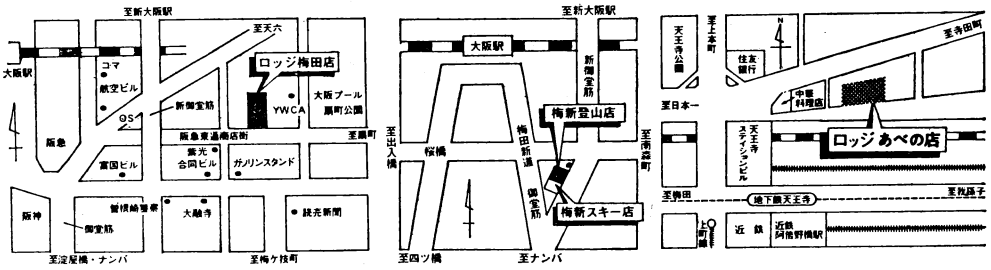
さあ山とスキーの新ルートへ突進

# GOOD!

選び抜いた商品を豊富に揃えています。

# ENJOY!

ロッジの商品で山とスキーをたっぷりお楽しみください。




## 関西唯一の山とスキーの専門店です

山とスキー専門店
株式会社ロッジ®

■梅田店(登山・スキープロショップ)
阪急東通り商店街東詰(大阪市北区神山町77)
☎06(361)9592代

■梅新店(登山・スキープロショップ)
梅新東交差点南西角(大阪市北区神明町31)
●登山店 ☎06(364)5081
●スキー店 ☎06(365)1245

■あべの店 天王寺ステーションビル北向い
大阪市天王寺区堀越町119猪木ビル1F
☎06(779)5253～4

■浜松店 浜松市常盤町93☎0534(53)0848代

**社員募集 男子**

ファイトあるあなたを求めています。

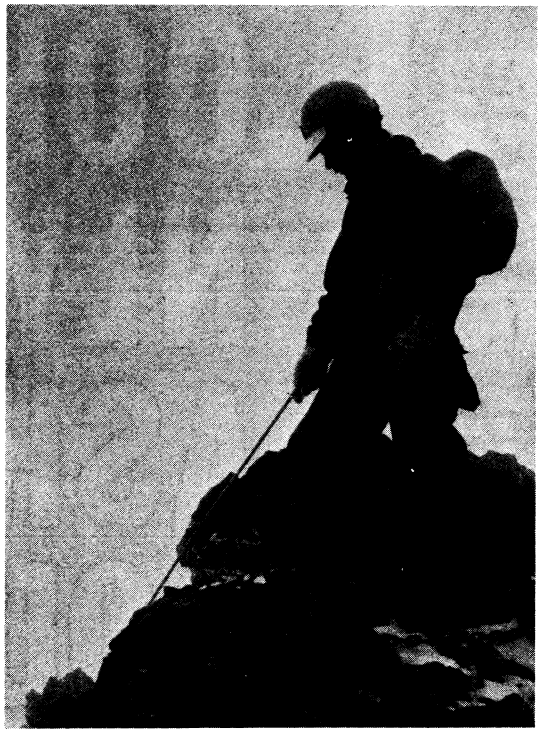
年令25歳まで。
履歴書送付ください。
面接日通知いたします。

岳人の憩いの場

喫茶

ジナンボー

阪急六甲駅２階
TEL(871)0633



虎　重

山本食品興業(株)

本社　西宮市川東町三番八号
TEL　0798　(34)0030 (代)

営業直売所　神戸そごう地下食品部直売所
神戸高速構内高速そば
国鉄関西高架(株)三宮店
国鉄鶴橋駅デパート・レストラン　虎虎

# 金属機械貿易株式会社

取締役社長　吉　松　正　彦

**本　　社**　大阪市北区神山町41番地の6
**東京営業所**　東京都港区芝四丁目十番五号
**九州営業所**　北九州市八幡区諏訪町1 産業ビル内
**工　　場**　高槻市柱本1丁目103番地の 4

## 山の音楽は

# 大　蓄

レコード豊富に取りそろえております。

TEL 078－331－2680

# 西川会計事務所

所長　西　川　春　一

〒550
大阪市西区土佐堀通１丁目23番地
（敬明ビル本館）
電話（06）443－３８８１　（代）

# 有　馬　商　会

茨木市園田町３－５

ＴＥＬ（0726）24－0167

## アルバイト求む

**期　　間**　年　中

**作業時間**　８時30分～17時

**日　　給**　４０００円　　経験者優遇

— 時　報 12号 —

昭和49年2月　日印刷
昭和49年2月　日発行

編集者　松本好博

発行所　神戸市東灘区岡本町8－9
甲南大学山学部

印刷所　守口市大枝西町54
石川印刷